
裏 VS 表

一色彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏 VS 表

【Nコード】

N5677X

【作者名】

一色彩

【あらすじ】

最近夢見の悪い十八歳の少女、赤石カエン。卒業式を終えて、親友二人とさあ帰ろうとした矢先——なんと夢に見たあの世界へ来てしまった!?

夢で何度も見たデカい城……守り神……姫様の妹……そして、あの美しい青年。

物語のすべては、二代目魔術師の意のままに——カエン達三人の、摩訶不思議なお気楽冒険ファンタジー。

第一話 ？

大きな泉に囲まれた巨大すぎる城。

……それを、さらに大きな森がそれを囲み、その森を遠くまで囲むのが、旅人や住民が行きかう盛んな城下町——それ全体を、人は、オフガイアと呼んだ。

その、オフガイア周辺を領土としているのが……オフガイア家。城に済む王族だ。

人語を理解する魔物や、妖精、人獣や精霊までもが寄り渡るとして、とても変わった町だったオフガイア。

世界でもっとも安全と言われ、誰もがこのオフガイアへやって来る……昔からここで住む人々も、とくに気にしておらず、まさにココこそが“誰もが平等”と感じさせる——そんなところだった。

まさかそれに、亀裂が入るだなんて……誰が思っだろう。

—— オフガイアでもっとも高いと言われる、塔のてっぺん。

城からしか行けないその場所は、泉の中央近くにあり、まるで祭壇のようにも見えた。

だがしかし、そこは大罪人を裁くための……死刑場だった。

泉に住む、オフガイアの守護神……その御前で刑を執行されることによって、魂が浄化されて、帰るべき場所へと還っていく。

昔から言い伝えられたことだ。

しかし、先ほど言ったとおりココは、世界でもっとも安全なオフガイアの領土……死刑を執行されるような犯罪を、まず起こすことができなかった。

そう、できなかった——はずだった。

……しかし、それは起こってしまった。

誰が予期できただろう——まさか、そのオフガイアを世界一安全と呼ばせる事となった……原因の人物のうちの一人が、実の妹であるオフガイア家の娘を、殺そうとしただなんて。

今、この死刑場には、大勢の人が集まっていた。

騎士団や兵士達、メイド達や執事達……それに、王とその妃に、殺されかけたお姫様。

そして、神に捧げるお供え物のようにして地面に倒れている少女こそ——王族であるはずのオフガイア家長女、ルビィ・ブレード・オフガイアだった。

地面に力なく倒れる少女は、ありとあらゆる封印魔道具を無理やり見につけられており、まるで死んでいるかのようにだった。

誰もが信じがたく、認めたくない光景。

多くのものがうつ伏せて、涙を堪える者、また、すでに涙を流している者がいた。

世界は、平和だった。

否、“オフガイアだけは平和だった”、だ。

誰が予測できただろう？

誰が予言できただろう？

誰が予想できただろう？

——そんなもの、誰もいなかった。

この人さえいれば、絶対的な平和がココにあるのだと……皆がそう信じていた。

……誰も、わかるはずなど……なかった。

「——ルビィ・ブレード・オフガイアの罪状……実の妹——王家の娘を殺害しようとした事により……こ、これから……死刑を……」

死刑執行人であるはずの初老の男性は、それ以上言えず——泣き崩れるようにして、横にいた兵士の一人に支えられ咽び泣いた。

それを見て涙を堪えていた者はつられるようにして泣き出し、元から泣いていた者は……同じように泣き崩れる。

誰もが望まぬ、この死刑。

オフガイア全体——いや、世界のほとんどに愛されていたであろう者の死。

予測なんて、するはずがなかった。

もう一言も発せられぬ様子の男性に変わり、王が一枚の紙を男性から譲り受けた。

しゃがみこむ男性にあわせて屈んだ王は、その者の肩を叩き、再びゆっくり立ち上がる。

目を逸らしたくなるような格好をする実の娘を、見つめながら。

「これより……、死刑を、執行する。王家の死刑の場合は、その

者に一番近い存在——血族を除く——その者をよく知る存在に、やってもらう決まりだ。……ダイヤ、頼んだ」

一番近い存在に、その者の命を奪わせる。それは、皆を守る側であるはずの王族罪人に、反省をさせるためらしい。

……だが、それは一体、本当に罪人だけの罰と言えるのか？ いや、それだけなはずがない。い

命を奪うものは——強制的に、背負ってしまうのだ。

親しい人の……これから生きるはずだった命と——想いを。

だからこそ、それが嫌だからこそ、王族で罪を犯すものはいなかった。

誰一人と。

——名を呼ばれた、俯いていた一人の美しい青年は……ダイヤのように輝く瞳を潤ませて、ゆっくりと顔を上げた。

そして、その姿と捉えた瞬間、再び瞳には透明な雫が零れ落ちる。

昨夜まで、涙を流していたのだろう。

絹のように美しく白い肌のせいかな、とてもわかりやすく、目の周りが赤く腫れ上がっていた。

それを見た罪人の少女は、誰にもわからないように、薄く微笑んだ。

——泣き虫は、なおってないな。

そう、思いながら。

「……何故、ですか」

青年が、小さく囁いた。剣を構え、罪人の少女に近づきながら。

「何故っ……裏切るの、ですか……！」

今度は、皆にも聞こえるように。

青年の悲痛の叫びは、とても痛々しいものだった。

それを聞き、もうこの場にいる全員が、悲しみに涙を流している。

——ただ、一人を除いて。

少女は、活目する。

青年も、父親も、母親も、すべてを無視して“そいつ”だけを見る。

自分が……罪人となってしまった原因である、妹を。

——妹は、笑っていた。

涙を流す父と母の後ろで、誰にも気付かれずに。

決してそれは罪人に同情するような笑みではなく、はたまた無理やり浮かべた悲しみの笑みでもなく……本当に、心の底から喜んで
いるようで。

——どう考えても、この場には相応しくない表情だった。

実の姉が死んでしまう時など、なおさら。

ふと、少女は顔を上げる。

すでにそこには、青年ダイヤがおり……泣き疲れたように、少女
を見下ろしていた。

それを逆に見上げる少女は、ただぼうつと待っていた。

いや、待ってみた、かもしれない。

……少女は、わかっているのだ。

青年に、自分を殺すことはできない……それどころか、ここに
いる全員無理だろう、と。

ただ一人、妹を除いては……だが。

妹と認めること事態が憎々しいとても言いたげに、少女はそいつ
を頭から追い出す。

……追い出したとしても、この場に、微笑みながらいるのだが。

こればかりは、しょうがないだろう。

少女は小さく溜息を吐く。

——どれくらい経っただろうか。

おそらく、十五分少々。

青年は剣を構えたままの格好で佇んだまま、一步も動こうとしな
かった。

できるはずないだろう、義理深い青年が……命を助けてくれた恩人に、刃を降ろすことなど。

少女は、それをわかって黙ってみていた。

もう少しだけ、見たかったのだ……近くで、その、惚れた男の顔を。

その、宝石のように煌く……美しい瞳を。

もう、見ることはできなくなる。

だから少女は、今だけと心で念を押して、じっくり眺めていた……その青年の一つ一つを、忘れないように。

——そして、二十分が経った頃。

少女はこれくらいにしておこうと、視線を下げた。

“もう……行こう——私は、自分でやらなければならないことがある。

これから、沢山あるのだ。

きっとそれは……想像を絶するほど辛いだろう——とつてい一人
でなんかで、できるはずもない。

でも、やらなければ”。

——少女は心でそう呟いて、勇気を奮い立たせた。

いつも、そう。

少女は守る側で、守られる側ではないのだから。

少女も、それに疑問は持ったことがない。

辛いとも思っていない。

それが、当たり前なのだから——

だから少女は、何も言わず……皆を守るためならば、“汚名”すらも被るのだ。

ただ、多くの人の幸せを願って……少女はただ一人、不幸せに向かう。

少女はひたすら……念じた。

私を疑え。

私を悪だと思え。

そして、他を疑わずに……変わらず生きてくれ。

それが今、皆にできる最善のことであり、そう思わせることが……私の役目——いや——使命なのだから。

そう願い終えたあと、少女は、封印魔道具を瞬時に破壊した。

己の魔力を爆発させて。

騒然とする暇もなく、少女は青年の掲げる剣を奪い取り、風の魔法で青年を吹き飛ばした。

そして剣を携えたまま、少女は祭壇を駆け上がり——端へと躍り出る……一つ一つの景色を、忘れないように。

少女は思い出深い故郷をそこから眺めた。

泉の周りには、沢山の人達がいた。

人だけじゃない。

魔物も、妖精も、精霊も、人獣もいる——空には多くのドラゴンや霊鳥もあり、それはそれは不思議な光景だった。

きっと、少女を弔いに来たのだろう——少女は、じんわり温くなるのを、肌で感じる。

“そこまで、自分は愛されている”のか……と。

でも、これから少女は、皆を悲しませるだろう事をしなければならぬ。

そうしないと、いけないのだ。

死んだと、思わせなければ——

「剣よ、炎を蓄えよ」

短く唱える。

たちまち剣は燃え上がり、熱気を放ち始めた。

——この剣は、少女が自ら作り上げ、青年に贈った物だ。

魔力を込めれば、それぞれに合った属性を纏う……世界で唯一つの剣。

それを天に向かって掲げ、少女は大きな声で叫んだ。

「私は諦めない！ 命に代えても、その目的を果たして見せよう！ 束の間の休息を存分に味わうがいい、愚か者め！！」

——そして。

少女は、その燃え盛る剣を……自ら腹部へ刺した。

しかし少女は、尚も叫ぶ。

「さらば父上！　さらば母上！　さらばメイド！　さらば執事！
さらば騎士団！　さらば兵士！　さらば町の民！　さらばこの世
界に生きる全ての者！　さらば——ダイヤ——！」

口からは、夥しい血が吹き出す。

服に炎が移り、ちりちりと燃えあがり始める中、少女は剣を抜き
放り投げた。

剣から炎はたちまち消えうせるが、少女はさらに燃え上がる一方
だった。

——だが、少女はただ続けた。

皆に言葉を伝えられる——最後の機会だからだ。

「笑え！ 泣け！ せいぜい無駄で平凡な生活を楽しめ！」

泣きそうになっても、熱い炎で乾いていく……少女は、それがわかっていて、燃やしたのだろうか。

きっと、そうなのだろう。

完璧のため、そうしなければならないから。

「さらば愛しきオフガイア！ 願わくば永遠の国なりて！」

泉の水面が、大きく揺らいだ。

さあ、行こう……私はこれから長い旅を始める。

死と——再生の。

——少女は微笑みながら、振り返って叫んだ。

「さらばだ——憎き妹様よ!!」

轟音とも言える水音。

その後に見れたのは、泉に住む我らオフガイア家の守護神——姿をすっかり現すのは、何万年も前だろう。

誰もが目を見開くような光景だった。

守護神と言うにはあまりにも禍々しく、九つもある頭をそれぞれ見ると、お世辞にも守り神、とは呼べない。

——実際、守り神なのだが。

少女は、守護神を背にして……ゆっくり泉に落ちていった。

その時少女は、九つのうち一つの頭に、視線を向け……ニコリと

笑う。

いってきます、と。

口だけを動かして――

――そんな夢を。

わたくし、高校三年生の少女……赤石カエンは、今日も見ていた。

額に汗をびっしょり浮かべ、苦しそうにもがいては……何かから逃げるようにして、じたばたする。

それを心配そうに、とある一人の少年少女が見ていたなんて……うなされているあたしが知るはずもなく。

ただの夢にもかかわらず、本当に体験しているかのように苦しむあたしは……お決まりになりつつある言葉を、寝起きに勢いよく叫んだ。

「うううううあっちーーーーッッ!」

高校三年、最後の日。

卒業式が先ほど終わり、教室に戻ってから先生の長々とした話を聞きながら……ついうとうとしてしまったあかし。

まあ……こうして、ようやく目覚めたのである。

クラス中の痛い視線を、全身に受けながら。

「……あ」

「あーかーしーやー。お前って奴は、最後の最後まで……クラスメイト思いだなあ？ 喜べみんな。誰もが嫌う旧校舎の掃除は、赤石が引き受けてくれるそうだよ。最後の掃除だ、心してやるんだぞ、赤石あ!」

……またやってしまった。

と、嘆いても今さら遅いわけで。

私は涙をちょちょぎらせながら、がつくりと頭をたれた。

旧校舎の掃除。

それは、旧校舎とはいえ——もう使われていないわけではない。

音楽室とか理科室、科目的室やＡＶ教室などは未だに使われていて——あ、ちなみにＡＶ教室とは、決まっていかがわしい教室でなくオーディオビジュアル？ という言葉を略してあるだけで、映像とかなを見る部屋なんだけど……って、なんだか真剣に説明すると、あたしが怪しく見える……。

とにかく、今その旧校舎には生徒のクラスはないにしろ、様々な教室はまだ使われていると言うこと。

部室にもなってるんじゃないかな？ 部活なんてやってなかったから知らないけど。

そんなこんなで、実はそこ、もっとも嫌われている掃除場所で。

なぜかというと、ただ単に遠いし暗いしジメツとしてるってだけ
なんだけど。

まあ、別にお化けがでるとかそんなのではない。

つまり、大不評な場所の掃除を――何度目かは定かじゃないが――
あたしは、記念すべき卒業式で、やることになってしまったので
ある。

素直に帰らせるよ！！この学校、そういつとこわかってない！
普通卒業式の最後に学校の掃除なんかさせるか？一年二年にや
らせるよっての。

……まあ、文句なんて言ってもどうせ聞き入られるはずもないし。

毎回こんなパターンで、私は掃除をしにいくわけである。

しかし、それも今日で最後。

まじで嬉し涙でそう。

再び長々とした先生のお言葉が始まるのを頭の隅に捉えながら、
私は溜息を吐いた。

そしてふと、斜め前を見た。

こちらを見て、ドンマイと言いたげにこちらを無表情に見る男子と、目が合う。

その前の席には、オロオロと可愛らしく動揺している女子が。

——この二人は、私の親友である。

男のほうが青蓮寺櫟で、可愛らしくてまさに天使と呼んでも過言ではない女の子が、黄泉千世子だ。

通称、イチチーとチヨコ。

保育園、それに小・中・高と同じだったが、基本的仲良くし始めたのは高校に入ってから。

実は同じ家に住んでたりする。

3LDKと、それなりに良いアパートにね。

結構安いけど、いわくつきだから……でもまあ、問題はない。

なんたつて、イッチーはお寺のお子さんだから。

イッチーパワーでなんとかなっている。

はず、だっただけど。

少し前からだろうか、さっきも言った通りあたしは……変な夢を
毎晩——いや、寝るたびに見るようになってしまっていた。

二人も、それは承知している。

だからあたしが寝ていると気付いたら、すぐさま耳をふさげるよ
うにしているらしい。

良いスキルが身についたねホント。

……いや、ほんと申し訳ないと思っているけれども。

そんなわけであたしは、最近二人に言われるようになってしまっ
たのである。

なにかにとりつかれてんじゃない？ と、あたしを馬鹿にしながら
イッチーに。

お寺に行つて袂つてもらいましょう？ と、懇切丁寧にはチョコに。

……あんまり、行きたくないんだけどね。

だって——ほら、自覚もないのにお寺に行つて袂つてもらつなんてさ……まだ現役女子高生には、荷が重いというか。

それを拒み続けたあたしだけでも、なんていうのかな……なんだか、最近、どうも感情の制御が出来ていない。

いきなりイライラしたり、焦りだしたりと。

こう……安定しないのだ。

あたしもさすがに、不安というか……行つたほうがいいのか——、なんて思う。

……踏ん切りは……ぜんぜんまだ、つかないんだけど。

「それじゃあ……これで本当に最後だ。みんな、いいか？ 中に

は就職する奴もいるかもしれん。だがな、人生とは常に勉強だ。授業で受けることには答えはあるが、人生に答えなんてない。人と違っていいから、自分の答えを見つけれ。その答えが、たとえどれだけ人と食い違っていようと、数少ない賛同者もいるはずだ。その数少ない賛同者を、もっとも大切にして生きるんだ。くさいとか言うなよ？　生きるうえで、もっとも大切なことなんだ。誰かのために生きるとまでは言わない。だからといって、自分のためだけに生きるな。自分を含めた、数多くの人のために生きる。わかったな？」

自分を含めた、数多くの人のため。

……それを、なんとなく、夢の中のあの子に聞かせてやりたかった。

詳しい事情はわからないにしろ、明らかに自分を差し置いて、その他のために自分を犠牲にする……あの少女。

——ああ、なに言ってるんだあたし。あれはただの夢だろうに。

……でも、ただの夢だと思えないあたしは……いつたいてうしち

やっ たんだろう？

「それじゃ、委員長。最後の号令を」

起立、と。涙声の少女の声。

もう終わりなんだ。あたしは就職するから、学校で学ぶことは何もない。

これから……先生が言うように、人生と言う問題と隣りあわせなんだな。

答えがでるかもわからない、不安定な問題と。

……最後だし、しっかり礼をしよう。

あたしはそう思い、深々と頭を下げた。

……なんでかな、本当に終わりと思えない。

これから、すごく長い旅でも始まる気分だ。

そんなわけないだろうとつつこみたいけれど。

——みんな、深々と先生に礼をする中。

あたしは心中で何かを感じる。

焦り、恐怖、不安、そして……期待を——

「いままでありがとう、みんな、これからも学べよ！」

そう言っつて、本当に終わってしまった。

次々と先生に群がる生徒を呆然と見やり、あたしは今一度椅子に座った。

あたしの机は、一体誰が使うのだろう？　そして、この先生は今度、どこの担任になるのだろう？　感傷深くなるあたしは、やっぱりどこかおかしいのだろうか。

「最後の最後に、また旧校舎のお掃除になっちゃいましたね、力エンちゃん」

苦笑交じりにそう言って現れたのは、千世子——チョコだ。

「あれだけ寝るなって言ってるのに。懲りないなお前」

そう言って次に現れたのが、櫟——イチー。

毎度の事なんだけど、やっぱりちくつと刺されてしまった。

「悪かったって思ってるよ。そういうわけだからさ、最後の記念と言っことで……」

「手伝わない」

「は、早いっ！　せめて最後まで言わせろよ！」

「わかりきってることだし」

「頼むよー。昨日肩もみしてやったじゃん」

「あれは、高校生にもなつて誕生日に肩たたき券を俺に贈呈したカエンのせい」

「案外やくにたつでしょ？」

「普通にプレゼントをよこせ」

「やーね、よこせだなんて。」

「この毒舌王子め。」

「この顔でこいつ、結構辛辣な言葉を並べるから用心してほしい。」

「あたしやチョコには、まあそれなりのしゃべり方だが、他の人に對してはかなり言っただよね。」

「あー、こわいこわい。」

「最後ですし、手伝ってあげましょうよ？　今日はもう何の予定もないですし。ね？」

「うっ！　チヨコ……！！」

君って奴はどこまでいい子なんだ！　あたしが男だったら遠慮なくかつさらってるよ！

「カエンが男なら問答無用で東京湾に沈めてるけどね」

「ちよっ」

どうやら思惑がばれていたようだ。

チヨコのことになるとすぐこれなんだから……毒舌王子じゃなくて色恋王子とよんでやろうか。

怖くて言えないけど。

なんて感じでぐだぐだ話していたら、先生が「さつさと掃除に行け！」とおっしゃったので、あたしはすぐ旧校舎に向かっていった。

もちろん、嫌がるイッチーとやさしいチョコをつれて。

「さーで、旧校舎についたということぞ……」

「いつてらっしゃい」

「イッチー、あたし泣くぞ」

「泣け、叫べ、そして逝け」

「……誤字だね、それ？」

そう願いたい。

「櫟くん、手伝いましょう？ 三人でやれば早いですし……」

「そーだそーだあ」

「……」

イチーは恨めしそうにあたしを見てから、一緒に旧校舎へ入った。

旧校舎の掃除とは言え、掃除する場所はまだ使われている部屋だけだ。

使われていない部屋はそのまま、部室などは部員がやっている。って言っても、数えても十室以上あるので、かなり多い。

だから、普通に考えて一人でできる多さじゃない。

つまり、不真面目な生徒が掃除させられる場所と有名なのだ。

……別に私は不真面目じゃないけどね！

「じゃあ、私は音楽室から」

「しかたないか……俺はＡＶ教室から」

「ITCHーETCHー」

「埋めるぞ」

「あたし理科室いつてきマース」

そそくさとITCHーから逃げて、あたしは理科室に向かった。

ここから少し離れたところなので、行くのが大変だ。

階段も上らないといけないしね。

溜息を吐きながらすすむあたしは、腕を振り回しながらのんびり歩いた。

どうせ急いだって時間はかかるんだし……ゆっくりでいいだろう。

体力も温存したいし。

そうやってのんびり歩いていたら、ちょうど通りすがろうとしていた教室から、物音が聞こえた。

たぶん、いや絶対、使われていない教室から。

しかも……女の、すすり声？ 見たいな感じの声と一緒に。

……。

ここで、あたしが思い至ったのは二つ。

霊的なものか、はたまた……強制的ギシギシアンアンをされて、放置された女の子がいるか。

とてもよろしくない想像だが、ぶっちゃけこつというのが数件、ここで起こっている。

なんたって、人通りが極端に少ないからね。

とくに放課後なんて。あたしも二、三回、目撃しちゃっている。

「……っ」

踵を返そうとして、私は立ち止まる。

中にいる女の子の声が、本格的に泣き始めたからだ。

うわわわ、どうしよう。

かなり泣いてる……助けなきゃ、だよな？ でもでも、もし……幽霊とかだったら？ 助けようとしてあたしがポツクリ逝ったら、しやれにならないよ……！

一応……イッチーを呼ぶべき？ お寺の人間だし、万が一強姦魔だとしても、イッチーは男の子なわけだし。

いざとなれば、女の子を救出してイッチーを生贄として捧げればいいんだし。

いや、酷いかもしれないけどさ。

まあ女の子を優先という感じで。

……うん。

一度、チラッとだけでいいから、確かめてみよう。

人がいたなら——一人だったら介抱してやればいいし、強姦魔っぽいのがいればイッチー呼べばいいし。

いなかったら……うん、脳内消去と言う形で忘れてしまおう。

お得意のスキルだ、なんとかなるだろう。

よし。

あたしは、そろりと扉を開ける。

極力音を立てないよう、静かに。

そして……私は、見る。

いや、見てしまう、かもしれない。

——床に屈みこむ、ドレスを着た……真っ赤な髪の少女を。

「ぎゃあああああつ！！」

ずささつと後ずさり、あたしは反対側の教室に背を強く打った。

背中が痛い……ってそれどころじゃない！ えと、あれは、いや、どう見ても、この世のお方ではないというかつ……。

だって、赤毛にドレスって！ この学校には演劇部なんてないしっ、その！ しかも、しかもだよ！ 見間違いじゃなければ、今は——！！

「どうした！？」

ここから比較的近い教室にいたイチチーが、何事かという風に慌ててやってきた。

こういつ時は、本当に頼りになる奴だ。

って、よれより。

「ゆっ、ゆっ、幽霊！ もどき！」

「……。もどき？」

「知らないよー！ 幽霊なんて見たことないし！！ 赤毛の、ドレスを着た、お、女の人がつ！」

あたしが愕然としながらイッチーに説明しているところで、悲鳴を聞きつけたチヨコも走ってやってきた。

「どうしたんですかっ？ そうとう大きな声が聞こえてきましたけど……」

「さあ。カエンは……幽霊を見たって言うてるけど。そんな気配はとくにしてないな」

「そんなことないよ！ だってドレスだよ！？ 赤毛だよ！？ すすり泣いてたんだよ！？」

二人が、あたしを見て沈黙する——そして。
爆笑した。

「ちよっ！ 笑うとこ！？」

「ごっ、ごめんなさい……ふふっ……」

「あー、久々に笑った」

「無表情で何を言うかこの毒舌霊媒色ボケ王子が！」

「お前どうせ、鏡でもみたんじゃないの？」

イチーにそう言われ、あたしはハタと気付く。

そう——言っていなかったが、実はあたし……髪の色がそれはもう真っ赤なのだ。

染めているとかではなく、地毛なのだ。

あたしは二年前……この高校に入るちょっと前に、大事故に遭った。

生きているのもおかしいと言われるくらい、すさまじい事故。

当のあたしは……事故のショックだとかで、その内容を一切覚えていないのだが。

……その影響か、その日から髪の毛が真っ赤に染まってしまっていて。

よく言う他国にいる赤毛ではなく、それはそれは鮮明すぎる赤。

原因は不明。

事故の内容としては、医者の話によると……ビルに大型トラックがつっこみ、それで火事が起きたと。

不運にもそのビルにいたあたしは、なんとか屋上に逃げ込んだものの……足を踏み外して、ビルから落ちてしまったんだとか。

しかも落ちた先がその問題のトラックで、轟々と燃える中あたしはそれにつっこみ、突き出ていたパイプに腹を刺され、あたしが落ちた衝撃で大爆発が起きた、らしい。

ほんと、話に聞くだけでもよく生きていたもんだ……と感心する。
その代償だと思えば、こんな髪もいいか……とは思うが。

しかし——最近あたしは、思う。

やけに……あの夢と、リンクしているのではないかと。

高いところから落ちる、燃え上がる、腹を刺される……時系列は若干違うが、とにかく考えるだけでぞつとした。

まあ、夢のことを医者に一度相談したときは、事故のショックで幻想を見ているのだろうとは言っていたが。

……どうも、釈然としないんだよね。

そんな感じで……あたしの髪は、鮮やかな赤毛ではあるのだが。

先ほど見た……その、幽霊？　さんは、なんていうか……あれなのだ。

ほら。

“夢に出てくる少女”に……似ていた気がするわけで。

それは二人には伏せつつ、あたしはだんだん落ち着き始めた頭で、考えながら言った。

「鏡……そう、鏡か。そうだね。そう……かもしれない。けどさ、すすり声はほんとに聞こえたんだよ！ ドレスを着ていたかどうかは……その、見間違いもあったかまだけど。怖いから、もういっぺん様子見ない？ もちろんイッチーが先頭で」

「……はあ。仕方ないな」

溜息を吐きながらも了承してくれたイッチーに感謝をしつつ、イッチー、あたし、チョコの順で、再び中へ入った。

今度は、そろりとはなく、一気に開けて。

そして、あたし達が見たものとは。

「……鏡だな」

「……鏡ですね」

「……鏡だったみたい」

上から順に、イチー、チョコ、あたしが——そう呟いた。

開けて見たのは、等身大の豪華な鏡で。

あたしの見間違いでした、と言わざるを得なかった。

……おかしいなあ、じゃあ、あの泣き声はなんだったんだろう……
……？

「人騒がせだな。だいたいお前はいつも——……はっ？」

「大きな鏡ですねえ、とっても綺麗……えっ？」

あたしってなんでこんな馬鹿なんだろう、と思っている矢先。

何故か二人は鏡を見つめたまま、固まっていた。

言おうとしていたはずの言葉も……飲み込んで。

私はその視線の先を覗く。

「っ……でた……!!」

今度こそ、嘘じゃなかった。

そこには、その鏡には……たしかに人がいて。

赤毛の少女が、背を丸めて泣いていた。

あたしは、腰が抜けたようにその場に尻餅をついた。

そして、叫ぶ。

「赤毛のお姫様がッ!!」

「お、俺が……!」

「私がつ、男の人を踏みつけてっ!」

え? と、三人で顔を見合わせる。

「いや、赤毛の姫様でしょ? すすり泣いて、背中丸めてさ……
ほら、ドレス着て」

「……、俺は、俺自身が見えてるけど。女をナンパしてる。声も
聞こえる」

「わ、私は……女の人を踏みつけている私がいいます。この意気地
なしがつて、言って笑ってますよ」

……数分間、沈黙した。

そして、何回かその鏡を見やる。

——やはり、そこには赤毛の少女しか見えなくて……どうい
うと、だろう？ 明らかにおかしい。

あたしには、あの、夢の中の住人である……赤毛の少女が見えて

イチーには、女の子にナンパしている自分が見えて、チョコに
は、男を足蹴にしている自分が見える。

そう考えたところで、あたしは謎がパチンツと解けた。

「願望を見せてるんだ！」

「……願望？」

イチーが怪訝な顔をして、聞き返す。

「そう、願望！ 実は心の中では、イチーは女の子をナンパしたくてたまらないんだ！ そしてチョコは、一度でいいから男を足蹴にしてみたいと言う願望が……！」

「……じゃあ、カエンはドレスを着てすすり泣きたいんだな。叶えてやるうか」

「すいませんでした」

即座に謝った。

「……いい案だと思ったんだけど……」。

違うのか。

「……違うよね。」

「じゃあ、いったいなんだろうな」

「……考えても無駄だろうな。俺達にわかりっこない。今日はもう掃除の気分じゃないから、帰ろう」

「そうですね。先生には申し訳ないですけど、最後ですし、そんなお茶目も許してくれますよ」

見慣れてしまったのか、力なくその鏡を見るあたし達。

……そうだね、わかりっこないか。

うん、わすれてしまったほうが懸命かもしれない。

まあ、貴重な体験をしたとだけ胸に刻んでおけばいい。

あたし達は、鞆を取りに行くため教室へ戻ろうとした。

しかし、三人一緒に、鏡に背を向けたとき……それは起こった。

——がたっ、と。

何かが動く音。

そして……動きを止める、あたし達。

横目でチラリとITCHーに視線をやれば、さすがのITCHーも顔が強張っていて。

チヨコにも視線をやる。

……思ったとおり、もう泣きそうになっているようだ。

無理もない。

あたしはすでに涙と笑いが浮かんでいるのだから。

さぞ今のあたしは、笑えない顔をしているのだろう。

その証拠に、あたしを見たITCHーとチヨコが、少しふきだした。

……失礼な。

って、それどころじゃないし。

その、いったい……誰が、振り返るのかな、これ。

まあその、やっぱりここは、男の子であるITCHーにお任せしたいところだけねど。

ぶっちゃけ、見なくてもいいんじゃないかなー、なんて、思っていたりもする。

だから、つまり……。

あたしは、息を深く吸った。そして、叫ぶ。

「逃走せよーー!!」

この言葉と同時に、あたし達三人は走り出した。

それはもう、わき目も振らずに。

傍から見たら、さぞ滑稽だろう。

しかしそんなことを気にするあたし達ではないのである。

死ぬ気で走り教室へ戻ってきたあたし達は、肩で息をしながら、震える声で同時に言った。

「寺へ行こう!!」

寺。

もちろん、イチチの実家である、寺だ。

もうそこに行かないと、気がすまない。

ていうか怖すぎるよ!!

そそくさとあたし達は帰る準備を済ませ、極力旧校舎を見ないように学校を去っていった。

「不安ですね……なんだったんでしょうか」
顔面蒼白で相槌をうちながら、あたしは思う。

最後の最後に、やらかしてくれるよこの学校……！ 言いふらしてやる、幽霊旧校舎って！

「ま、まず……お寺に行ったら、櫛くんのお父さんに……」

「いや。父さんは今日、母さんと旅行中だ。じいちゃんに頼むしかない。……すごく嫌だけど」

「ああ、あの特殊なじいさんか」

「櫛くんのおじいさん、うまい棒が好きでしたよね？ 買ってきてきましょうか」

「必要ない。調子にのるから」

「て、いうかさ。まじ、なんなのあれ？ イッチー、そんな気配

はしないとか言ってたじゃん」

「知らん」

「知らんじゃないよ！」

「でも、確かにそんな気配は微塵もなかった。それは確かだよ」

「……じゃあ、あれはいつたいたんだっただろ。考えるとチヨ
ー頭痛い」

「馬鹿だもんな」

「やかましいわ！ てゆーか——」

言おうとした言葉を飲み込んで、あたしは固まった。

今見ている光景が、正しかったかどうかを必死に考えながら。

「なんだよ」

ITCHーがあたしに問う。

ギギギ、と効果音でもつきそうな具合に……あたしはITCHーに視線をやってから、言った。

「あたしら……今、学校を出たばかりだよね……？」

「そうですね？　もしかして忘れ物ですか？」

「そうじゃなくて……その——」

「待った。……なんで俺達、学校に向かう道……歩いてんの？」

……そう、今、私達は——何故か学校に向かう道を、歩いていた。

こればかりは、まじめに三人で青ざめる。

「……いままでありがとう、ITCHー、チョコ。楽しかった……」

「やめてくださいカエンちゃん！　怖いです！」

「おい、後ろ見てみる。すごいぞ。後ろにも学校が見える」

「うわああああああん！！　あたしは二人が大好きだったよ
ー！！」

マジ泣きをするあたしに、それをあやすチヨコ、面白くなったのか、楽しそうにするイッチー。

もうごちゃごちゃだ。どうなってんの！？

『時は、満ちました。終焉が近づいております』

「ごもつとも！　あたし達は死ぬんだー！！」

「ただただ大丈夫です、落ち着いてくださいカエンちゃん！」

「……、今言つたの、誰？」

「はあ！？　イッチーが言つたんじゃない！」

「……俺はあんなに声高くないし」

「……。チヨコ？」

「私よりは低かったですよ……?」

……ああ。

もうダメ。

「アーメン……!」

「カエン、それは合掌だ」

イチーにつっこまれた。

しかし、言い返す暇もなく——その声は再び響く。

『お迎えにあがりました。いざ、裏の世界へ』

「三途の川を渡るには早いとおもいますうううっ!」

「あわわわわわ！ どうしましょう！ 三途の川ってお金がいりますよ？ お金を払わないと、地獄行きです！」

「死んでまでシビアだな！！」

「いつそ三途の川を埋め立てて歩いて渡るか」

「それはそれで最低だな！！」

「泳いじゃ駄目なんでしょうか？」

「きつと、三途の川の下が地獄だ。泳ごうとした瞬間に足を引っ張られるんだろう」

「クルーザーで行こう！」

「私運転できません……」

「俺も」

「高校生にはシビアすぎるだろー！！」

もう騒ぐしかないあたし達。

普通に考えて、今考えるのはそんなことじゃないだろうに……でも、まあ、しょうがないといえましょうがない。

姿のわからぬ声の主も、多分呆れたのだろう。

それ以上はなにも言わず、あたし達を……“下へ”引きずり込んだ。

どぶん、と。

まるで水の中に落ちるような感覚。

上も下も、わからない——わかるのは、唯一つ、ここは水の中でもなければ……あたし達が理解できるような場所でもないってことだけ。

広がるのは——ただの闇。

「いつ、イッチー！？ チョコ！？」

しゃべれる。

ていうか、息もできる。

一瞬、もしかしたら水の中かとは思ったが……服が濡れている様子もない。

ふわふわと浮かぶ中、あたしはじたばたとしながら二人の名を再度呼んだ。

「イッチー……！！ チョコー……！！」

「……カエン？ そっちにいるのか？」

「カエンちゃん！ 私はここです！」

ぎゅっと、服の端っこがつかまれる。

肩には、大きめの手のひらが。

よかった……近くにいたんだね。

でも——何も見えない。

二人はおるか、自分の身体さえも。

暗すぎだろ。

あたし達は、離れないようにと手を握った。

右にイチチーと、左にチヨコ。

絶対離れないように、強く。

「いったい、なんなわけ？　もしかして、あたし達金がないから……地獄に強制送還とか？」

「可能性はあるな」

「うっうっ……慈悲の心が感じられないです……」

「地獄か。どんなところだろうな」

「地獄って言ったら鬼がいるんじゃない？　でっかい金槌もってさ」

「金棒だろ。金槌持ってなにを直すんだ」

「…………あれ？」

「あと、地獄と言えば閻魔様！　きつととても怖い人ですよ…………」

「担任より？」

「数学の村上よりだな」

「お、おそろしや…………閻魔」

話が止まらなくなるのは、あたし達の悪いところか。

あーでもないこーでもないと話しているうちに、だんだん慣れてきたのか、姿が見えなくても落ち着きを取り始めていた。

ま、手もつないでるしね。

…………でも、やっぱり根本的な恐怖がなくなるわけではなく…………。

不安な気持ちは、拭えなかった。

いったい、これはなんなのだろうとか、あたし達はどんな状況にいるんだろう…………とか。

誰かに聞いて答えが返って来るのならば、問い詰めたい。

あたし達は……まだ、生きてるよね？

『ええ、もちろん生きておりますよ』

——と、案外早く答えが返って来たわけだが。

……いや、いやいや、その前に……あたし、今、口に出して言いましたっけ？ 引きつる顔で、あたしは見えないこの場をグルグル見渡した。

間違いなく、あたしは心の中で言ったハズ。

……うん、ハズ。

だけれども、確かにその人物——人かはどうかわからないが——は、あたしの心の言葉に、言葉を返していた。

……冗談抜きで、怖いんですけど。

『申し訳ありません。答えるのをためらいはしましたが、お三方同時に同じ事を考えておられましたので』

「……わーお、あたし達息ピッタリ」

「……ありえん」

「……私達凄いです」

って、本当に聞きたいのはそうじゃなく。

「こっ、ここはいつたい何処！？……ですか」

「弱くなるな強気でいけよ」

「じゃあITCHーが聞けばいいじゃんか！　あたしがオバケの類嫌いなもの知ってんでしょ！」

「大丈夫大丈夫。オバケなんていないから」

「寺育ちの人間がほざくな！ しかも棒読み！！」

「まっ、まあまあ、二人とも、落ち着いてくださいっ」

「ソウダソウダー。短気イクナイー」

「だあーっ！ ムカツクーー！！」

「もー！ 櫟くんっ！ カエンちゃんをからかつちゃいけません
！」

『……あ、あの……そろそろ、よろしいでしょうか……？』

未だ正体のわからぬその人の申し訳なげな声で、あたし達三人はハッとする。

そうでした、ここにいるのは三人だけじゃなかったんだ。

いつまでも三人でこんなことしてたら、馬鹿がバレる……いや、三人というか、今のは二人の言い合いだったけど。

気を取り直したあたし達は、再度質問を繰り返した。

「えっと……だから、いったいあたし達は……」

『どうしてこのような状況下にいるのか、でございますね。その質問は、すぐお答え致しますよう』

目的地に着いたら——そう言うのを聞いたのを最後に。

あたしは……あたし達は、意識を失った。

まるで眠るかのように、緩やかに、闇に落ちるように……。

その僅かな瞬間、あたしは、“何か”を見た。

本当にこの目で見たのか、また、夢だったのかはわからなかった

けれど……。

人が一人寝られるくらいの大きさの檻の中、何重にも巻かれた鎖や、なんて書いてあるのかわからないお札を貼られている、か弱い少女がいて……なんだろう。

凄く、胸が熱くなって、とても泣きたくなった。

それを見つめるだけで、心を引き裂くような痛みが起こって、苦しくて。

“それ”から視線を離そうと試みるも、許されなくて。

目の前がぼやけた。

悲しすぎて、涙が滲んでしまったのだろう。

あたしはホッとしたけれど、煩わしいとも思った。

だからあたしは、涙を拭い、もう一度見る。そのか弱い少女の姿を。

——檻の中心にある、一つの、小さな錠。

真っ黒な炎がそれを包んでおり、とても、危険なものだとわかる。

……アレを、外せれば。

きつと——助けられるのに。

アレさえ、外せることが出来れば——

……でも、あたし、なんでそんなことがわかるの？ アレが外せれば、助けられるって……なんで？ あたしは……？

ふわふわと漂う意識の中、あたしは、最後に一筋の涙を流す。

馬鹿な姉でゴメン、と思いながら——

パチツと、目が覚める。

見たのは綺麗な青空と、小枝にくっついている……………

「クソがアアアアアー！」

何かの糞だった。

「なかなかの反応だな。普通の叫びでなく、あえて暴言ともこの物体の名とも捉える事が出来るあたりが」

「うるさいよってか臭いよ！ 人が寝てる顔の真ん前にやるか、フツー！？」

「やるだろ」

「そうですね！ 去年も七、八回やられた記憶がございますとも！！」

「カ、カエンちゃん…………起こらないでください！ 普通に起こしても反応がなくて…………まるで死んだように静かに眠っていたもので

すから、いつもと違うので、心配になって……それに」

チョコが、手に持ったハンカチを、あたしの頬に当てる。

……あれ。あたし、もしかして――

「また、あの夢を見たんですか……？ カエンちゃん……泣いてます」

そう言われて、なんだか頬が湿っている気がした。

……あたし、なんの夢を見てたんだろう？　なんでかな、全然思い出せない。

思い出そうとしても、なにも思いつかばない。

なんか……凄く、切ないような、悲しいような、苦しいような。

そんな感じの夢だったような、気がする……かな？ うーん、ダメだ、わからない。

……。だから多分、イッチーも、こんな起こし方を選んだのかな……。

この起こし方をされた日に見た夢は……いつも、凄く苦しかった覚えがあるから。

あたしはなるべく二人に心配させないように、笑顔で言った。

「いや……実は、オバケに抱き付かれた夢見てさ……ありや真剣に泣いたよ」

「良かったです……また落ちる夢かと……」

「そう言えば、落ちる夢で落ちる前に起きないと、本当に死ぬらしいな」

「私も聞いた事あります！ だからてっきりカエンちゃんも、落ちながら死への切符を抱えて列車にそのまま乗り込んでしまったの

かと……」

「……壮絶な飛び乗り乗車だなあ……それ、あたし駅員さんに普通に怒られるんじゃない？」

「いや、大激怒だろ」

何時もの感じになり始めたところで、あたし達は立ち上がった。

そして、辺りを見渡す——まあ、深く考えなくても、わかる。

ただの森だ。

木しか見えない。

空は青いし、雲もあって、太陽もある。

さっきの暗闇とは違って、しっかり見えている。

だからこそ、というのだろうか。

なんだか……怪しい気もする。

見た目は確かに、何処にでもある森の中だ。

でも、何故だろう……どこか、次元の違う場所にいるような感覚がするのは。

ただの気のせい？ それだったらとても嬉しいけれど……。

不安すぎる。

あたしは、少しだけ辺りを見てこようと思い、服に着いた土をはらい落としながら、少しだけ歩きだした。

それを、チヨコが慌てながら止めた。

「カ、カエンちゃんっ？」

「大丈夫大丈夫。ちょっとその辺見て来るだけ。すぐ戻るから」

「で、でも……」

「三人で行こう。その方が何かあっても、助け合える」

「そうですね……一緒に行きましょう、カエンちゃん」

そうしてあたし達は頷きあい、一緒に歩き出した。

もちろん、何処に向かえばいいのかなんてわからないから、適当にだ。

でも、そこまで大きな不安はなかった。

やっぱり、三人一緒にいるから……かな？

気持ちいいそよ風に押されながら、あたし達は前に進んだ。

眩しい太陽に目を細めて、手のひらで光を遮りながら、ただ前に進む。

たまに聞こえる小鳥の囀りはどことなく柔らかく、楽しげで。

風に揺られて擦れ合う葉っぱの綺麗な音は、気持ちを高揚させた。

……なんていうのかな、この感じ。

不安……じゃなくて、恐怖……でもなくて。

これは……この気持ちは――

「なんかさ……わくわく、しない？」

「……同感」

「二人ですか？ よかった……そう思ってるの、私だけかと」

あたし達は、声を上げて笑った。

不謹慎かな？ こういう気持ちになるのって。

でも、なんかこう……冒険が始まったっていうか、旅が始まったっていうか。

そんな感じで、気持ちが楽しくなる。

……案外、あたしの予想も当たっていたのかもしれない。

高校を卒業して……あたし達は別々の場所に通うのに、帰る家は同じで。

少し寂しくて、一緒にいられるのも終わりなんだなあって思ってもなんか……終わる気がしなくなって思った。

……うん、きっと当たってたんだな。

今この瞬間から、何かが始まる。

続くんだ——あたし達の、物語が。

そんな気がしてならない。

凄く、わくわくする。

もちろん怖いし、不安もあるんだけど。

それ以上にわくわくが止まらない……。

自然と——笑ってしまう。

「ね、予想当てゲームしながら歩こうよ」

「はあ？ 予想当てゲーム……？」

「カエンちゃん、なんですか？ それ。」

「この世界がもし、異世界だとしてさ。どんなのがあるか、とか、どんな人がいるか、とか！」

「わあ！ 面白そうです！」

「じゃ、カエンから」

「イッチーに促されて、私が笑いながら考える。」

「そして思い付いた事を言った。」

「ドラゴン！ やっぱ異世界つつたらコレでしょ！」

「ありきたり」

「じゃあイッチーは何考えたんだよー」

「全身タイトスの妖精」

チヨコとあたしはふきだした。

「やられた。それは良い予想だわ」

「でも夢がないです……」

「ちなみにタイトスの色は緑だ」

「……それ、どつかのゲームにいたような」

「次、千世子」

「うーん、そうですね……」

「あくまで予想なんだから、深く考えるな」

「はい……あつ、じゃあ、巨大な芋虫！」

「うわゝ、あたしソレ絶対見たくない」

「いそうじゃないですか？」

「そして、その芋虫が羽化すれば？」

「モスラになる！！」

「じゃあゴジラもいるかもしれませんね！」

思い付いたゲームのおかげで、あたし達は案外楽しみながら長い距離を歩けた。

でも、全然変わったものは見えてこない。

ま、しばらくはいいかなーなんて思ったりもするけれど。

楽しいしね。

「予想っていうかむしろ妄想だけど……結構盛り上がるね」

「どうする。本当に全身タイトの妖精がいたら」

「写メってチェンメにするでしょ。一週間以内にこのメールを五人に送信しないと、じきお前もこうなる……とか？」

「私絶対送りそうです……」

「あははっ！ あたしも同感だわ！」

『全身タイツを……ナメないでいただきたい！』

ピタッと、あたし達は同時に固まった。

不自然すぎるくらい前を見つめたまま。

……まあ、あれだよね、そりゃさ……いきなり正体不明の声が聞こえたら、誰だって怖いわけで。

あの不思議な鏡の時と同じだ。

振り向くのがとても怖い。

……しかし、もう逃げるわけにはいかないだろう。

あたしは右隣りにいるイッチーを見た。

……小さく、頷く。

左隣りのチヨコを見る……チヨコは青ざめながらも、小刻みに頷いた。

ほんと、あたし達って怖いくらい以心伝心。

言葉で言わなくても大概は通じてくれる。

ふう、と息を調え、落ち着いてから……あたしは言った。

「せーのっ！」

合図に合わせて、一斉に振り返る。

そして、そこで見たものとは。

「ぜつ、全身……!？」

「タイツの……」

「よ、妖精……さん」

少しの間のあと、あたし達は、それはそれは壊れんばかりに、大爆笑した。

滅多に声に出して笑わないイチチーでさえも、だ。

い、いや……だって、笑うでしょうさすがに！ イッチーが予想した通り——残念ながら緑ではなく水色だったが——全身をタイツに纏わせ、羽が生えた手のひらくらいの人方の物体。

つまり、妖精だけでも。それが、まじで実際にいたなんて！

——しばらく笑いの止まらなかったあたし達は、気の済むまで笑

続けた。

最後の方なんか息が足りなくなつて、腹やら肺やらが痛かったけれど……多分、一生の半分は笑えたハズだ。

とても気分がいい。

欠片サイズの不安や恐怖も、跡形もなく飛んでいつてしまったくらいだ。

それに痺れを切らしたのか、妖精は自らが先に口を開く。

『……まあ、いいでしょう。申し遅れましたが、わたくし、ヴィカと申します。間違いのないように申し上げますが、男です。お三方をこちら……裏の世界へ連れて来た、張本人です』

そう言われて、あたし達は笑いもすつ飛び固まってしまった。

あたしに至つては、驚き過ぎて「ごふうっ」と変な咳をし、鼻水

が出ると言つて女にあるまじき行為までかましてしまう。

えっ、ちよつ、な、なんですと！？ とりあえず聞きたい事は沢山あるけれど……裏の世界って、じゃ、ここ……ほんとに違つた世界なのかー！？

『申し訳ありません。わたくし、今の場所と状態では、殆ど力が使えないのです。ですから、現時点お三方の心を読むのは難しいといますか……』

「……あ、つまり、口で言えつて事だね」

『はい。申し訳ありません』

……随分とまあ、低姿勢な妖精なこと。

「えっと……なんていうか……ねえ？」

「…………え、俺？ ……ああ、まあ…………千世子」

「ここで私にふるんですか？ ……ええと…………その、とりあえず…………私達、なんで連れてこられたんでしょうか？」

そう、それが聞きたかったのだ。

いろいろ起きすぎて、混乱してしまっていた。

いったい、なぜ、あたし達はここにいいのか。

それは——もしかして、だけど…………あたしの見てる夢に、関係しちゃってる…………とか？

…………。まさかね。

『その件につきましては、説明する事はできません。ただ…………言えるのは、これは偉大なる魔術師である、“姫”のお願いです』

——姫の、お願い。

じゃあ、その“姫”って……いつたい。

あたしは、喉元まででかかった言葉を飲み込んだ。

聞きたいのだけど、聞きたくない。

そんな複雑な気持ちがグルグルしているから――

……あたしにとって、姫とは……あの夢の中の人だけで、それ以外に疑うものがなにもない。

そう、だからきつと、もしかしたら気のせいかもしれない。

あたしは小さな妖精の――ヴィカの瞳を、しっかりと見た。

――ドキリとする。ヴィカは、あたしを見据えていたからだ。

「あ――え、っと」

言葉につまる。

言えない、言いたくない……。

関わりたく、ない。

頼むから、何も言わないでくれ——あたしの、あたし達の普通の生活を……奪わないで。

——それが、伝わったのだろうか。

ヴィカは、何も言わず……あたしから視線を逸らした。

『まずはこの世界の仕組みからお話致しましょうか。長ったらしく説明すると理解を拒まれるでしょうから……短めに』

そして、小さな妖精は語る。

この世界の成り立ちと……歴史を。

それは、昔話を子供に聞かせるような気楽さで……時々懐かしむように――

――昔々、そのまた昔、世界がまだ……一つだった頃の、お話。

裏と表と呼ばれた二つのこの世界には、それぞれ似通った顔の人間が一人ずつ住んでおりました。

双子でもなければ血の繋がった家族でもない……魂の片割れと呼ばれる存在です。

元々一つだった魂は半分となり、表と裏で産まれて来る……そして、死ぬ時も同じ。

だからこそ、それを利用して悪さを企む者も現れたのです。

表の世界に憎い奴が居たとして、簡単に殺せるような相手ではな

かったとしたら……裏の世界で殺せばいい。

それが、当たり前でした。

その当たり前が出来つつあった頃、それをどうにかしようと、立ち上がる者が出ました。

一人の、偉大なる大魔術師と、その四人の腕利きな手下です。

——五人は膨大な時間、困難の末になんとか、世界を切り離し魂の共有を断つ、唯一の方法を……つき止めました。

偉大なる魔術師により断たれた二つの世界——二度とこのような悲劇が起こらぬようにと、魔術師は世界の間、永遠に監視出来るよう……妖精を生み出します。

魔術師は言いました。

「きつといずれ、この世界の均衡は……再び崩れる事になるでしょう。それを見張り、世界の安全と秩序を、守り抜いてください。」

均衡にヒビが入る時……私は再び生まれ変わるでしょう。ですが、記憶はなくとも魂は同一です——生まれ変わった私を、支え、力を貸してやってください」

そう言い残して、魔術師は四人の優秀な手下にあとを任せ……みなに囲まれたまま、魔術師は幸せそうに力尽きました。

……めでたし、めでたし。

——あたし達三人は、それを地面に座りながら、真剣に語るヴィカを……ぼんやりと見つめ、聞いていた。

聞きたい事は……もちろん色々ある。

魔術師って本当にいるの？ とか。

とにかく色々。

『それから……幾年もの年月が経ち——とある国に、一人の少女が産まれました。少女は産まれながらにして膨大な魔力を持ち、成長とともに、その力の頭角を……あらわしました』

「それが……魔術師の生まれ変わり？」

あたしの問いに、妖精が頷いた。

『前世と、まったくお変わりない容姿でした。もちろん性格も。……私は、その生まれ変わりの魔術師様であるお方の命で、貴方方三人を連れて来たのです——私が言えるのは、ここまでです』

……あまりのことに、あたし達三人は、しばらく黙り込んだ。

だって、なに、その、いかにもファンタジーな展開は。

いや実際ファンタジーなんだろうけどさ。

ていうか……あたし達はそれで、どうすればいいっていうのさ。

漠然としすぎて、意味不明なんですけど？

「魔術師かー……なんか、あたし達……ほんと、ファンタジーな世界に来てるね」

「これなら、モスラに会えるかもな」

「じゃあゴジラにも会えますね！」

「やっべー！ ゴジラってたしか、海からあらわれるよね？ 近付かないようにしなくちゃ」

「というか、逃げる前に踏みつぶされて終わるだろ。ぷちっと」

「あたし、死ぬなら一瞬がいいな……ぷちっと」

「ゴジラさん、もしかしたら究極なサディストかもしれないよ？もしかしたら、ぷちぷちっと」

「痛み付けながら足踏みするかもな。満面の笑みで、ぷちぷちぷちと」

「……ハイヒールで踏まれるなら、あたしまだ、許容範囲だけど」

「……ゴジラにハイヒールはかれても……困るだろ……」

「ゴジラじゃなくて、ゴジ子ちゃんですね」

「ちよっ、なにそのジャイ子のネーミングは」

……まあ、どんな話を聞かされても、あたし達は結局こつなるわけ。
けで。

本当に、三人でよかったかも。

一人だったら、確実に不安で押し潰されてたよ……ぶちっと。

「それより……俺達、わかってると思うけど……こんな世界
に来て、三日と持たず御陀仏すると思うぞ」

「長い、悲しくも。二日だね」

「私は一日だと思います」

『……』「安心を。私も、鬼ではありません」

そう言って、ヴィカは——三匹の青い蝶を、手のひらから生み出した。

『この世界には、とある決まりがございます』

「……決まり？」

あたしが問う。

『はい。妖精が、異世界から人を連れて来た場合の決まりです』

その言葉に、ああ、あたし達の事が……と納得する。

『……一つは、世界に適応出来るような力を授ける事。最後が――何でも願いを叶える事』

「あ、つまり元の世界に帰してもらえ」

『それは却下です』

「はえーよ」

頼むから少し悩めっての。

寂しいわ！

『ただ、一つ二つ理解の上で、力の方は授けたいと思います』

「……？」

『“力を授ける”、しかしそれは、単純な物ではありません。……自ら努力をし続けなければ、能力など上がることもなく、落ちる一方でしょう。私達は魔術師様によって生み出された存在……他の人間に与えるなど――限界があります。私どもが貴方に与えられるのは、ほんの切っ掛けとも言える力です。どうぞそれを理解していただき、努力を怠らないようにしてください。決して、最強になれるわけではありませんので』

まあ、そのへんの人と比べたら……格段に良いとは思いますが。

——ヴィカはそう言って、ニッコリ笑った。

うつん……力、ねえ。

そんなものより、あたしは……元の世界へ帰してくれれば——それだけで充分なんだけどなあ。

しかし、まあ。

素直に帰してくれるなら、最初っからあたし達を連れて来たりなんかしないわけで。

帰るのはだいぶ先になりそうだ……と、諦めの溜め息を吐くしかなかった。

てか……一生、帰れなかったりして。ハハハ。

……。

まったく笑えねえし！！

——でも、本当に困ったことになってしまったようだ。

だって、何をすればいいかわからないのに……こんなところへ連れてこられたって。

本当に、どうしようもないし。

アテもなく冒険してるとか？ 連れて来といて無責任すぎだろ。

あたしは不満をぶつけたい気持ちをなんとか押さえて、ヴィカがなにかを喋りだすのをじっと待った。

そのあたしの熱い視線に気付いたのか、ヴィカはすぐさま口を開く。

『大丈夫です。いずれ、わかります』

——いずれ、ね。

それはいつたい正確に言うと、いつでしょうか？……なーんて聞けないのが虚しいよ。

どうせ答えてくれないだろうし。

裏と、表——か。

難しすぎて、話もほとんど聞き流してしまったけれど——それが本当なら、この世界に、いるわけだよね……もう一人のあたしが。

魂の、片割れが。

……それがいつたい誰なのか、わかる……気がする。

間違いであってほしいけど。

『さあ、三つの中からお選びください。どれか一つです』

ふわり。

ヴィカの手元にいた三匹の小さな蝶たちが、ひらひら舞い上がった。

そして、ヴィカが指をさす。

こちら側から見て、一番左にいる蝶だ。

『一つめ。……何にも恐れを許されない、雄々しく気高い孤高の戦闘狂——剣士』

どう言った力なのか、説明は要らないでしょう。

そう言っ、ヴィカは次に、真ん中を指差した。

『二つめ。……偉大なる魔術師が、世界の繁栄のためにと産み出した、“魔”の技術。それを扱う——魔法使い』

魔術師と魔法使い、これには大きな違いがあるらしい。

ヴィカが言うには……魔術師とは誰もがなれるわけではなく、その力は神に近いものだという。

世界を真つ二つにしたり妖精を生み出せたりするんだから、言ってる意味も理解出来そうだ。

それに、魔術師は知られている中で……歴史上二人らしい。

世界を真つ二つにしたあの魔術師と、生まれ変わりといわれる――姫様だ。

そして魔法使いとは。

魔術師ほど便利な魔法を使えるわけではなく、決まったものしか扱うことが出来ず、発動にも相当な困難を要するらしい。

しかもそれには種類があり、全部扱えるかどうかは……腕次第なんだとか。

しかもその発動方法、話に聞くだけでもかなり面倒だとわかる。

まず、発動条件として……自分の丈ほどある杖と魔導書が必要で、

その杖で魔方陣を書かねばならないとか。

魔導書に記された魔方陣を、“魔力”で練られた杖で描き、魔導書を掲げながら呪文を唱え、魔方陣を杖で叩く。

それで、やっと発動出来る。

……そこまで聞いて、あたしは——ふと思う。

そんな面倒な力じゃなくて、魔術師の力をくれればいいじゃないか……と。

しかしヴィカは。

『魔術師様から生み出された私どもですから……逆に生み出すなど、恐れ多いです』

出来ないことはないらしいが……『確実に、命を落としてしまいます』と、ヴィカは笑いながら言った。

魔法使いにとって……杖とは魔術師の手であり、魔導書は魔術師の頭であり、魔方阵は——意志である。

魔術師は頭で何を発動するか考え、手を振り、発動をするという“意志”を持つて……初めて魔術を使う。

それを誰もが扱えるようにしたのが——魔法。

魔術師の作る、魔の法律。

今——この世界に散らばる魔導書は、初代魔術師が書いたものを書き写したものだ。

そして、その中でも新しく産み出された魔法は、すべてが二代目魔術師が作ったもの……なんだったさ。

……うん、まあ。

本当に頭の痛くなるような力だというのは、充分わかった。

結論。

あたしは絶対お断り。

『そして、最後の三つめ。……繊細な手付きで相手を翻弄し、騙しぬく。解けぬものなどにもなく、運命でさえも手の平に転がす、脅威なる業師——ギャンブラー』

はっ？ と、あたし達は毎度のことながら、同時に声を上げた。

ぎゃ……ぎゃんぶらあ？

『言いたい事はわかります。たしかに、ギャンブラーは腕だけではどうにもなりません。精神力に観察力、そして運やその場の環境を兼ね備えなければ——』

「ちよっちよっちよ！ ちよっと、ちよっと待って！ そうじゃなくて、その……！」

あたし達が言いたいのは、そういう事でなく。

何故、剣士、魔法使いと来て……そんな能力なのかってことで。

それをどうやって理解してもらおう……？ と、必死にあぐねているところ——あたしの代わりに、イッチーが言ってくれた。

「……えっと……剣士や、魔法使いは……まあわかる。でも、な
んで選択肢の中に入れるのかが……わからない」

それを聞いたヴィカは、『なるほど』と言い、一つ咳払いをして
から言葉を返した。

『ギャンブラー。……たしかにこれは、戦闘向きではありません。
ですが、必ずしも皆が戦闘向きな能力があつたほうがいい——など
とは思わないでしょう？』

「……まあ……」

ITCHーが相槌を打った。

「それに、絶対お役に立ちますよ。ギャンブラーは……お金を稼ぐのに、最適ですからね」

あ、なるほど。

金の話になって、あたしはようやく理解した。

そりゃそうだよね……お金がなきゃ、食事も出来ないし。

泊まったりもできないか。

……たしかに必要かも。

『それに』

「？」

ヴィカは間を開けてから、あたしを見て――

……ん？ あれ、なんでヴィカは私を――

『――どんな難癖のある鍵も、開けられますからね』

――鍵、も？

……何故だろう。

そう言われた時、何故、今あたしは……ドキリとしたのだろう。

別に――やましい事など、ないのに。

……ない、よね？

「——……あ」

「？ カエン……どうした？」

イチーに肩を叩かれて、あたしはハツとする。

あたし今……何を考えてたんだっけ？ へんなの、あたし。

変な夢みたせいかも。

……あれ、でもあたし、何の夢を見たか……覚えてない、よね。

今思い出したような気がしたんだけど——ああもうっ！ わかんないことだらけだよ、まったくもう！！

あたしは一旦その気持ちを振り払い、ヴィカに聞いただすよう

に言う。

「この力って、元々決まってるの？」

『？ と、言いますと？』

「だからつまり、それは誰かの命令でそうなってるのかってこと。それとも、異世界から来た人には、この力が当たり前なの？」

うつ——と、ヴィカは核心を突かれたとばかりに、言葉を詰まらせる。

……なるほど、じゃあ、今の質問……前者のほうみたいだ。

ということは——

「——姫様、だよな。多分だけど」

『……………鋭い洞察力ですね。肝がヒヤヒヤしました』

……認めた。

やっぱり、その魔術師である姫様の命令らしい。

いったい、何者なんだ、その姫様は。

聞くべき、だろうか。

最初は聞きたくないと思ったけれど……こうなってしまった以上、見過ごそうにも見過ごせない。

あたしは意を決して、ヴィカに問う。

「名前は？」

『……………』

「姫様の名前、それくらいは教えてよ。あたし達はあたし達なりに調べるからさ」

絶対に引かないぞ、と意思表示を示して。

あたしは仁王立ちをした。

……もし、あたしの予想が当たっていれば。

今から語られる名は、毎晩夢で聞いた、あの――

『ルビィ・ブレード・オフガイア』

「――!」

『それが彼女の――二代目様の、お名前です』

……やっぱり、そうだったんだ。

放心するあたしの横で、何も知らないチヨコが、笑顔で言う。

「カッコいいお名前ですね！」

「ブレードか……ミドルネーム、すごいな。向こうと同じ解釈でいいなら、剣って意味だろ？」

「強そうです！　ね、カエンちゃん」

話をふられて、「そうだね」と気のない返事を返した。

……二人は、夢の内容については、知っている。

でも——地名や、登場人物の名前までは……教えていなかった。

だから、二人はまだ……知らないんだ。

ここが——あたしが見ていた、夢の中、なんて。

言つべきなのだろうか。あたしは悩む。

普通は……言つべきなんだろうけど。

認めてしまふのが——怖かった。

だって、あの姫様は——

「……ねえ、ヴィカ」

はい、と。

ヴィカは返事をして、あたしを見る。

「あと……最後に質問。裏と表の世界には……たしか昔、同じ顔の人がいたんだっただよね」

『はい、その通りです』

「……断ち切られたって言ったけど、それって……今も、同じ顔

なの？」

心臓が……………内側からあたしを、攻撃する。

ドコドコ、ドコドコ、ドコドコと。

聞かない方が、いいのに——あたしはなんで聞いてしまったんだろう？

考えなしの、大馬鹿野郎め。

『——ええ。産まれる瞬間も同じで、容姿もまったく瓜二つになります。ですが……………命はもう繋がってませんので、片方がお亡くなりになっても、ご自身の命に心配はありません』

あたしは、その言葉に——そう、とだけ返した。

『さて……どうなさいますか？』

「俺……魔法使いだけはやだな」

「あ、じゃあ私やつてもいいですか？ 魔法使いなんて憧れです
！」

「じゃ、魔法使いは決まりか。……カエン、どうする？」

「……え！ あ、ああ……そうだなあ。んーと……」

「カエンは剣士な。わかった」

「待て待て待て！ 早い！ なんであたしが剣士！？」

「剣振り回して一番生き生きしてそうだから」

「あ、たしかに！」

「お二人さーん！ 何気に失礼だと思えますけど！」

「イヤなの？」

「え、あ、いや」

「なに、イヤなの？ 俺がせっかく剣士を譲ったのに」

「いや、やりたいならやればいい——」

「イヤなの？」

「……やらせてイタダキマス」

……なんだ、この納得のいかない感じ。

まあ、別にいいんだけどさ。

「じゃあ……俺はギャンブラーか」

「……剣士になるの面倒って思っただけのくせに」

「なに？」

「イイエナニモ」

つたく、イッチーのやつ狡いなあ。

……でも、ま、感謝しなきゃ……だよな。

二人がいてくれて、あたしはこうして——パニックにならずにす

んでるんだから。

あたしは二人にバレないように、小さく苦笑した。

『では、決まりましたか？』

「うん。あたしが剣士で、イチーがギャンブラー、チョコが魔法使いつて感じでよろしく」

『……いいんですね？』

再確認のつもりで、言ったのだろうか。

ヴィカは、慎重な面持ちで……そう尋ねた。

……私は頷く。どこか、腑に落ちない不安を抱えて。

『……では、この蝶を、右手で包み込んでください。赤色に燃え上がる蝶がギャンブラー、黄色に燃え上がる蝶が魔法使い、青色に燃え上がる蝶が剣士……です』

そう言うや否や、青かった蝶が……燃え上がり始めた。

先ほど言った、三色の色に。

赤色がギャンブラー。

黄色が魔法使い。

青色が剣士。

あたしが取るのは——青色の、蝶。

間違ってなんか、ない……よね？

『熱くありませんので、ご安心を……握りつぶさないようお気を付けてください——赤石様、青蓮寺様、黄泉様』

目が、チカチカする。目の前に見えてるのは……何故か赤色で。

それ以外のものを見ると、チリチリと目頭が熱くなっていた。

あたしが取らないといけないのは——どれ？ 青で、いいの？
本当に必要なもの？

あたしにとって必要なのは——どれだ？

——チョコが、黄色に手を伸ばした。

その小さな可愛い手のひらで、蝶を優しく包む。

そして——今度はイチチーが、赤色に手を伸ばして……………

「待った!!」
「!？」

イチーが、伸ばしかけた手を止め、固まる。

——そしてその瞬間……何故かあたしは、“別の場所”にいた。

真っ暗闇の中——小さな檻の中にいる少女——何重にも巻かれた鎖——文字の読めないフダ——そして——真っ黒な炎に包まれる……錠。

悲鳴が聞こえた。

その声は、聞くと悲しくなるような……悲痛な叫びで。

ただひたすらに、呼んでいた。

“姉さま”、と。

そして、ガチャン——と。

錠の閉まる音が、重たく響いた。

……耳に残るような、おも苦しい、辛い、音。

あれを、開けるには——

「——エン、カエン——！」

「カエンちゃんっ！ 起きてくださいっ！」

二人の声で、あたしはハッとする。

……何故かあたしは倒れていて、二人はそんなあたしを心配そうな面持ちで、様子を伺っていた。

……気絶、してた？

「あれ……あたし……」

「いきなり叫んだと思ったら……どうしたんだよ、貧血なのか？」

「カ、カエンちゃん……！　よかったっ」

涙を浮かべてあたしに飛び付くチヨコ。

その背を叩き、あたしを見て少し怒っているイッチー。

どうやら相当心配をおかけしたようだ。

申し訳ない。

……でも一体、あたし……？

地味に混乱するあたしを見兼ねてか、一度落ち着こうと小さく深呼吸をするイチー。

そして、冷静を取り戻してから……イチーはあたしに詳しく説明を始めた。

「お前、いきなり叫んだんだよ。待った、って」

「……ああ、うん……そういえばそんな気がしなくてもないかも……」

「それで、ビックリして手を止めれば……お前いきなり……また叫んだんだよ」

「ええっ？ さっ、叫んだって……？」

なに、ソレ。

全く記憶にないんですけど?!

あたしの気持ちが伝わったのか、イッチーは静かに続けた。

「妹だけは」、そう言ってた」

「い、もうと……?」

「また……あの夢を見たんですか……? いつもと違ったので、不安で……っ」

チヨコが、止まりかけていたはずの涙を、再び滲ませる。

「……わかんない……でも、すごい悲しい夢を見てた気がする」

「何回か叫んだあと、お前……崩れ落ちるようにして気絶したんだよ。しかも、まるでお前、死——」

ここで珍しく、イチーが言葉を詰まらせた——綺麗な眉を歪め、
怯えるように目をつむる。

……本当に、心配してくれたんだろうな。

いきなりあたしが叫びだして……気絶して。

まるで——そう、死んでしまったかのように。

「ゴメン……なんか、まったく覚えてなくて……」

「……別に」

「カエンちゃんが元気なら、いいんです……私達は」

——じんわりと広がる、温かい何か。

それはとても安心できるもので、あたしは自然と——笑顔になっ
ていた。

どれだけ心強いだろう。

この二人がいれば、あたしは何もいらない……そんな気さえする。

……うん、あたしは、大丈夫だ。

この二人が側にいる限り。

あたしは、「よいしょ」と言いながら立ち上がる。

イッチーとチヨコに支えられながら。

「……千世子、そろそろ泣きやめ」

「だっ、だつて……！ もう、安心して……」

「まあまあ、イッチー。自然と泣きやむよ」

「お前のせいだ馬鹿」

「アハハ」

あたしはおちゃらけて笑う。

そしてあたしが笑えば、二人も笑った。

『ご無事ですか？』

「あ、うん大丈夫。続きやろうか」

『では……よろしいですね、その色で』

あたしは、青色に燃え上がる……蝶を見た。

——違う。

違う、気がする。

そう……違うんだ。

私が選ぶのは、選ばなきゃいけないのは……。

「ITCHー」

「……？ なに」

「わり、換えて！ あたしギャンブラーやりたい」

「は？ ……まあ、いいけど」

また倒れられても困るし、と毒を吐くITCHー。

あたしは苦笑いをする。

『決まりましたね！』

笑顔で言うヴィカ。

どこかハキハキしてるのは……気のせいかな？ うーん……気のせいだな。

『では、包んであげてください』

ヴィカの指示に従い、あたし達は蝶に手を伸ばし、優しく包む。

青の剣士は——青蓮寺。

黄の魔法使いは——黄泉。

赤のギャンブラーが——私、だ。

『わたくし、ヴィカ。表の三人と契約を交わし、ここに絶対の契りを結びます。力を授け、一度の願いを叶えましょう』

——そう言い終えた、あと。

右手からじんわりと……熱が広がった。

しかし、決してそれは熱いわけではなく——馴染むような、心地のよい感覚。

なんだか……右手が、赤く光ってる。

イチーは青で、チヨコは黄色だ。

視線を自分の右手に戻した時、その赤色の光は段々治まっております。——なにかの、形が浮かび始めていた。

これは——蝶？

『契約は、完了です』

「おおおつ、すごいっ、赤色の蝶の絵が！」

「私は黄色のチヨウチヨですっ」

「……俺は青だな」

『いいですか？ 願い事は一つです。慎重に使ってくださいね』

さてと。ヴィカはそう言って、伸びをした。

そして『ふう』と息を漏らしたあと、言った。

『その服では動きづらいでしょう、動きやすいものに変えましょう』

「おっ？ それはタダ？」

『もちろんです。異世界から来たとわかるように、同じ服が好ましいかと。どのようなものになりますか？』

あ。実はコレ、後から知ったんだけど。

この世界の人って、絶対同じ服っていうのが存在しないんだってさ。

似たような形でも、何かしら違いがあるらしい。

なんでかは知らないけど。

あたし達三人は、しばらく悩む。

同じやつで、動きやすいもの……。

そこまで考えて、あたしはパツと閃いた。

「学校のジャージでしょ！」

「学校のジャージ」

「学校のジャージがいいですっ」

被った。

『ハハハ、わかりました』

息ぴったりですね、と零しながら。

ヴィカが手元を光らせ、あたし達にそれをむけた。

光りに包まれる……あたし達。

あまりにも眩しくて、瞼をギュッと閉じた。

——そして、しばらくして。

あたしは、瞼を開く。

「おー！ もう着る事ないと思ってた学校指定の黒ジャージ！」

「復活だな」

「わあ！ ちゃんと名前入りですよっ」

「アハハハハ！ 学校の紋章も入ってる！」

「……おー、着心地も全く一緒」

うちの高校——あ、訂正すると元高校だけど。

このジャージ……実は結構他校からも人気のデザインで、色が黒の生地で白いラインが入っており——身体にフィットするタイプの

ものだった。

これを狙ってあの高校に入る学生も少なくない。

着心地もいいし、本当にデザインもいいからね。

またこれが着れるとは……本当に嬉しかった。

「ハハハハッ！ 名前のところ凄い、色付きになってんじゃん。オサレー」

「ん……？ これ、なんだ？」

「どうかしましたか？」

「ここ、学校の名前が書いてあった場所………信号機？」

キョトンとするあたし達に、ヴィカは言った。

『たしか……赤、黄、青は、表の世界にある“信号機”というものでしょっ？』

「まさか……。あたしが、赤石……」

「俺が……青蓮寺で」

「私が、黄泉……」

あたし達は、同時に吹き出した。

「ぶッ、アハハハッ！ た、たしかに信号機だわ、あたし達！」

「なんで今まで気付かなかったんだか……不思議すぎる」

「ね！ ふふふっ」

腹が痛くなるまで笑う。

もう壊れたようにだ。

本当に不思議だよ、今の今まで気付かなかったんだもん。

あたしは笑いすぎて出てきた涙を拭い、笑顔で言う。

「ありがとうヴィカ！」

『！』

「ヴィカのおかげだよ！」

——気のせい、かな。

今……『どう致しまして』、と言った時のヴィカの表情がどこことなく……泣きそうに見えたんだけど。

嬉し泣き、みたいな感じ。

そんなに嬉しかったのかなあ？ ま、いいけど。

「さあて、信号機トリオ。どこに行きましようか」

「アテのない旅だな」

「まあ、満喫しましうよ！」

「だねえ！　行きますかあ」

『——ご無事を、祈っております』

深々、頭を下げる…… ヴィカ。

そして頭をあげた時は、輝かんばかりの笑顔だった。

「んまつ、なにを思って連れてきたかは知らないけど……後悔しないですよー」

『はは……しませんとも。絶対、間違いはございません』

にこやかに言うヴィカに、あたしは苦笑した。

イヤ絶対間違ってるよ、あたし達なんか連れて来てどうすんだよって感じ。

いつか間違いに気付いて、さっさと帰れ！　なんて言うんじゃないかな。

ま、それまで楽しむとしよう。

『それでは……私はこれで』

「えっ？　どっかいくの？」

『ええ。妖精は仕事一杯ですからね』

「願い事する時どうすればいいですか？」

『手の甲にある蝶に触れながら、話しかけてください。それで私に聞こえますから』

そしてヴィカは——『では』と、そう言って。

パタパタと空に舞い上がった。

最後に、真剣な顔をして——

『拾い食いだけはしたらダメですよ!』

「するかーっ!　って——あたしを見ながら言っなっ!」

文句を言い終える前に、全身タイトの妖精……ヴィカは、跡形もなく消えてしまった。

綺麗な光りに包まれて。

「……どうします?　私達これから、何処に行けば……」

「ていうか、武器はくれないんだな」

「あっ、本当ですね」

「つまあり、金を貯めて自分で買えってやつだね」

「シビアだな……あの妖精」

「取り敢えず……歩きましょうか?」

「さんせい。ま、稼ぎはあたしに任せな！ ヒモども」

「……剣を買ったら誰で試すかな……」

「あたしを見ながら言うなよ！」

——きつとこれから、あたし達は長い旅を始める。

どんな旅になるかは……分からないけれど。

でも多分、大丈夫……なんじゃないかな。

二人がいるしね。

先生が言っていたけれど、人生って……たしかに日々が問題だよ
ね。

答えなんか、あるのかもわかんない。

でも、それでいいのかもしれない。

分ないからこそ、きつと、手探りでもいいから見つけようとする……あたしは何となく、そう考えた。

あたしだけの答え。

それを、今から探しに行く。

この先どうなろうと……進まなくちゃいけない、みたいだし？

なんとかなるっしょ。

ハハハ。

さーて。

一体何が起きるのかなあ。

まあいっちょ、やってやりますか！

第一話？

……いっちょ、やってやりますか。

そう、あたしは、たしかに心でそう思った……だけど。

さっそく、それが挫かれそうになっているなんて……誰が思うだ
ろっ？

「おーろーしーてえーっ!」

気持ちのよい空の旅……とは言えないこの飛行の旅。

あたしはちょうど今、一人で天高く空を飛んでいた——真つ黒なドラゴンに、掴まれたまま。

見えるのは雲だけの、遊覧パーティー。

どうもがいても離れそうにない——いや、今離されても困るけどさ。

あたしまだ、死にたくないし。

潰れたトマトになるのだけは——絶対嫌だっ！！

「いーやあああああつ！ 食べられたくないよー！ イッチ
ー！ チョコー！！ 助けてええええ！！」

——……つい、数分前の事。

あたし達三人は、たしかに一緒にいた。

妖精ヴィカと別れたあと——森の中をひたすら歩いていたあたし達は、どこでもいいから町へ行こうと歩いていて……その途中、人に会った。

「あつ！　　すみません！　　町って何処にあるか知りませんか？」

小走りでその人に近付きながら、チョコが問う。

それをITCHーとあたしはあとから追い掛けた。

……その人は……なんて言うか。

不思議な雰囲気の人、っていうのかな。

全体的に身を包むようにしてマントを着ていたので……さすがに顔まではわからなかったけれど。

チョコの言葉に受け答えする声からして、性別が女性ということだけはわかった。

「あたし達、この世界に来たばかりなんです」

「……そうですか。ここを真っ直ぐ行けば、町がありますよ……とても大きな町ですから、治安が良いとは言えませんが」

そう言って。

その人は背を向いて、誰にも聞こえないよう……“何かを”呟くように言った。

反射的に、あたしが聞き返す。

「えっ？」

「……いいえ。黒いドラゴンには、お気をつけてくださいね」

…
そう言い残したマントの女性は、もう何も言わずに歩き出した…
…
あかし達の来た方向に向かって。

「……変な人」

「黒いドラゴンって、なんだ？」

「あっ！アレじゃないですか？ さっきからお空を飛んでいます！
……あと、見間違いないかなければ……真っ直ぐこちらへ向かってる、ような……気がします……」

……え？

あかしとイチチーは、引きつりながら上を見た。

……早々だけど、やばいんじゃないの、これ。

「ちよっちよっ……やばいよ！　につ、逃げろー！！」

……と、三人同時に走ったまでは、よかった。

しかし。

「なっ、なんであたしだけえええええっ！？」

綺麗に降下をする真っ黒なドラゴンは——その優雅な動きのまま、あたしだけを前足で掴み……流れるように再び空へと舞い上がった。

顔面蒼白になるあたし。

下では、イッチーとチヨコの慌てふためく様子が見えなかった。

こいつスピードはええええっ！

掴まれて空に飛び立ってから数秒ですよね!?

っていつか何故あたしだけが狙われちゃったのよ!　ねえっ!

……あたし、そんなに旨そうに見えたのかな……?

——まあ……そんなこんなで、冒頭に至るわけだけでも。

もうかれこれ……十分くらい、経つんじゃないのかな……。

追記。

未だ降りる気配全くなし。

「……そーらーを自由にーとーびたーいなあー……」

はい、タケコプター。

……なんてうまい話があるはずもなく。

あたしはこのドラゴンに自由を奪われたまま、空を飛んでいた。

……その前にさ、なんであたしだったんだろう……すごい狙いを定めて来ていたような気がするんだけど。

気のせい……ではないはず、だけど。

どうなんだろう？

「ねえー、君なんなのー？　なんであたしだけなのさー？」

通じるわけないとわかっているものの、つい聞いてしまう。

しかし予想に反して、意外な返事が返って来た。

『キユイ？ キュツ、キユウ！』

「――言葉が通じてんの！？」

キユイー！ と、元気のよい返事が再び。

なにを喋ってるかはわからないものの、言葉が通じるのだという喜びに……あたしは地味に感激した。

……なにか……質問出来るんじゃない？ コレ。

簡単な質問なら、イエスカノーを答えさせればいいわけだし。

イエスカノー自体言葉に出来ないだろうけど、そこは彼の反応をよく見るしかないだろう。

……よし。

あたしは取り敢えず、一番聞きたかった事を聞いてみた。

「あたしをお昼ご飯にするわけじゃないんだよね!？」

『キュイ!』

「……それは、イエスってことだね!？」

『キュイー!』

「うおっしやあああああ!！」

卒業したての十八歳の少女、本気で喜んだ瞬間だった。

「えっと……なんて質問しよう……イエスカノーで答えられる質問は……」

『キュウ?』

「……今更だけど声だけやけに可愛いな」

真っ黒でデカイ図体しといて、『キューー!』かよ……いや、いいんだけどさ。

まあ、ギャップ萌えて言葉もあるくらいだし、それはそれでいいのか。

あたしは「うーん」と唸りながら、なにを聞こうか必死にあぐねいた。

難しいな……向こうがあたしの言葉をわかって、あたしがわからないんじゃないあ……どうしようもないし。

タケコプターの繋がりってわけじゃないけど、翻訳コンニャクがめっちゃ欲しい。

ていうか、スぺアポケットが欲しい。

みんなに愛される、青い猫型ロボットが欲しいとかわがまま言わないから……せめてスぺアポケット。

……まあ、無理ってわかってるからいいんだけどさ。

重たい溜め息を吐く。

きつと、だいぶ離れてしまったんだろうな……二人に。

その証拠に、先ほどは森しか見えてなかった辺りに……段々町らしきものが見え始めていた。

結構眺めはいいので、満更では……――

……………あ、あれっ？

「……………ねえ」

『キユウ？』

「あそこに見える……………でっかいお城は――まさか、オフガイア？」

こちらから見て、右側にある……………デカい建物。

その周りは湖に囲まれており、さらにそれを森が囲み、それを町が囲んでいた。

それは間違いなく……あたしが夢で何度も見た、光景で。

……背筋がゾクリとした。

本当だったのだと、嘘ではなかったのだと……証拠として突き付けられてしまった。

そんな……嫌な感覚。

……あそこには——あの城には、まだ、いるのだろうか？ お姫様の父親や、母親。

泣き崩れていた大臣や、メイド、兵士、騎士団、執事に……あの——ダイヤモンドの瞳を持つ、美しい青年が。

——あと、あの妹も。

ワンテンが遅れて、真っ黒なドラゴンは……あたしに返事を返した。

とっても小さく……『キュウ』と。

その声色はどことなく……悲しみも含まれていた、と思う。

……君も、あの城で何があったか……知ってるんだね。

とっても悲しい事が起きたんだって、わかってるんだ。

……あの夢の中で見た、あの光景。

どこかに、君も居たのかな？

「……そっかあ。あれが……オフガイアなんだね」

世界一安全なはずのオフガイア——今でも、あそこは安全だと……
……言われているのかな？

そして、あの夢の中の住人達は……今、どんな風に過ごしているのだろう？

お姫様が言っていた通り……笑って、泣いて、怒って……楽しく過ごしているのかな。

「……。今、あそこにいる人達は……幸せ？」

『……キユ……？』

「いや……なんでもないや」

きっと、愚問だろう。

あの夢の少女は、自らを犠牲にしてまで悪者になっていたのだ……
…みんなが幸せじゃないなんて、ありえない。

そういう風に、仕組んだのだから。

ぬかりはないんだろうな、多分。

「……強いなー」

どうしてそこまで、強くなれるのか。

あたしなんて、イッチーやチョコがいなきや何にも出来ない優柔不断野郎だし……オバケや虫が嫌いでよわよわだし。

痛いのも嫌いで独りぼっちも嫌い、オマケにすぐ泣く。

勉強が嫌いだから頭もちっと悪いし、好き嫌いは多いわ、嫌われるのが嫌だからすぐ八方美人気取るわ……。

取り柄があるとしたら、運動神経が良い事と……運が良い事ぐらい。

比べれば比べるほど、お姫様とは全然違う……。

なのにどうして、あたし達はあるなにも――

「——えっ、なんか来る！」

そう気付いた時には遅くて、その……やって来た何かに攻撃をされかけた。

しかし、身を翻したドラゴンが、あたしを庇ってくれた。

……しかし……。

「うっひょおおーっ！」

結果、あたしは離され、落下を始めた。

「わっ！ わわっ！ わあーっ！」

地面まであと数百メートル——やばい、やばすぎる！

真下に湖とかあればいいけど、あるのは森だけ。

……リアルに潰れたトマトになっちゃうよっ……！

「わぁーん！！ チョコー！ イッチー！」

さっそく泣きベそをかきはじめたあたしは、そのままドンドン地面に近付いて行く。

あたしも魔術師になりたかったよ！ この際ヴィカが死んでもいいから、魔術師の能力もらえばよかった！

……かなり酷いのはわかってるけどね！

「でも自分が死ぬよりマシだぁー！！！」

ああああっ！　そう言っている間にも、地面がもう間近に――
――！！

「――シルフ――！」

……そんな、透き通るような誰かの声。

そう聞こえた瞬間には……あたしは、何故かふわりと空を飛んで――
――いや、ゆっくりにはなっていたものの、落ちていた。

なんか……こう、風に守られている……感じて言うのかな？

緩やかに降下するあたし。

地面まで数センチになったところで風は消え、あたしは無事、地面に降り立っていた。

それはもう軽やかに、ストンツと。

「いった!!」

……すいません嘘です。

尻からいきました。

「大丈夫ですか？」

「えっ、あっ、はい……ありがとうございます——」

あつ！ と――あたしは驚きながら、その人を見つめた。

さっきも会った、あのマントの女性じゃないか。

……この人が、助けてくれたんだよね？

え……ていうか、なんでここにいの？ いくらなんでも、早すぎる気が……？

あたしの言わんとしている言葉が通じたのだろうか……。

さっき会った時とは打って変わり、彼女は人の良さそうな感じで、笑いながら言った。

「私、魔法使いなんです。風を得意にしてるので……スピードに自信が」

「あつ……そうなんですか」

へー便利ですね、と言いかけて……あたしは後ろから来る小さな衝撃に、前のめりになった。

腰のあたりに、掴まれる感触、これは――子ども、か？

「テラ、さっきは大丈夫だったかい」

マントの女性は、その小さな黒髪の少年を見て、そう言った。

「テラ？　って言うんですね」

「ええ。絶滅危惧種であるブラックドラゴンの、今確認できる限りは……生き残りですね」

「ほー……………お？」

ドラ……………ゴン？

……あたしの、聞き間違いだったのだろうか？　しかし今、たしかに彼女は言った。

絶滅危惧種の、ブラックドラゴンだ——と。

ドラゴン？

いや、でも、これはどこからどう見ても……ただの子どもでは？
五、六歳の。

「テラ、あれだけ油断するなと言っただろう？　私が来るのが遅かったら、この方が転落死してしまうところだったんだぞ」

「うっ……うっ。あー！　ああー！　うー？」

「わかったわかった。嬉しかったのはよくわかるけど、今はそれどころじゃないんだ。今のは多分……お前を狙ってたんだよ。今度は私も乗るから、次こそ気をつけるんだよ」

「うー！」

言葉が通じてるよ……あたしには、まったく意味がわからないけど。

何の話をしてるのやら、だ。

「申し訳ありませんでした。テラも少し、浮かれていたもので」

「え？ いえ、それはまあ……いいんですけど。あの……なにが、どういうことですか？」

理解出来ないのは、あたしが馬鹿すぎるから……と言つ事ではないだろう。

……多分。

「……説明するのは億劫ですね。ご覧になれば、納得するかと」

「？」

——その時、あたし達を囲むように……何故かふつと影が出来た。

同時に、強く吹き掛けられる生暖かい、風。

……何事……？

そして、後ろを振り向くあたしは……驚愕することになる。

何故なら、後ろに先ほどまでいた少年はおらず……ついさっきあたしを連れ去ろうとしていた、あのドラゴンがいたからだった。

顎が外れそうな勢いで、それを見つめ……叫ぶ。

「このドラゴン——！ さっきの……！」

「はい。テラです」

未だ女性の顔を伺う事は出来なかったが、なんとなく笑っているのを感じとれた。

……つまり、このドラゴン——テラにあたしを連れ去るように、
言ったのは……。

「貴女が……？」

「はい。私がテラを召喚しました」

ハッキリと認めるその人は……羽を広げるテラに近付き、その背
に一瞬で飛び乗った。

それはもう、見惚れるような動作で。

……女性とは思えないな、かなり失礼だけど。

たとえるなら……王子様、みたいなの？

あたしはそれを、しばらくポケットとして見つめていた。

それに気付いた女性は、あたしを見下ろしながら一言。

「行きましょう。追っ手が来ますので」

「追っ手って……、えっ？ でもあたし、イッチーやチョコの元に帰らなきゃ……！」

「詳しい話はあとです。ことが済みましたら、あのお二人の元に絶対帰しますから」

反論を言いかけて、あたしは固まる。

顔の横を……何かが霞めたからだ。

……そして、そこに手を滑らせれば……痛みとともに、生暖かい何かが触れる。

——血だ。

頬が切られている。

「テラッ！」

『キューー！』

——ガシッ。

そんな効果音とともに、あたしは再び……前足で掴まれていた。

そして気付いた頃には、天高い空の上。

「またかーい！」

ツッコミも虚しく、あたしの叫びは空に溶けてゆく。

「テラ、絶対離さないように！ 急ぐ事だけを考えろ！」

『キューー！』

「頼むぞテラ——表の世界の姫！ 申し訳ありませんが、少しご辛抱を！」

「ご辛抱って言われても無理——なんて、言えるはずもなく。

テラは先ほどと比べられないくらい、猛スピードで空を飛んでいた。

そのせいで、乙女とは思えないほどすごい顔になってしまっ……風圧のせいで。

ていうかつ！ 息すらもまともに出来ないんですけど！

大人しくついて行くから、あたしもそっちに乗せて……！！

「……あいつらしつこいな。テラ、一発出せるか？」

「キュ？ キュウ……キュツキュイ！」

「それで充分！ 合図したらやるんだ！」

あたしの苦悩など完全スルーして、一人と一匹はなにかを始めようとしていた。

なにに追われてるんだろう？ 後ろを振り向けないので、あたしは会話をわずかに聞き取る事しか出来ない。

結構、緊迫している感じだけど……いったいなにが起きてるの？

この世界に来てから、自分自身に起きている事が——さっぱりわからない。

これもすべて……お姫様の命令、ってやつ？

……一度、会う事が出来たら——とにかく一言だけでもいい、物申してやらねば。

「——行くぞテラッ！」

『キュウウウッ!』

うんうん、と一人納得している途中——凄まじい轟音が、間近で聞こえた。

瞳をカッと開いてそれを刮目したあたしは、そりゃもう文字通り絶句する。

……だって、テラが口から破壊光線を出してたんだもの……。

驚くなつて言つほつが、無理でしょうよ。

ってか。

——…… かけえええええつ！！

「うおー！ うおー！ かけえつ！ 破壊光線とかすごすぎる
——」

状況も理解せず、あたしは叫んでいた。

異世界にいるってわかってても、目の前にドラゴンがいるってわかってても……こりやもう凄いの一言だろう。

こんなファンタジーなことがあっていいのだろうか？ しかも目の前で！ …… イッチーやチョコにも見せてやりたかったなあ。

……絶対目を輝かせたろうに。

まあ、まあ。

そんな破壊光線のあと、どうやら雰囲気的に事が済んだようで……。

マントの女性が「ふう」と溜め息をついて一安心する気配を感じとり、さっそくと言わんばかりかあたしは質問を投げ掛けた。

「あの……あたし、どこに連れて行かれてるんですか？」

「え？ ああすいません、自己紹介がまだでしたね。私はヒスイと申します」

「あ、じ丁寧にも……じゃなくて！」

聞きたいのはそういうことでなく！

「ご安心を、安全な場所ですから。私の……アジト、いえ、ねぐらという感じの場所です」

「……な、にを……するんですか？」

「ふふ……大丈夫です。とって食ったりはしませんので。テラも人は食べませんよ」

まあ……それは確認済みですからね。

最初に聞いた質問がそれだったわけだし。

……まず、聞いた質問の内容も……それはそれで微妙だったけどさ。

気にしない気にしない。

「まずは目的地に着いてから。お話があります……貴女の——いえ——貴方方の、これからについてを」

そう言って、彼女はそれ以上ここで喋ろうとしなかった。

——……優雅、でもなかったような飛行の旅を終えた、あたし達二人と一匹。

促されるまま、崖の上にあるこじんまりとした家の中へ入ったあたしは、さっそくとばかりに口を開いていた。

「どういつここですか？ さっきの事といい、あたし達……の、これからの話って」

……嫌な予感はしつつも、聞かずにはいられない内容なわけでしょう。

人型バージョンのテラに抱き付かれながら、あたしはソファに座った。

そして女性——ヒスイさんを、見る。

「——大体は、お気付きでしょう。多分……ヴィカにも聞いたでしょうから」

「……ルビィ・ブレード・オフガイア。でしたっけ……二代目魔術師様とかなんとか」

その通りです……と、ヒスイさんは頷きながら言った。

「なんなんですか……？ ハッキリ言って……その」

「私達に関係ない」……でしょう？」

「……まあ、その………はい」

ハッキリ言ってしまうと、そうことになるわけで。

あたしは居心地が悪そうにモジモジした。

——それに、関係が少なからずあるとしたら。

……それはたぶん、あたしだけで。

あの夢すら見た事のない二人は——完全に無関係となってしまうのだろう。

……じゃ、あたしのせい？ いやいや、まずあたしのせいと決ま
ったわけじゃないしね、うん。

でも……あたしと、彼女——二代目魔術師は、似ているのだ。

中身は全く似てない、それはわかってる。

ただ、似ているというのは……—

「……昔話をしましょう」

「はっ？ えと、もしかして、裏と表の……とかなんとかのですか？」

ヒスイさんは首を横に振った。

そして、またすぐに口を開く。

「それよりも、後の話です。……二代目魔術師様が——ルビィ様がすでに、お生まれになっている時の話です。十年前、でしょうか」

「……十年前」

「——魔術師は、裏と表の世界の均衡が乱れた時……誕生します。それは聞いていますか？」

「あ——はい、ヴィカがたしかそんなことを」

あたしはふんわりと思い出す。

真剣に聞いていなかったから、所々あやふやなんだけどね。

「そう、均衡が危ぶまれました。だからお生まれになったのです、ルビィ様が」

マントの、フードの奥——キラリと光った翡翠の瞳が、あたしの心ごと射抜いた。

「ルビィ様が——八歳の頃です。“災厄”と呼ばれる一人の女が、蘇りました」

「さいやく？」

「はい。……大昔に、その繋がりを利用した大元です」

「……そうなんだ」

みんながやっていたには、やっていた。

けれど、それにはしっかりと大元がいたのか。

「……………“災厄”は復活し、繋がりを戻そうと、裏の世界——
この事です——戦争を吹っ掛けて来たのです」

「せ、戦争をですか？」

「そう、戦争です。……………が、しかし。当時八歳の魔術師に、“災厄”は敗れたのです」

……………すじ。

たったの八歳でかよ。

驚くあたしをよそに、ヒスイさんは誇らしげに言った。

「私も、覚えております。本当に頼りになるお方です」

「……」

「ですが……それから、さらに八年後。十六歳の春、彼女は――」

そこで言葉を切り、ヒスイさんはうつむいた。

その時のことを思い出しながら、彼女は嘆く。

「……ルビイ様は……死んだのです」

――死んだ。

そう呟いた、彼女のたった一つの言葉には……何個もの感情が入り交じっているようで……。

必然的に、あたしも眉を寄せた。

悲壮、後悔、憤怒……いたいどれだけの思いが、ヒスイさんにはあるのだろう。

そしてそれを、彼女——ルビィ・ブレード・オフガイアは、全く知るよしもないわけで。

……本当に、本気で、皆が笑顔に暮らせると……思っていたのだろうか？ 自分が死んだことにより、こんなに苦しんでいる人が現れるということに……気付いていたのだろうか。

何故、彼女はそこまでしたのだろうか？

「……赤石様」

「あ……はい」

「これからのことについて、です。魔術師ルビィ・ブレード・オフガイアが生まれ育った地、オフガイアだけには……立ち寄らないでください」

「えっ」

「昔こそ世界一平和だと言われた場所でしたが……今は」

……その先を、言われなくともわかってしまった。

そりゃそうだよ、あの姫様がいないんじゃないあ……平和になんかなるはずがない。

「ヴィカから聞いたのでしょうか？ あそこで、痛ましい事件が……起こったと」

「いや——あ、はい、そ……そうです」

実際は、あたしが夢に見ていたんだけど……、それを言うのが、なんとなく嫌だった。

……自分が、無関係ではないのだと、自己主著してしまいそうで……怖かったから。

「率直に言わせていただきます」

「は、はいつ？」

「この世界を……悲しみから救い出してください——貴方達、いえ、貴女にだけしか……救えないのです」

その理由を聞くのは、野暮だろう。

いや、言われなくてもわかっている……だってあたしは、似ているのだから。

彼女、ルビィ・ブレード・オフガイアと……顔が。

ヴィカに言われた事を、思い出す。

裏と表には、瓜二つの人間がいて、生まれる時、容姿は……まったく同じだと。

あたしは……、あたしの、魂の片割れは——二代目魔術師なのだ。

「……そう、言われても。あたし、なんにもできないと……思い
ますよ」

「いえ。貴女にしか出来ません」

ヒスイさんが、ハッキリと言う。

「なにかをしるとは、言いません。ただ……」

「ただ？」

「……しばらく、旅をしてください。オフガイアにだけは近寄ら
ず……三人で、平凡な旅をするだけでいいのです。ただ、それだけ。
それが——」

偉大なる二代目魔術師様の、願いです。

ヒスイさんは、そう呟いた。

……旅を、するだけ。

何故旅をするだけなのかは、今のあたしにはわからないだろう。

でもそれは、いずれ……わかる。

そんな気がした。

「……私は」

「？」

唐突に、口を開くヒスイさん。

「私は、ただ、すべての真実を姫様から聞いたヴィカに……一部
の話を聞いただけなんです。それを、手伝っているだけで」

「え……つと」

いきなり、なんの話だろう？ あたしはただ、ポカンとしてヒスイさんを見つめる事しか出来ない。

ただ、すつごく……寂しそうな表情だった。

「姫様は……たしかにあの日、私達の目の前で……お亡くなりになりました。剣で己を貫き、悪魔のような炎に包まれ、あの場から飛び降り……オフガイアの守り神に、食われて」

……く、食われた？

そんな……そんな最後、だったのか。

いつもあたしは、飛び降りた辺りだけで夢が終わっていたから……
…知らなかったよ。

……そこまで見なくてよかった、かも。

「でも」

ヒスイさんが、その、深い緑の瞳で……あたしを奥の奥まで見る。
不思議な色だ。

大まかに、緑、とは言えないような……恐ろしく、尚且つ人目を
引く瞳。

緑は……神秘的な意味があるらしいけど、ほんとだ。

この人は——顔こそまだよく見えないが——とても、神秘的に見
える。

ヒスイさんは、その綺麗な瞳に涙を浮かべる。

ギョツとするあたしに、ヒスイさんは微笑んだ。

「……でも、生きている。貴女に会って、それがわかりました」

「……………え、い、生きてるんですか？ あ、あの姫様！」

何故！？ あ、いやでも、たしかにあの夢の中でも……姫様は自分を死んだように見せなきゃ、とか考えてたみたいだし。

……じゃあ、なんで、あたし達なんかをこの世界に呼んだのだろう？ 自分で解決すればいいのにさ。

行動がまったく意味不明だ。

「過去の、裏と表の繋がり。原理は知っていますか？」

「え。うーん……原理、と言われても。魂が繋がっていて……とか、大雑把には説明してもらった……ような」

なにせ、ふんわりでしたからね、聞く耳半分ですよ。

もしかしたら説明してたかもしれないけど。

「まあ……簡単に説明すると、魂は……細い糸で繋がっていた、
とでも言うのでしょうか」

「細い……糸」

「そうです。だから初代様は、強大な魔力で害のないように断ち切ったのです。……つまり」

ヒスイさんが、間を開けて言った。

「強大な魔力さえあれば、繋がりを戻す事も可能……というわけ
です」

……はい？ 繋がりを戻せる、って。

それは、つまり……。

「——貴女と姫様は、繋がっているのです。姫様はきっと、最後の力を使って……繋がりに戻したのでしょうか。繋がりを戻せば、命が繋がる代償に……力を得る事が出来ますから。」

その言葉に、あたしは啞然。

そんな馬鹿な、ってな感じよ。

だって、つまり……今何処にいるかもわからない姫様が死ねば、あたしも死んで——あたしが死ねば、姫様も死んでしまう、そういう事だよな？

かつ、勘弁してくれっ！

「ちょっ、と！ 待ってください！ なんていうか、その……、
そう！ 力なんてあたし持ってないです！ ……寝るのは早いです
けど」

ちなみに、どこぞの眼鏡小学生に引けをとりません。

「……では、お聞きますが。十六歳の春——こちらと季節は同じだと思いますが——なにか、生死に関わる、事故や病気になりませんでしたか？」

「そ、そんなのっ——」

あるわけない、と、言おうとして……あたしは青ざめた。

何を言ってるんだ、あたし……ちゃんとあるじゃないか。

生きているのもおかしいと、言われるような大事故が。

「……あるようですね」

「……」

「二つめです。赤石様は、その髪……向こうではその色を持って生まれる方が、いないそうですね。いつから、そうなったのですか？ ……噂によると……繋がりを戻した時、魔力の強い者の方の髪の色が、弱い者に似てしまいうらしいのですが」

明らかだった。

あたしはたしかに、十六歳の春に……大事故を起こして、その日に髪の色が赤に染まってしまったのだ。

——原因は……未だに、不明。

だった。

「……そんな……繋がりって言われても……あたし、力なんて……」

「力は、様々なのです。攻撃的な力が身に着く人もいれば、不老不死になってしまう人、魔力が増える人……治癒能力が上がる人」

治癒……能力？　つまりあたしは……回復するのが、早いって事なの？　そんなこと……言われなきゃわかんないっての。

ああ、もう、だれか嘘だと言ってくれーっ！

「ご安心ください」

「……？」

その時、初めて、ヒスイさんが……フードを脱いだ。

そこからサラッと流れ出る長い髪。

それは、恐ろしく綺麗な白銀の髪で……神秘的どころか、神々し

ささえ感じた。

しかも、耳が……普通の人間の耳じゃなくて——その………獣耳、だった。

——ていうか……あの、ダイヤって男もそうだけど。

白が、こんなにも美しく……綺麗だとは思わなかった。

あたしは気付かない内に、「綺麗……ていうか耳……」と呟いていた。

ヒスイさんが苦笑する。

「ありがとうございます……。そう言ってくださったのは、姫様を入れて二人目です。耳は……実は私、獣人なので」

それにこの世界で白は不吉の象徴ですからね、と。

ヒスイさんは苦笑したまま、そう溜め息とともに呟く。

白が不吉？ 馬鹿を言え！ これのどこを見て不吉に見えるんだ
つつの！ 小一時間くらい問い詰めてやりたいよ、不吉だなんて
言う人に。

……だって、本当に……綺麗だから。

「赤石様」

「——あつ、はい！」

「私にお任せください。貴女と、そのご友人二人……必ずや守つて見せます。絶対に、死なせやしません。この——私の命に変えてでも」

そう言つて、ヒスイさんは立ち上がり……あたしの前に来て、跪いた。

美しい長い髪が、ハラリと揺れて、床に付く。

伏せられた瞳にかかる白銀の睫毛まで……綺麗だなあ、なんて思
ってしまった。

「さあ、ご友人を探しにまいりましょうか。一緒に連れて行く
のを迷ってしまったのです……話では赤石様一人だけのはずだった
ので」

「あ……そう、なんですか」

じゃあやっぱり、二人はあたしのせいで巻き込まれたんだな。

……あとで土下座をしておこう、理由は述べずに。

「お二人はテラの子分に見張りをお願いしてありますので、その
子分のドラゴンの元に——」

と、こじで。

ヒスイさんは、嫌な間を開けながら……数秒間窓をガン見していた。

……後ろを見るのが、怖いんですけど。

あたしは、嫌な予感をたっぷり抱えながら、後ろにある窓を振り返る。

そこには真っ赤で強そうなドラゴンがいて、所々傷だらけになりながら……空を飛んでいた。

……嫌な予感、的中、かも？

「なっ、なにがあったっ！」

「ギユウツ、ギユ……ウツ」

ヒスイさんは、なんて言ってるかわからないドラゴンの唸り声を聞きながら、段々顔を陰しくさせていった。

あ……そうか、ヒスイさんは獣人だから言葉がわかるのか……納得。

「……わかった。お前は祠に戻って、休んでいる。今の情報を、祠にいる奴等に全員話せ——テラ、お前も聞いてたな？」

「うー！」

人型テラはそう言って、外へ出た。

窓を覗けば、あの黒々とした姿に様変わりしている。

「赤石様」

「は、はい……」

「誠に……申し訳ありません。ご友人二人が、国の兵士に捕まってしまったようなのです」

「……うええええええええっゴホゴホッ！」

盛大に叫んだせいで、むせてしまった。

「く、国って……どこですか？」

「——オフガイア、です」

……ま、まじかよ……！ タイミング、悪すぎだろっ！

でも、二人が捕まった以上は行くしかないわけで……でも行ったら行ったで、あたしを見た人達は必然的に………二代目魔術師が生き返ったと、思われるわけで。

は、八方塞がり、ってこと？

「……やむを得ません。オフガイアに行かなければ……あの二人も、こちらの世界の少し厄介な二人に似てらっしゃいますので——

早くしなければ、危ないです」

「や、厄介って……どんな？」

「——泥棒ですよ。しかも、国宝ばかりを狙う、凄腕で、仕事の早い……S級クラスの」

「……まじかよ」

しかもその二人……ヒスイさんの話しによると、最近のオフガイアでも数件やらかしているんだとか。

まさに大ピンチだ……間違えられても、仕方がない。

……急がなきゃ。

あたしはすぐに外へ出た。

テラに乗っけてもらって行けば、ひとつとびだ。

そう思っただけで今度こそ背に乗ろうとしたら……何故か、道をヒスイさんに塞がれた。

あたしは首を傾げながら、問う。

「なんですか？」

「さっき言った事をお忘れですか？ 赤石様は、命が繋がっている以上……もう一人の姫様なのです。バレたら大変な事になるのはおわかりでしょう」

「つても！ あたしは二人を助けに行く！」

「いけません！ 私が必ず助け出しますので、ここでお待ちください！」

あたしは、その言葉を鼻で笑った。

待て、だつて？ よくまあ、そんなことが言えたもんだ。

大切な友達が——いつもあたしを支えてくれた、“家族”が……
危ない目に遭ってんのに。

のんびりとこんなところで、待ってられるもんかつ！ あたしは
絶対行く、絶対に。

そして二人を、助け出して見せる……！

「あたしは絶対ついてくよ。ダメって言うてもついてく。しがみついて」

「……」

「元はと言えば、あたしのせいで二人は巻き込まれたんだから……
…あたしが助けしないで、どうするの」

一歩も引かない。

絶対に、なにがなんでも……。

その思いが通じたのか、揺るぎのないあたしの瞳を見つめながら、
ヒスイさんは難しい表情をした。

迷っている、そんな感じ。

……なんで迷っているのかは、わかる。

戦力外についてこられても迷惑……って、考えているんだろう。

……それは、あたしが一番把握してる。

姫様みたいに魔術師でもなければ、剣だって扱えない……唯一あるのは、治癒能力と……ギャンプラーの能力、だけ。

誰かを助けるためにはまったく使えない能力だけれど……それでも、まだ使い道はあるはずだ。

イッチーとチョコだけは、絶対に助け出して見せる。

「……わかりました」

根負けしたヒスイさんが、溜め息を吐きながら言った。

勝った！ と喜んだのも束の間、ヒスイさんが「ただし」と付け加える。

「この布で、顔を隠してください。……ついでに、髪も染めましょうか」

パンツ、と両手を叩き、ヒスイさんはあたしの髪の毛に触れた。

途端あたしの髪色が、鮮やかな赤から……懐かしき、艶やかな黒に変色する。

「長くは持ちませんよ。先ほども言いましたが、赤石様は治癒能力が備わっているはずですから……直に戻ってしまうでしょう」

「ど……どのくらい？」

「……わかりません。多分、もしかしたら……長くて二時間、短くて……三十分……でしょうか」

……とても曖昧な回答だけど……でも、しょうがないか。

ためらってなんかられない。

もしバレたら……、その時なんとかしよう。

大丈夫でしょ、多分。

あたしは受け取った真つ赤な長い布を、顔にグルグル巻き付けた。
目だけは隠れないように気をつけて。

「行きましょう。急がないと、最悪の結果が待っています」

「最悪の……結果って？」

心中、引きつった笑みを浮かべながら、あたしは答えを待つ。

「……死刑執行、とか」

「——！！ はっ、早く行かなきゃっ！！」

頼むから、すでにお迎えが来てたりとかしないでよ！ 二人とも
っ！！

一方その頃。

——ヤバい、何故かわからんがヤバい事になってしまった。

俺はこれからどう抜け出すかについて、頭を巡らす。

まず、何処から順を追えばいいのか……とにかく最初は、カエンが真つ黒なドラゴンに拉致られた所からだ。

剣士という、もらった力のおかげか……動体視力が格段によくなつた俺——だからこそ、あのドラゴンが最初からカエンを狙っていたのをいち早く感じとれた。

しかし助け出すにはうまく身体がついていかず、あのタイトの妖精が言っていた事を……よく理解できた。

力を授けるとはいえ、最強なわけではない。

努力を怠ってはいけないのだ。

感覚ではわかってても、身体が言う事を聞かない……そう言いたかったんだろうな。

本当に、不覚だ。

今頃……カエンは、あのドラゴンの腹におさまってしまっているのだろうか。

……そう考えたら、ゾツとした。

俺と千世子——カエンはチョコと呼んでるが——馴れ初めというか、つるむようになったのは、あいつが入院をしていた時からだった。

俺達は……助けられたのだ。

あの、大事故で。

カエンは、あまりにショックが強過ぎたのか、詳細を聞かされな

ければ覚えていないようだが……。

たしかに俺達二人は、カエンに助けられた。

カエンがいなかったら……死んでいたといっても、過言じゃない。

カエンは、あの大事故のあった日……あのビルにいた。

だが、違う。

あいつは、事故が起きてから……ビルに乗り込んだのだ。

……俺達が、取り残されていると知って。

あいつは学校では、人気者だ。

かたや俺達は教室の隅っこにいるような人種。

人と向き合うのが苦手な俺と、あの頃精神状態が危険だった千世子。

あいつにどう見えてたかは知らない——でも、何の関わりもなかった俺達を、カエンは命を張って助けに来た。

そして……俺達は助かったのだ。

……変わりに、あいつは生死を彷徨うような怪我を負ってしまったけど。

あいつは……泣き虫で、弱くて、馬鹿で、誰よりも怖がりだけど、でも、頼りになるやつだ。

肝心な時には命を張れる、そんな奴。

自己犠牲精神、って言うのだろうか……見てるこっちはハラハラする、それが赤石カエンなのだ。

……あいつには、命も、精神的にも助けてもらった。

俺と千世子は、家の関係で昔から馴染みはあったが、カエンはただ昔から学校が同じだった……ただそれだけ。

なのにもかかわらず、なりふり構わず助けに来てくれた。

あいつは……弱いけど、強くて。

馬鹿だけど、機転が効いて。

泣き虫だけど、泣いちゃいけないところだけは泣かなくて。

怖がりだけど、だれよりも強がりな……頑張り屋。

俺も、千世子も、あいつのためなら命を張れる。

そして、今この状況こそ……俺達が支えないといけないのだ。

今、あいつの精神は不安定だ。

聞かなくても、わかる。

理由はわからないけれど、あいつはなにかを感じ取っているんだと思う。

だから。

今度は、俺達がカエンを助ける番。

あいつを苦しませたりしない。

あいつを悲しませたりしない。

あいつを寂しがらせたりしない。

あいつを死なせたりなんか、絶対しない。

……そうは、思ってる、けど。

どうしたものか、この状況。

「櫟くん……」

「……なに」

「暗いですね……」

「……そうだね」

「寒いですね……」

「……そうだね」

「ここ……檻の中ですよね」

「……そうだね」

「私達……絶体絶命ですよね」

「……そうだね」

頭を抱えたい状況だった。

「カエンちゃん、無事でしょうか……お食事にされてなきやいいんですけど」

「メインディッシュなら……ギリギリまだ生きてるだろ、多分」

「……もし前菜だったら……」

「……………」

こうしちゃられない。

俺達だけでも、まず助からなければ。

そして、早くカエンを助けに行かないと……。

そして、再び頭を巡らせるという堂々巡り。

逃げる方法なんて、思い付くわけがなかった。

はあ、と溜め息を吐く。

何故かは知らないが、俺達は泥棒の罪で捕まったんだそう。

カエンが連れ去られたあと走って追いかけたが、いきなり現れた兵士達に捕まり、城まで連れてこられた拳句、これ。

いったいどういうことなんだ。

……まあ、予想はつくが。

一時間は経っただろうか。

グルグル檻の中を見渡していた時、ふと遠くで扉の開く音が響いたと同時に、看守の驚くような声が、こちらまで届いた。

「だっ、ダイヤ様！」

「罪人の様子は」

「ハッ。依然変わりなく、大人しくしている模様です」

「そうか。王からの伝令だ、すぐさま死刑棟に向かわせるようにと」

……死刑棟。

どんな場所かは、まあ、相当な馬鹿じゃないかぎり……わかるだろう。

俺達はこちらから、死刑を執行されるのだ。

……いち早く逃げ出さねば。

カツカツと歩む足音が、こちらへ近付いて来た。

そして扉の向こう側、現れた男に……俺は視線をやる。

「久しいな。あの日以来か、こうして会って話すのは」

「……悪いんだけど、人違いだ。俺達は——」

「表の世界からやってきた。と、言いたいのだろうか？　それがお前らの得意な脱出の仕方なのは、重々把握している」

言う前に、言われた。

……しかも最悪なパターンで、だ。

ハッキリした。

やはり、この世界にいる俺達が——そういった人種だということ。
厄介だ、非常に。

「アレを何処にやった？」

「……アレ？」

「言わないとわからないのか？」

「俺らは表の世界から来たから」

「……しつこいな、それでしらを切り通せると？」

「事実だし」

「……。まあいい、とにかく聞きたいのは一つだ。国宝——いや、世界の宝と言ってもいい。あの三つの宝を、いったい何処に隠した？ 売ったのか？」

お前こそしつこい、この女顔。

……とは言えない。

「さあ」

だから、そう言って肩を竦めるだけにしておいた。

千世子もビクビクしてるしね。

しかし、目の前の男はしばらく間をおき……唐突に言う。

「命令されたのか」

「……命令？」

「……………姫様に。ルビィ・ブレード・オフガイアに、だ」

……………その、名前は。

タイツ妖精の言っていた、二代目魔術師……………その人、だったか。

運がいいのか悪いのか……………いや、悪いのか。

「とにかく、知らない。……………俺達は表の世界の住人だから」

「……………看守」

「ハッ」

「連れて行け」

——問答無用。

そんな言葉が漂いながら、俺達は檻から出され——何処かへ、多

分死刑棟とやらへ、連れていかれるのだった。

願わくば。

カエンだけでも、助かっていますように。

——何故また、こうなるのだ。

「普通に背中に乗せてよおおおおおっ！」

さっそくと言わんばかりに、オフガイアへ向かい出した一匹と二人——あれ？ 獣人は一人と数えていいのだろうか。

まあとにかく、一匹と一人と辛うじて一人。

何故だかあたしはまた前足で掴まえられていて、背中に乗る事は叶わないまま現地に向かっている。

……納得できぬ。

「申し訳ありません！ スピードを最大限まで出していますので、慣れていない赤石様は振り落とされてしまうのです！」

「なるほどおー！」

たしかに落とされるね！ って馬鹿ヤロー！ 今も充分に落とされるわっ！！

「あとのくらいで着くんですかー！？」

「このまま行けば、あと十分もしないかと！」

「もうちょっと早くありませんかー！？ なんかもうっ……は、吐きそう……」

こんなところで吐いて、もし下に誰かいたら……。

空から舞い降りたゲロ。天使じゃなくて、ゲロなのが重要。

……うわぁ吐かれるのも嫌だし、吐くのも嫌だ。

「もう少しのご辛抱を！」

そしてもう少しで吐きそうなんだけどね……！ とは言わず、全身全霊を込め、吐くのを堪えた。

……大丈夫だろうか、あの二人は。

よりによって、あのオフガイアの兵に捕まっちゃうなんて……運の悪い。

あれ……でも、待って。

これからオフガイアに行くって事は、つまり……――

あたしは、テラの背にいるヒスイさんへ向かって、声を張り上げた。

「あ、あのっ……」

「なんですか？」

「えっと、オフガイアの兵に捕まったってことは……城に、行くんですよ」

「はい。やむを得ないですが、そういう事になります」

「……ヴィ、ヴィカに聞いた話、なんですけど。姫様を……殺すはずだった人も、いるんですよ？ あと、父親とか母親とか——妹、とか」

夢で見た、あの人達を……これからあたしは、間近で見る事になる。

これまで、確信にまで至る証拠は……見てはいなかったけれど。

いや、一度見たか……城を。

でも……人まで見てしまったら、現実として受け入れなければならぬのだろう。

——ダイヤ。

あの、美しく輝く銀色の瞳を持つ……不思議なオーラを放った、青年。

独特な雰囲気と、悪を許さんとする清廉とした面持ち。

彼も、また……闇を抱えてしまっているのだろうか……？ 八タから見ていると、あの青年も、姫様のことじゃ好きだったんじゃないかなあ……と、思ってしまう。

そう思ったら、何故か胸がチクリと痛んだ。

ん？ と、意味の分からない痛みに、あたしは首を傾げた。

なんで今チクリとしたんだろう？ ……へんなの、あたし。

不思議に思っているあたしを余所に、先ほどの質問にヒスイさんはどこか嫌々そうに答えた。

「——ああ。あの、いけ好かない金髪野郎ですか」

金髪野郎？ ああ、たしかに、あのダイヤって人……金髪だったかも。

と言っても、どちらかというところ……プラチナブロンドに近いけどね。

ほら、限り無く白に近い金髪のこと。

「いると思いますよ。あの正義を象った恩知らずは、未だ大好きなお城で騎士団の教育に励んでいるのでしょ」

「……そ、うですかあ」

なんだろう……嫌々、というより……憎々しげに、というほうが合っているかもしれない。

嫌い、なのかな？ 考えなしの馬鹿なあたしは、それを直球で聞いてしまった。

「嫌いなんですか？」ってね。

そして聞いたあとで、そんなことわざわざ聞く奴がいるか！ なんて自己嫌悪に陥る。

馬鹿、ホント馬鹿、あたし。

ヒスイさんはキョトンとしたあと、苦笑いをしながら、「そうですな」と言った。

「姫様の死刑執行人に選ばれていましたからね。近いのは私ですよ、絶対。私が選ばれていたら、即座に姫様を抱えて逃げたのに……だから選ばれなかったんでしょうが」

「はは、は……」

「それにですよ、あいつ、私よりあとに姫様に拾われたくせに……いけしゃあしゃあと側近なんかについて。しかも、拾われてもしばらくは凄く生意気で。姫様に“寄るな”だの“お前なんか信用なんかするか”だの……何度絞め殺そうかと思っただか」

……これを聞く限り、ヒスイさんがどれだけ、姫様信者なのかということが伝わって来る。

疑ったりしなかったのだろうか？　だって、妹を殺そうとしたんだよね？　理由は知らないにしろ……命を狙ったんだから、たしかに、悪い事だ。

ヒスイさんは、あたしの疑問に気付いたのだろうか。

ふわりとほほ笑んで、誇らしげに言った。

「姫様は、いつでも正しいのです。間違いなどありません。……だから私は、地獄のそままでついていく所存なのです」

それに、と。

ヒスイさんは続ける。

「たとえ……間違っていようとも」

「……？」

「たとえ、悪に染まろうとも。私は、それを止めることを致しません。姫様の願いが“世界平和”であるなら……それをお手伝いしますし、もし“世界征服”だとしても——地の果てまで私はついていき、それを精一杯頑張り手伝うのです」

凄い、忠誠心だ。

並大抵の決意なんかじゃ、ない。

きっとこの人なら、本当に手伝うのだろっ……そして命を掛けて、姫様を守るんだ。

それがひしひしと伝わり、あたしは素直に関心した。

「だから姫様の一番の側近は私なのです。決して金髪正義馬鹿ではありません」

「……」

なんだかなあ。

この二人が会わないようにだけしたいよ。

「――！ 見えました、あれがオフガイアです」

ヒスイさんが指差す方向を垣間見る。

そこには、たしかに夢で何度も見た……城があつて、少し離れたところに、姫様が飛び降りた塔が見えた。

城と繋がっているそこには、遠目からでもわかるほど大勢の人がいる。

そういえば、テラに拉致られた時も、遠目にチラリと城を見たんだっけ。

そうだ……あそこってたしか、死刑をするための場所、だったっけ？ 誰か死刑になるのかなあ……嫌だな、人が死ぬなんて。

そう思って顔をしかめていたら、不意にヒスイさんの重たい声が届く。

「……不味いですね」

「え？ 空気が？ 美味しいと思うよ、あたしがいた世界よりは」

木がいっぱいあるし。

「そうではありません。見えますか？ あの塔を」

「ああ、アレ？ たしか死刑をする場所だっけ」

「そうです。そして今まさに……ご友人様二人が、運び込まれて
いるのが見えます」

「へえ…… ええ ええ ええ うえ ええ ええ！？」

な、
なんです！？

さすがにそこまでは、あたしには見えないけれど……ヒスイさんが言うなら、間違いはないのだろう。

不味い、たしかにこれは……非常に不味い。

「ちよっ、どっ、もっとスピード出ないんですかっ!？」

「……仕方ない、ですね」

そう言うや否や。

ヒスイさんは、驚くような事を言っただけだ。

「直接あそこへ乗り込みましょう」

「——はい？」

「結界があるので、テラに乗ったままは行けません……飛び降りて着地するしか方法はありません」

ビックリし過ぎて、ブヒッと鼻水が出ってしまった。

……お嫁にいけない。

「私が赤石様を抱えて着地します。ご心配はいりません」

「いるの！？ 心配ありなの！？」

「大丈夫だと思います。きっとなんとかなるはずです」

「先ほどと違ってかなり不安な物言いじゃございませんかああああああ!？」

あああつ！ そんな事言ってる間にも、塔に近付いて——！！

「行きますよ——！ テラッ、離せっ!！」

「キュウ!！」

ふわり。

あたしは急に、掴まれる感覚を失った。

……あ、訂正。

ふわりじゃなくて、ヒュ——…かも。

うん、つまり、落下。

「いぎやあああああっ！」

「捕まってください！」

——そしてあたしは、ヒスイさんに抱き抱えられたまま……
塔へと落ちて行くのだった。

——風通しの良い、塔のてっぺん。

俺と千世子は、縄やら変な札で、動きを縛られていた。

……カエンの言っていた、夢とリンクする。

祭壇みたいな前で、俺達は寝転んでいて……ああ、どうしたものか。

せめて千世子だけでも、なんとかならないだろうか？ ……ならないだろうな、動けないんだし。

「これから、死刑を執行する。罪状は以下のとおり、様々な国で国宝を盗み、ここオファイアの国宝も盗んだ挙句何処かにやった。許すまじ行為だ。男、サファイロス。女、パール。執行人はこの城の兵だ。依存はないな？」

……死刑自体に依存があるけどな。

などと言っても、どうせ聞いてはくれないのだろう。

俺は小さく溜め息を吐いた。

「さて、ロジーナ姫……良いですか？」

「——いいわ。さっさとやりなさい」

姫、と呼ばれた女。

姫のくせしてヒドい奴だ……涼しい顔して死刑を進めてやがる。

その隣りには、先ほど檻で会った女顔剣士もいやがる。

……どうする？　こうして間違えられたまま、死んでしまうのだろうか。

カエンを……置いて行つたまま。

そう思うと、無様でもいいから、がむしゃらに暴れたくなった。

あいつを置いて行くなんて、出来ない。

あいつは、カエンは、俺達の親友であり……家族なんだ。

その大切に大事な家族を、置いていきたくなんかない。

絶対……泣くとわかっているから。

意外とあいつも、ドラゴンに食われて上で待ってるかも知れないけど。

寝ながらな。

俺は、そうじゃないと祈りながら……空を見る。

頼む、頼むから……お前だけは生きていてくれ。

俺達を助けてくれたお前だけでも、長く生きろ。

そして……もし願いが叶うなら。

また再び、俺達を助けてくれ……—

「では、死刑を執行する」

頼む。

誰か——いや、カエン……助けてくれ。

「いいいいうおおおおおおおおううえええええっ!!」

——ズダァン！ と、聞いた事のある叫びをあげながら……その時、空から現れた二つの影。

俺と千世子は顔を見合わせた。

間違いない。

助けに来てくれたのだ……カエンが再び。

俺達は安堵するのだった。

——あたしは抱えられたまま、というか、ヒスイさんにお姫様抱っこをされたまま……その地に降り立った。

振動が直に伝わり、身体がビリビリとする。

しかし目に移る二つの姿を見た途端、あたしは喜びが身体を走り、我を忘れて叫んだ。

「イッチー！ チョコ！」

ヒスイさんから降りて、あたしは二人の元に駆け出し……飛び付くように抱き付いた。

つまり、二人を潰す形で。

「おっ、重いっ……降りろ馬鹿！」

「カエンちゃん……く、苦しいですう……！」

「おっと失敬」

あたしは二人が活着ているのを確認して、ホッとしながら二人から退いた。

そして札やら縄やらを外し、起き上がった二人に再び抱き付く。

「よかった！ 本当によかった！」

「いてて……」

「えへへ、カエンちゃんもよくご無事で！」

「まあね！」

「……それより、お前……なんだその顔」

「何かの……真似ですか？ 髪も染めてるみたいですし」

「え……！ あ、う、うん、そう！ そうなんだよ！ あたしは、海賊王になるっ！ ……的な、ね」

それなら普通麦わら帽子だろうっ、なんてツッコミはNGですよ。

言えないよ、顔を見られたら困るなんてさ。

……やっぱりあとで、話しておこうかな……二人には。

「何しに来た。オフガイアの裏切り者」

その、透き通るような凜とした声——あたしは無意識に、そ
ちらを振り返る。

そこにいたのは、夢で何度も見た……あの人。

「別に？　好きで戻って来たわけじゃない。アンタは未だこんな
城に飼い慣らされてるのか……ダイヤ」

そう——ダイヤ。

ダイヤモンドのような、キラキラと輝く綺麗な瞳を持つ……プラ
チナブロンドの青年。

実物、だ。

「相変わらず口が減らないな、この裏切り者。そいつらを助けに
来たということは、やはり貴様も一枚噛んでいる……ということか」

「はんつ、お前も相変わらず早トチリが治ってないねえ。……あ
あ、だから、姫様に何にも話されてないのか」

バチバチツ、と、二人の間で火花が散った。

……相当、向こうもヒスイさんを毛嫌いしている様子だな。

話の流れで……ヒスイさんが昔、ここにいたというのはなんとなく
気付いていたけど。

やっぱり因縁みたいなものがあるのだろうか？ ……多分、姫様絡
みで。

モテモテだなあ、姫様。

「……国宝を何処にやった。貴様も噛んでいるということは、知
っているだろう」

「だーかーらー。早トチリはよくないよ、正義馬鹿。……この子
らは、正真正銘“表”の世界の子だ。ヴィカにでも聞いたら？ あ

「いつが連れて来たんだからね」

「信用などできるか。特に、貴様なんかの言葉はな」

「……だからお前は何にも知らされないんだよ、バーカ」

一触即発。

そんな言葉が頭を霞める——非常に、よくない空気だ。

こんな所でもし負けたら……負けなくても、もし大怪我なんてしたら……一体誰があたし達をここから助けてくれると言っのか。

今度こそあたしら死んじやうよ！

あたしは慌てて立ち上がり、声を張り上げた。

「スッ、トーープッ！」

「！？」

「あ……赤石様？」

……やるしかない。

あたし達が“表”の世界から来たのだと、わかればいいのだから。

「しよつ、証拠を見せるから！」

「赤石様、まかさ……」

「いいから、大丈夫」

別に、あたしの顔を見るだけなら……問題は無いはずだ。

問題は、繋がらないとわかればいいだけ。

髪は……まだ黒いし、そんなに経ってないから、大丈夫……のハズ。

あたしは、コクンと生唾を飲んだ。

視線が……あたしに、集まっている……その中にはもちろん、あのダイヤや、大臣、妹も……いる。

大丈夫、大丈夫だ。

変に緊張したら、怪しまれちゃうよ。

すつと息を吸って、ゆっくりと吐いた。

そして、顔にある布に……手を掛ける。

「これが、証拠です」

そして……あたしは、その布をスルツと取り除いた――

第一話？

パサツと音がして、あたしの顔を覆い隠していた、真っ赤な布は……地に落ちた。

そして、息を飲む声。

「これが……証拠、です」

あたしは、緊張した面持ちで、そう言った。

……ていうか、視線、まじパネエ。

え、まさか、本当は姫様だろ……なんて思われてないよね？
…
思われてない事を、祈るしかない。

「……姫、様……」

「！」

その悲しげな呟きを、たしかに聞いた——ダイヤ、から。

「あたしの名前は、赤石カエン。そしてこっちが……」

「！……青蓮寺櫓。通称、イッチー」

「あっ……わ、私は、黄泉千世子、です。えっと……通称、チヨコです」

流れるような自己紹介のあと、再び訪れる沈黙。

その沈黙を破ったのは、ヒスイさんだった。

「わかっただろ？ お前らは、表から来た無関係の人間を……確
かめもせず殺めようとしたんだ。——ねえ、妹様？ どう責任をと
るんだ。変わりにアンタが死刑になるかい」

一応この人も姫様、なんだよね？ そんな言い方、いいのかよ。

「……本当に、表の世界の子でしょうね？ 髪を染めただけ、じ
やないかしら」

その発言で、まわりはどよめいた。

情けないけれど……あたしまでドキリと、肝を冷やす。

……やっぱり、嫌な感じだ。

夢で見るより、肌で感じる事が沢山ある。

あの妹は———なにか、おかしい。

なにが、おかしいのだろうか。

理由はわからないけど……すごく、胸がザワザワする。

あと、なんか……イライラもする、かも。

「……疑り深いねえ。昔のアンタは、そんなんじゃないだろうに。アンタ、本物の妹様かい？」

「———無礼な。王族に対して、もう少し口の聞き方を覚えなさいな」

「はんつ。……アンタが本当に王族だと確信で来たら、ね」

や、やっぱり……顔を出すのはまずかったのだろうか……。

これしかないと思ったんだけどな。

あたしはオロオロとしながら、視線を彷徨わせた。

その時、先ほどからあった一つの視線に……気付く。

——ダイヤだ。

泣きそうできて、尚且つ苦しそうな表情を浮かべている。

それを見て、あたしはズキリと胸を痛めた。

きっと、思い出しているのだろう。

あたしが……姫様と、瓜二つ、だから。

しばらくしたあと、ヒスイさんが「さて」と言っ、あたし達に歩み寄った。

「……………では、これで私達は行くとします。疑いは晴れたでしょう？ それとも、まだ何か」

「ヴィカを呼ぶまで信用は出来ないわ。それまで、檻に閉じ込める」

「おやおや……………相当ご乱心なさってるようだ、姫。間違えたからって、意地になることありませんよ？ 昔のあなたは、姫様に引けをとらないくらい聡明でいらっしやっただのに……………一体全体どうしたのやら」

「……………本当に、口の減らない子」

突き刺さるような視線……………これは、殺気というやつか？ なんて……………重たい視線なのだろう。

背筋の裏から、ゾクリとするような……………薄ら寒い感じ。

姫がこんなの出すか？ フツー。

……………こっちの普通を知らないから、何とも言えないのだけど。

「とにかく、ヴィカが来てからよ」

「そして、閉じ込めている間に……この子らを殺す気ですか？
念の為、とか言って」

「さつきから、無礼極まりない——！」

「だから。……アンタが王族なのか確信が持てないからだつつ
てんだろっが」

ヒヤリとした冷たい空気を、間近で放つヒスイさん。

あんなに丁寧に話していたヒスイさんが……こんなに、ガラリと
変わるとは。

あたしは啞然とする。

「案外あの時……アンタが死んでれば、この国はまだ平和だった
かもな」

「貴様——！」

「みんな言わないだけで、そう思ってたんだよ。……死刑になるのが怖いから、絶対言わないけど……な」

クスリと冷たく笑う、ヒスイさん。

「じゃ、本当に行くわ。……サヨウナラ」

——ぞわり。

身の毛がよだつような感覚が、あたしを襲った。

誰かの殺気とか、空気とか、そんなんじゃないかって……身体のだる
かが、再生しようとしているような。

……再生？ も、もしかして。

やつ、ヤバいっ——！

「髪がッ——！」

「——！？」

急いで髪を押さえる、あたし。

見なくても、感覚でわかった……ジワジワと、髪に何かが流れるような感覚。

手にすくって、髪を見る。

……戻っちゃった。

本当に治癒能力だったんだあ、ハハハ。

てへっ！ バレちまったよぉー！

「あっちゃー。戻っちゃいましたね」

「戻っちゃいました……はは」

「もう遅い……ですね」

「……はあ……」

がくん。

肩を限界まで落とした。

その時、妹様の声が響く。

「……どういふことかしら？」

「……。見てのとおり、彼女は繋がっているんですよ——彼
女の、片割れと」

あえて、それを姫様だとは言わず。

ヒスイさんはうまく暈した。

「死んだはずの人間が生きている……それは、由々しき事態ね」

「そうですか？ 私は嬉しいですよ。叶う事なら、姫様に早くお会いしたいです」

ふざけながら、ヒスイさんは話の流れを変えようとしている。

だけど、多分……無駄だろう。

「あの女を殺せば、必然的にその子も死ぬわ」

「……そうなりますねえ」

「ならば——その子を今殺しても、同じ事」

やっぱり……そうなります、よね。

「——その子を殺すのよ！」

ああ、やっぱりこうなるのか。

あたし達に、安息はないの？

「掴まってください！」

そのヒスイさんの言葉に、あたし達三人はすぐさま反応する。

そして……。

「行きますよ——！」

ダンッ、と。

地を踏む強い音とともに……城を飛び下りた。

「うつそおおおお！」

「っな……！」

「きゃあああっ！」

あたし達はそれぞれの驚愕の声を上げながら、湖に落ちて行く。

ヒスイさんに掴まったまま。

……しかし、驚くのはこれからだった。

落ちて行く途中、ヒスイさんが叫んだのだ……「ガイア、助けてくれ！」——と。

ガイア？ それってなんですか——と聞くよりも前に。

……“それ”は、湖から現れた。

「ひっ……で、でたあああああっ——！」

夢の最後で、何度も見た……あれ。

オフガイアの守護神であり、湖の守り神——頭が九つもある、あの生き物だった。

まじかよ——！

夢じゃなくて、マジで見ちゃった——！

……っ、これ……食われちゃうんじゃ……！

「そのまま、私に掴まっついてください——！」

その、ヒスイさんの言葉だけを頼りにして。

……あたし達は、吹っ飛ばされた。

——湖の向こう側である、森の広がる陸に。

「そっちー!？」

ヒスイさんらしくない、驚くような声。

でもたしかに、こんだけあたし達を吹っ飛ばせるなら……真上に
いるテラの所に飛ばしてくればよかったのに。

しかし、飛ばされたものはしかたがない……結界の外まで走らな
くちゃ——!!

「仕方ない——行きますよ！ 死ぬ気で走ってくださいっ！！」

あたし達は頷いた。

走るのは、あたし達の特技だからね！ これでどれだけの先生を撒いたか！ 思い知れ！！

「恐怖の村上先生が分裂して今あたし達は追いかけてると思おう！」

「ここここ怖いですっっ！」

「……！」

涙を浮かべるあたしとチヨコ、やけに真顔で走るイチー。

マジで命懸けだ。

村上戦法、案外使えるかも……。

「いいですか皆さん！ 町は入り組んでかなり大きいですが、全体に結界があるわけではありませんっ！」

「結界に出るまでの辛抱……ってことか」

ヒスイさんの言葉に、イチーが答えた。

どのくらい走らなければならないのかは……まったくわからない。

でも、やるしかないんだ。

大丈夫、走るだけなんだから——！！

ドンドン森を進んで行くあたし達。

その時、ふと気付く……心なしかヒスイさんのスピードが、落ちていると言っ事に。

……右足を、引きずっている？

「ひつ、ヒスイさんっ？ ……もしかして……右足痛いですかっ？」

「——！ 大丈夫、ですっ」

否定はしない……やっぱり、痛めてるんだ。

そりゃそうだ。

あたしを抱えたまま飛び下りたり、三人を抱えたまま吹っ飛ばされて……着地をしたり。

足に負担が掛かっていても、おかしくはない。

「——イッチー！」

「わかってる！」

「え——わっ！——！」

イッチーの脚力をナメちゃいけないよ。

男だからうんぬんは置いといても、イッチーは走るのがうんと早い。

今も、あたし達に合わせて走っていたくらいだ。

一人抱えたくらいじゃ、イッチーには勝てない！

なんせイッチーは、あたし達を置いてさっさと先生から逃げるんだからね……！

何度イッチーを殴り殺そうかと思ったか……！

「すいません……」

「それより、ヒスイさん……でしたっけ。道案内をお願いします……！」

チヨコが笑顔で言う。

「まかせてください！ もうすぐ森は抜けます……敵がいないと
は限りません、魔法で援護は致しますが、前方に注意を！」

「それなら楽勝！ ねえ二人とも！？」

「もちろんですっ！」

「ああ！」

あたし達は笑顔を忘れずに、走る。

笑顔つて、重要じゃん？ 笑ってれば、つまんない事や怖い事も、
吹っ飛ばせると思うんだ。

でもそれは、一人じゃダメ。

誰かと一緒にいるからこそ楽しめて、怖くなくなるんだと思う……
あたしはね。

だから、あたしは笑う。

イチーと、チョコがいる限り。

「森を出ます——！」

あたし達は気を引き締めた。

もちろん、笑ったままで……引きつり気味かどうかはともかく。

「動揺せず、走ってください！」

——長い長い森を、出た。

そして、写るのは……眩しいくらいの太陽と——ざわめき合う人の群れ。

いきなり森から現れたあたし達に、視線が集まり……そして。

「ひ、姫様だーっ！」

「あの泥棒もいるぞっ！」

「あの方はっ……姫の側近だった……ヒスイ様!?」

まあ……それぞれに似ていらっしやる、ということ……いや、ヒスイさんは実物だけださ。

非常によろしくない。

だって、今の声を聞き付けたのか、まわりからドンドン人が集まってくるんだもの。

あたしはつい、足を止めてしまう。

しかしそれに気付いたヒスイさんが、あたしに向かって叫んだ。

「止めてはなりません！ そのまま、走るのですっ！」

あたしはハッとして、追いかける形で再び走り出した。

しまった……つい止まっちゃったよ。

だってこんなに人がいるなんて、全然思わなかったし。

……たしかに、大きい城下町だとは思ってたんだけどね。

あたしは、一心不乱になって三人を追いかけた。

一瞬止まっただけでも、かなり間が広くなってしまった……はぐれないようにしなくては。

そう思って、少しペースを上げようとスピードを出しかけた時……
あたしは何かの気配を感知する。

……なんだろう？ その、“何か”がまったくわからない。

感覚的なものだから……説明も出来ないし。

でも、無理矢理たとえるならば……これは。

ドーム型の温いお風呂に、全身突っ込んだような……そんな、生暖かい感触。

それが身体に纏わりついていて、こう——走るあたしについてきているような。

……なんか……嫌な感じだ、見張られているような、ついてこられているような気がする。

いったいこれは、なに……？

「向こうだっ！ 追いかける！」

「え……！？」

わき道からいきなり現れた兵士達。

確信を持ったように現れたそいつらは、あたしを見るなり形相を変えた。

うつ、うそやん……！

なんでっ！？

しかも、あたしと三人の間に入るようにして現れやがったため、あたしは必然的に足を止めるしかない。

大ピンチどころか、絶体絶命だよ……！ どうすんの、あたし。

向こうを見やれば、すでに遠くへ走って行ってしまっている……三人の姿が。

き、気付いてねえし!!

「うおー！ 待つてよみんなあああああ！」

大声で呼んだのにも関わらず、三人はそのままはるか遠くへ……
最後には、人の群れで見えなくなってしまった。

なんで気付かないの？ あたし、あんなに大声で……何かおかしい。

あたしはオロオロと、あたりを見渡した。

包まれるような感覚はまだあるのに、目には見えない……どうい
うこと、なんだろう？ 今あたしに、何が起こってるの？ ……ど
うやって逃げろと。

「うつ……」

「姫様……いえ、赤石様……」

「うつつ……うつつ……」

そしてあたしは。

町のと真ん中で、大泣きした。

「ぶわあああああん！ やだやだー！ 置いてかないでええええ
えっ……！」

「あつ……赤石様！？」

「うつつ……うわあああつ！ わあああああん！ 近寄るな
馬鹿アアア！」

情けないどころか……馬鹿丸出しだ、これじゃあ。

あたしはいつたいいくつだよ！ ……十八ですけど。

「あ、赤石様……」

「うえええええん！ イッチー！ チョコー！ ヒスイさわあ
ああん！」

ひつく、えつくと涙をちよぎらせながら、なんとか堪え始め
るあたし。

と、とにかく……離れてもいいから逃げなくちゃ……！ これ以
上情けなくなる事はないんだから、なにやっても大丈夫……のハズ。

あたしは思い付きで、お腹を押さえた。

「わああああ！ 痛いつ！ 痛い痛い痛いつ！ お腹がつ！ お
腹が痛い痛い痛い！ 誰かトイレ貸してーっ！！」

「な！？ お、おいその者！ この方に手洗いを貸してやれ！
！」

えー!? まじで!?! ありがとー! …… なぁんて言いながら、
あたしはそそくさとその人の家に入り、トイレへ向かった。

…… 案外うまくいくもんだね、脱走の決まり文句だとは知っていたけれど、こんな状況でも使えるとは。

あたしはトイレに入った瞬間、すぐさま小窓から外を伺う。

…… よし、いない。

通り抜けるにしては小さいけど…… 通れないほどではない。

ここから逃げるべし!

一応と拾って懷にいれておいた真っ赤な布を取り出して、それを
顔にまく。

まあ、さらけだしとくよりはマシっだしね!

…… それより、どっちに向かえばいいのかな。

まあ、城の反対に進んで行けば大丈夫だね？　取り敢えず、今はここから離れなきゃ。

小窓に手を掛けて、頭から徐々に、潜り抜ける。

しかしハッとした。

……これ、頭から落ちちゃうよ。

「ぐえっ」

案の定、あたしは見事に頭から落ちたわけだが……ふらふらしてられない。

急げあたし！

「えっと……城の反対は……こっちか！」

大きい城だったので、すぐわかった。

その反対方向へ向かい、あたしは走り出す。

みんな……どこまで行ってしまったのだろうか？ もう、結界の外に出ちゃったかな。

あたしを置いてって、すでに逃げた……とか。

うつうつ！

泣いてる場合かあたし！

ただ……気になる事が一つ、さっきの大声で、なぜ三人が気付かなかったのか。

いくらなんでも、聞こえない距離ではなかったはずなのだ。

まさか……魔法、ってやつ？ どうやって魔法に掛かったかはともかく、へんな感覚はするのだし……あながち、間違いではないのかも。

だからと言って、それを解く方法があたしにあるわけじゃないんだけどね。

しかし————そんなことを考えながら、走っていたせいか。

あたしは角から現れた人影と、正面衝突してしまった。

——再び、頭を打ちつけるあたし。

……これ以上馬鹿になったらどうしよう？ いや、どうしようもないよマジで。

絶望的とか言われた日には、あたし廃人になる。

っと、そんなことより。

あたしはすぐさま立ち上がり、ぶつかってしまっただ倒れた人に手を差し延べた。

「じっ、ごめんなさい！」

「いや、こっちこそ。ウチも余所見してたもんで」

そう言って、あたしの手を借りながら立ち上がるその人。

同年ぐらい……かな？ 女の子だった。ポニーテールに
して、まるで日本人みたいな風貌をしている。

そして、その人の……姉妹だろうか。

ポニーテールの子によく似た女の子が、もう一人。

こっちはショートカットにしているようだ。

……って観察してる場合でなく！

あたしは急がなきゃと思い、手を放して叫びながら走り出した。

「本当にゴメンなさい！ それじゃあ急いでるんでこれで！」

「ほなコレ持つてきー！」

ヒュッ、と風を切る音とともに投げられたのは……小さな小ビン。

ポニーテールの子が、ニカッと笑いながら言う。

「ほんまゴメンな！ アンタも手え怪我してるで、それで治しい
！」

「えっ？ あっ……。ありがとー！」

ブンブンと手を振り、そのままあたしは走り去る。

……とっても良い人だ。

多分、またいつか会えそうな気がするの……気のせいじゃない。

この世界にいたら、気のせいが何でも現実になりそうだしね……。

あたしは苦笑いをしながら、聡明で強い姫様のことを考える。

まったく、あんたのせいで、こっちはてんでこ舞いだよ。

いつかちゃんと謝らせてやるんだから！

「——止まれ」

——と。

その時、突如聞こえた澄んだような男らしい声。

あたしは息を詰まらせて、石になったかのように……全身を強張らせた。

なんで……？ あたし、たしかに顔……隠してたはずのに。

なのに……どうして。

——ここに、あのダイヤがいるの？

「……な、なんっ」

「魔法とは、様々なものがある。攻撃的なもの然り、援助的なものも然り……」

そして、と。

美しく輝く、ダイヤモンドのような瞳で……あたしを見据えながら——言葉を続ける。

「追跡に適する魔法も、存在する」

「……それは……すごいですね……」

真面目に素直な感想だった。

「……顔を、隠しているのか」

「……」。似てるみたいですからね、お姫様に」

「……」

切なく歪められる、美しい瞳。

……そしてあたしは、また、それに感化されるわけで……。

やめて、と言いたくなる。

あの人のこと考えて、苦しむのを……あたしを通して見ないでって、何故だか……言いたかった。

——この感情の意味を、あたしはまだ知ることはいできない。

それはあたしがまだ子供で、未熟だったから。

でもそれはいつか、絶対にわかってしまう感情で……。

もしかしたら、すでにわかっていたのかな、なんて。

思ってしまう。

……でもいけない。

まだ、気付いちゃいけないのだ。

あたしはもやもやする気持ちを振り払いながら、なんとか逃げる策を考える。

絶対この人は、一筋縄にいかない。

……どうするべき、なのだろう？ あたしにいったい……何が出

来るのか。

「姫は、生きている」

「……みたいですネ」

「お前は知っているのか。あの人は……どこで、なにを、どうしているのか」

知るかっ！　もし知ってたら、真っ先に殴り混んでるつつの！

……一秒も掛からず、追い返されそうだけどね。

所詮あたしはギャンブラーで、向こうは大魔術師様ですし。

……やっぱり剣士になればよかったかも？

「姫の命令だ。繋がりを断ち切ってやる、と……その代わり、姫様の居場所を、教えろと」

「残念ながら、本当に知らない。あたし、ついさっきこの世界に

来たばっかだし」

「嘘を吐く必要はない。……殺さない、といっているのだ」

「……信用出来ません。とくに、あの人は」

嫌な感じのする、あの人。

二代目魔術師の……妹。

「姫は、少々疲れておられたただけだ。いつもは……」

「——みんな、“姫”って言うんですね。二代目魔術師様のことは、“姫様”って言うのに」

とくに意味はない。

ふと気になったのだ。

ただ……ダイヤ——さんは、不意を突かれたように驚いていた。

そしてすぐ、苦虫を潰したような顔になる。

自分で気付いていなかっただけ？ でも、みんながみんな、あの人のことを“姫”って呼んで、“姫様”とは呼ばなかった。

何故なんだろう？ わざとかな？ 変わらないと思うのに、みんな“様”だけはつけない。

何故か……あたしも気になってしまう。

そこになにか……思い入れがあるような気がして、理由を聞きたくなる。

あたしは、ダイヤさんが口を開くのを、しばらく待った。

——静かな路地裏、いるのはあたしとダイヤさんだけ。

「……“姫様”は……」

「？」

「生涯……俺の——いや、俺達の中で。ただ……一人だからだ」

チャキ、と——構えられる剣。

あの、剣は……。

——ズキリ。

痛むハズのないそこが、何故か痛くなる。

……姫様が、自ら腹を刺した、剣。

生々しいあの夢で、どれだけあたしは痛みもがいたのだろう。

それでも平然としていなければならなかったあの苦しみは……あたしと姫様しか、知らない。

「吐け」

「……！」

「でなければ……殺す」

は、吐けとは……嘔吐物、のことではないようだ。

うわあ、まじで知らないのに……どうしよう。

あたし、どうするべき？

かくなる上は。

また情けない場面だろうけど……あたしは、嘘を吐く。

“つく”と“はく”は違うけど……同じ漢字だし、頓知が聞いててなかなかいいでしょ。

……よおし！

「剣を下げる、ダイヤ」

「——！？」

「居場所が知りたかったのだろう？ 私は、ここにいる」

そう言って、ハラリ……と再び布を取り除いた。

お分かりの通り、これがあたしの思い付いた嘘だ。

……どうなるかなんて、知らない。

この場しのぎになると信じてる。

「私は、やらなければならない事がある。そこを退け」

「……」

「お前に、私は殺せない。そんな非常な真似が……お前に出来る

ものか。恩人である私は、な」

黙り込むダイヤさん。

……反応が伺えないだけ、不安は募る。

「ダイヤ、もう一度言う。そこを退——」

「姫様は」

「？」

ダイヤさんの声に遮られ、あたしは黙る。

「姫様は」

「……？」

「公衆の面前で大泣きしない」

「見てたのかよチクシヨオオオオオツ！」

ハズかしー！！

つーか、そんな時に現れとけよ馬鹿ヤロー！

「それに姫様は、もう少し痩せてらっしゃる。気品もありだれよりも神々しく、清廉としており毛艶も美しく歴代のどの王妃、姫より清楚だ。決して弱音も吐かなければくだらない嘘も吐かない。あの方を一目見れば惚れない人などおらず、立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花の如く……可憐で見目麗しい。かと思いきや戦地に立てば一風変わり、異国に伝わる戦乙女のような猛々しさと誰かが平伏してしまうような雄々しさを持ち合わせていて——」

「わ、わかった。もう充分だから！」

それ以上言ったら、あたし泣くぞ！？ 顔は一緒のくせして雲泥の差だくそつたれ、なんて遠回しに言わないで！

「……つまり」

「……」

「雲泥の差だ」

「ハッキリ言いやがったこのくそつたれ！」

イラつくーっ！

「吐く気はないようだな」

「吐きましたけどー。嘘を」

「姫様を侮辱した挙句その態度……！ 許せんッ」

「アンタが今仕えてるのは妹のほうでしょおおおっ！？」

なんなんだよ、ヒスイさんといいコイツといい！ 姫様馬鹿か！？

先ほどより殺気を出すダイヤさんに、あたしはビクビクしながら後退する。

それを追い詰めるかの如く、ダイヤさんは一歩ずつジリジリと近寄って来た。

うわわわ、余計なことするんじゃないよ。

ホント馬鹿、あたし馬鹿、誰かあたしをなじってくれ！！

「うっっ……うっ」

涙が滲む。

やっぱりあたしには、あの姫様のようにはなれなさそうだ。

「最後のチャンスだ」

「うえっ!？」

「言わなければ……お前を今、ここで、始末する事になる——
—それが」

姫の命令だ。

そう呟いたダイヤさんの言葉には、どこか……懇願するような雰
囲気が滲んでいた。

「……姫様は」

「?」

「もう一人のあたしは、間違ってなんかいない! そんなに好きな
ら、両目開いてしっかりみとけ馬鹿!」

……昔、誰かに言われた言葉がある。

恋人を選ぶ時は、しっかり両目を開いて見て——夫婦になった時は、片目を瞑ってやれ、と。

それが……恋愛から家族になるまでの、掟。

「……お前はチャンスを捨てた」

「っ、あ、あた、あたし丸腰ですけど！」

「問答無用——！」

ヒュンッ——空を切り、銀色のそれは……あたしを霞めて鮮やかな赤を、少し切り落とす。

あ、あぶね……！ だてに運動神経がいいわけじゃないな、あたし！

「バッチコイ！——んぎゃあっ」

「んなっ!？」

ちよつと浮かれたら、これだ。

運動神経がよくても残念なくらいドジだったとしたら……それは、
まったく意味のないことで。

盛大にコケたあたしは、ダイヤさんの振り下ろす剣を避け切れず

……

「……………あれっ？」

……脳天を、力チ割られる、はず……だったんだけど。

すんでのところで止めてくれたのか、ダイヤさんは溜め息を吐きながら、あたしに手を差し延べていた。

「まったく……本当に切るところだったぞ。何故そこでコケる？」

「は、は……」

「脅すつもりがこちらが別の意味で脅された……ほら、早く立てどこまで姫様と違うんだか」

「うつさいなあ！」

そう言って、差し出された右手に手を伸ばした。

しかし、それを掴んだ瞬間。

——ブリィッ！

「ぎゃっ！ー！」

「うつー！」

触れた瞬間、凄まじい痛みにあたし達は叫びをあげた。

静電気……？ いや、違う。

でも、電気が走るような痛みだったのは、確か。

まるで雷が落ちたみたいなの……いや、雷が落ちた経験なんてないけどさ。

でも、全身に広がるような……凄まじい痛み。

まじで死ぬかと思った。

あたし、どこか焦げてないかな？

あたしはあまりの痛さに、憤慨するような気持ちでダイヤさんになじった。

「ヒドいっ！ 今の、雷の魔法！？ そんなの使うなんてっ！
気絶させて運び込む算段ですね！？」

「ち、違う……俺は魔力があっても、魔法は使えん。魔法を習得しようとした事がない」

「……………え？」

じゃあ、なんで……と聞こうとして、顔を歪めながら右手を押さえるダイヤさんを不信に思い、その手をとった。

そして、驚愕する。

「ヒイイイツ！　ち、ち、血がッ！　たたたた大量にいいい！
？」

「うるさい。これくらいかすり傷だ」

「いやどう見でも切り傷っていうか、むしろ挟れてませんっ！？」

痛そうで見たらんないっ！　と、顔を背けるあたし。

でもそこで、ハタと気付く。

地面に落ちていた小ビン……そうだ、怪我にいいって、あのポニ―テールの子にもらったんだっけ。

……もしかしたら、使える？

「手！ 手を出して！ あ、いや、飲むのかな！？」

「は……？」

「これ、怪我にいいってもらったの。いいかは分かんないけど、怪我してるから持ってたけって」

「それは……」

差し出した小ビンを、ダイヤさんは目を見開いて、怪我をしてないほうの手で掴む。

そして数秒、マジマジと見たあと……確信を持ったように頷いた。

「やはりな……」

「え？」

「これは、地球国の――分かりやすく言うと、表の世界からこちらへ来た祖先の国の、珍しい薬だ。そう滅多に出回るものじゃない。……よし、王に献上してこよう」

「使えよ！」

バシンツと頭を叩いた。

馬鹿じゃないのコイツ！

「しかし……このような珍しい薬を……」

「それ、飲むの？ それとも塗るの？」

「深い怪我なら飲んだほうがいいな。浅い怪我なら塗るだけいいが」

「じゃあ飲め！ ハアイ、一揆！ 一揆！ イツキー！！」

小ビンを奪い取ったあたしは、キュポンツと蓋を外して、無理矢理ダイヤさんの口に突っ込んだ。

「ごほおっ！」とか聞こえたけど、気にしない。

しかし飲ませたあとで、あたしは思い出す。

「しまった！……あたし怪我してたから貰ったんじゃん」

「ゴホゴホッ………なんだ？ 怪我してたのか」

頷きながら、あたしは右手を差し出した。

あたしの血と、ダイヤさんの血が混ざっちゃっているけど……やは
りそこには、痛々しいかすり傷が。

不意に、あたしの手を取るダイヤさん。

そして……—

「んなっ!？」

その、血やら土やらでグチャグチャになったそこを……ダイヤさんは、ペロリと舐めた。

一気に頬が紅潮する。

「ほら、見る。治っていくだろう? かすり傷なら、本当に微量でいいんだ……………どうした?」

「ばっ、おっ、てっ、なっ!」

馬鹿お前手を舐めた! って、言いたかったんだけども。

まったく言葉になっていなかった。

それを見て怪訝そうにするダイヤさん。

気付いてないのか、それとも狙ったのか、もしや気にしてないのか……どれだこのアホんだら！

「なんなんだ、変な奴だな」

「な、舐めっ……舐めた……」

「ああ、それは口内にまだ残ってるんだ。言っただろう？ かすり傷なら微量で……」

一瞬固まった後。

やっと理解したのか、ダイヤさんはあたしからガハアツと離れ、言った。

「おっ、どっ、なっ、なめっ……！？」

……俺は、どうして、なんで、舐めちゃったのか……かな。

いやいや、そんな推理はどうでもよくて。

まあ傷はたしかに塞がったんだし、問題解決。

「……」

「……」

両者、赤面。

あたしも相当馬鹿だけど、ダイヤさんも大概馬鹿だよね……？
完全にこれは、ダイヤさんの馬鹿のせいだけ。

……どう、しよう。

元々あたし達は、追う方と追われる方なわけで。

赤面し合ってる場合じゃないんだけど……ね。

「オッホン。あー、ダイヤさん？」

「！……あー、だ、ダイヤでいい」

「……」

そんな恋の始まり的なノリやめれー！！

「あー……はい、ダイヤ？」

「……なんだ」

赤面のまま、しかも元から綺麗な瞳を潤ませ、上目遣いをされて……
あたしは鼻血を吹き出しそうになる。

ユー！ もう女になっちゃいなよ！ 可愛すぎるわ！！

「ぐっ……あの、不本意ながら、話を、あたしが、戻させていただきますけど」

「……済まなかったと思ってる……姫様に似ていても性格が雲泥の差で、いくらスボラで性格が真逆と言えど……一応婦女子の手を舐めるなど……！」

「オイ待て。腹立つ前置きをさっさと削除しろ。しかも一応ってどういう意味だコラ！！」

どこまでもムカつくな！ この分じゃ、ワザとじゃなくて素か？
なんて恐ろしい性格だ……。

というか、あたしが戻したい話はそう言う事でなく。

「そうじゃなくて、あたしらさ、一応敵同士なんだよね？」

「……！」

今思い出しました！　ってな顔したね……それで剣士が務まるのか？

「えーと。一つ提案です」

「……な、なんだ」

「まあ、一応？　あたしも婦女子なわけですけど。そんな恥ずかしくてお嫁に行けなくなるような事を、されちゃったわけですが」

「手を舐めただけだろう」

「もし姫様に会えたらチクる」

「本当に申し訳なかった」

敵に土下座をされた。

「とにかくさあ、おとしまえ、つけてもらわなくちゃ」

「お、おとしまえ……?」

「責任を取れ、ってことね。表の言葉で“おとしまえ”」

ニツコリ。

あたしは輝くような笑みを浮かべながら、その提案を言った。
た。

「見逃してくんない? てか、見逃せ」

キラッ。

なんて効果音と、ポーズ付きで。

有無を言わせないオーラを纏った。

「……くっ！」

勝ったぜ……！

あたしは内心ガッツポーズをして、喜びを噛みしめた。

「んじゃあそう言う事だから！ サヨナラア！」

「！ 待て！」

ピタッと止まる。

まさか……責任逃れをするつもりじゃあるまいな？

しばらく、ダイヤを見ながら訝っていると……迷うように視線を彷徨わせながら、唐突に口を開いた。

「姫様に……もし、会えたなら」

「……！」

「何故俺だけには……なにも言ってくれなかったのか、聞いてくれないか」

そう呟くダイヤには、深い悲しみが渦巻いていた。

……何故、貴女に近かったはずなのに。

ダイヤは今もなお、その理由で苦しんでいる。

……あたしは頷いた。

なんだか、あたしまで切なくなつて……言い様のない気持ちにはなつたけれど。

頷くあたしを見たダイヤが、心なしか笑顔になつたように見えて……そんな気持ちは露へと消えた。

「じゃーねー！ 舐めたの言っとくから！」

「そっちじゃない！！」

アハハハ、と笑いながら。

あたしは再び走り出した……このまま走って、早く三人の元に行かなくちゃ。

何処にいるかはわかんないけど、行くしかないでしょ。

あたしは再び布を顔に巻き付ける。

どれだけ顔が姫様に似てようが、あたしはあたし——赤石カエンなんだ。

大丈夫——姫様みたいに強い力はないけど、ズル賢さは天下一なんだから！

さあ、みんなを探しに行かなくちゃ！！

第一話？

——入り組んだ道をひたすら走りながら、私はキョロキョロ見渡す。

先ほども、数人の兵士に見つかり追い掛けられていたので……油断出来ないです。

「うう……櫟くん、カエンちゃん……何処ですか……」

最初、カエンちゃんが居ないのに気付いたのは……櫟くんです。

どうもおかしいのです。

よく喋るカエンちゃんが黙って走るなんて、あり得ないのに……

私達は気付かなかった。

何故でしょう？ それに、この、私を包む魔力……って言うんでしょうか。

とても、嫌な感じがします。

まさか、見張られているのでしょうか？ そんな気がしてなりません……。

そして、カエンちゃんが居ないと気付いた数分後です。

今度は、私まではぐれてしまって……心細さで潰れてしまいそうですよ。

カエンちゃんは、運がいいのできつと大丈夫だとは思いますが。

櫛くんは足も早いし、何よりヒスイさんがいる。

……問題は……足も遅くて不幸の代表である、私。

とにかく私は不幸なのです。

いえ、私だけにその不幸がふりかかるならまだしも、私の場合は周りにまで迷惑をかけてしまう。

だから、私は本当に傍迷惑な不幸女なのです。

……でも、そんな私を櫟くんはずっと側に居てくれて。

そんな私達を、カエンちゃんが助け出してくれたのです。

カエンちゃんと一緒にいる時、不思議なことに……何にも起こらないんです。

たとえば、私がマイナスだとして……それを上回るプラスで、カエンちゃんは私を包んでるんじゃないかなあ、と。

私は、そう思っています。

そんな、私達をプラスで包んでくれる、カエンちゃん。

事情はわかりませんが、なにか大変な事に巻き込まれている……
そんな気がします。

それならば、私は一緒に巻き込まれます、絶対に。

カエンちゃんの笑顔が見れるのならば、私も櫟くんも、苦勞を惜
しみません。

……………でも。

まずはこの状況を、打開しなくてはダメですね……はあ。

「きゃっ！」

いきなり現れた人影に、私は身を竦める。

どうしよう……！ 足を止めてしまいました！ でも……二人よ

りは遅い私ですが、身体が小さい分、すばしっこさは二人に勝ると思います。

それを糧に、なんとか……！

「チヨコ！」

「え……あ……！ 櫛くんっ！？」

現れたその人影に、私は笑顔を向ける。

間違いなく、櫛くんです！ ……でも、ヒスイさんはどうしたのでしょうか？

「い、櫛くん……ヒスイさんはどうしたのですか？」

「ああ、大丈夫。ヒスイなら物陰に隠れて待ってるよ」

「……？ そう、です……か……」

どこか、違和感を覚えます。

何故でしょう……？ たしかに、櫟くんのはずなんですけれど。

でも……、うーん？ なんだかモヤモヤします。

「それより……」

「はい？」

「……」

呼び掛ける声に、私は首を傾げて見上げます。

私と櫟くんは、身長差が二十センチ……いえ、多分三十センチ以上あるので、本当に首が痛くなります。

私を見つめたまま、なかなか答えない櫟くん。

本当にどうしちゃったのでしょうか？ 私は不安になって、声を掛けようと、口を開きかけました。

が、その時……私を遮る形で、櫟くんは呟きました。

「可愛らしさがパールの十割増し……」

「はい？」

「あ、いや、こつちの話」

そう言つて、櫟くんは「はいコレ」と、なにかを差し出しました。

杖と……本？

「えっ？ なんですか？ これ」

「魔法使いの必須アイテム、それを使って二人を探しな」

……二人？ 誰の事ですか？ と聞こうとしたら、不意にポンッと、頭に置かれるました。

……そしてそれは、するすると頬に下がり………やわやわと頬を撫でながら、櫛くんは私に囁きます。

「可愛いね。どお？ 俺と一緒に逃走劇広げない？ 二人きりのね」

「………はいい！？」

や、槍が降る………！？

櫛くんがそんな二枚目気取りな言葉を使っなんて、有り得ません！！

驚愕している私をよそに、櫛くんは……私の耳に唇を寄せて、尚言います。

「ヴィカの命令がなかったら、いただきますしたいところだけど……」

「イ、イタダキマス？」

「……ま、しょうがないね。いずれまた、ってことで」

何の事なんですか？ と、ビクビクしながらも聞きたい私。

でも聞けないです……櫟くんの変異ぶりに、恐れを成して。

櫟くんはそんな私を微笑ましげに見つめ、そして……ちゅつ、と。

頬でなく耳に、キスを落としました。

「きゃああああっ！」

「ふ。かーわいー。……じゃ、そろそろ行かなきゃ」

じゃあね、チヨコちゃん——そう言うて。

櫟くんは、一瞬で消え去りました。

もらった杖と本を抱きながら、しばらく呆然とする私。

違う……絶対違う……あれば櫟くんじゃありません……だって櫟くんは、私を“チヨコ”と呼ばないし……それに——

「あんなに変態さんじゃありません！」

じゃあ、誰！？ その答えがわかるのは、本物の櫟くんとヒスイさんに会えた時なのです。

——何故こうも、俺達は不味い事ばかり起きるのだろうか。

内心溜め息を吐きながら、先ほどから鬱になっているヒスイさんを慰めつつ、そう思った。

「私がついていながら……姫様に申し開きが出来ないです……」

……あ。

なんか、絵文字でこんな落ち込み方を見た事があるような気がする。

しかし笑うわけにはいけないので、俺は奥歯を噛みながら笑いを堪えた。

——路地裏の隅、俺とヒスイさんは、二人ぼっちで今の状況を嘆いていた。

気付いたのは今さっきで、本当に落ち込む。

最初、カエンがない事に気付いたのは、俺だった。

あの足の早いカエンが……俺達についてこれなかったのは、どう考えてもおかしい。

加えてあの性格だ。

置いていかれそうになったら、絶対大声で泣くハズ……それこそ、有り得ない状況が続いている。

何故ならあいつの砲声は、拡声器でも使っているのかと思えるくらい……凄まじい声量なのだから。

あいつが悪夢を見て、目覚める時。

それはそれは頭が痛くなるほど、お決まりの言葉を吐いている。

その声量といたら、手で耳を塞いだけじゃ間に合わないくらいに。

耳栓つけてヘッドフォンもつけて、半径五メートルは離れていないと……絶対に鼓膜を破かれる。

あれを生で食らった時、気絶しかけたくらいだ。

……そのお陰で、クラスの大半は、耳が強くなったんじゃないだろうか。

とにかく、だからこそ、有り得ないのだ。

あいつの叫び声が聞こえないなんて、信じられない。

そこでふと、俺は思い至る。

ここは魔法の溢れるファンタジーな世界だ……なにか、魔法に掛かっているのではないか、また何かが作用しているのではないかと。

その疑問をヒスイさんに投げ掛けたところ、「そうか!」と言って、不意に右手を何処かに彷徨わせる。

……なにをしてるんだ？

「……………」

「——やっぱり。どうやらお二人は、追跡と、姿眩ましの魔法に掛かっていたようですね……しかも、別々の人間に。追跡を掛けられたあと、誰かに姿眩ましを掛けられたのか……？」

ヒスイさんいわく。

追跡とは、その名の通り居場所を察知するための魔法で……後から掛けられたという姿眩ましとは、注意していなければ姿を見逃してしまう、そんな魔法らしい。

身体が完全に消える訳ではなく、認識されない、ということ。

俺達が意識して宙に舞う埃を見なければ、存在に気付かないのと同じ……なんだとか。

だから、追跡をかけた本人やその知らせを受け取った人物だけ、それが効かないのだそう。

……厄介な魔法もあつたもんだ、まったく。

「……ん、でも、何故俺達には掛かってないんだ？」

「簡単なことです。私がいましたからね」

私になんか掛けたら、すぐバレますから——と。

ヒスイさんは自信満々に言ったあと、またガツクリと肩を落としました。

「なんですすぐ気付かなかったんでしょう……ああ、やはり私は姫様のような素晴らしい魔術師にはなれない……なんて尊いお方だ……」

まあ、魔術師は最初からなれないと思うけど。

しかしそれを言ったら、本気で落ち込みそうだったので、やめた。

……今は無理矢理にでも持ち上げて、二人を探しに行かなくては。

俺は立ち上がる。

「ヒスイさんは右足を痛めてるんで、ここで待っててください。
俺は二人を探して、ここまで連れて来ます」

「！……しかし、何があるかわかりません。私も魔法を使って
ついていきます」

「大丈夫です。……俺、走るの誰にも負けない自信があるんで」

何度も撒いた事があるからな、これで。

そのたんびに、カエンに殺され掛けたが。

「それじゃあ、すぐ戻って来ますから――」

「っあー！ いたいた、やっと見つけたー」

……え？

俺は目をキョトンとさせた。

口調は力エンだった、でも、その声色は……。

「イッチー、こんなとこにいたのー？」

……軽やかに歩いてこちらへ近付く、千世子、のような人間。

誰だ、こいつ。

いや、見た目は千世子だが……明らかに何か違う。

何故なら千世子は、俺を“櫟くん”と呼ぶし、そんな碎けた話し方はしない。

それにもっと可愛いし、小動物系の愛らしさがある。

何処のどいつだ、この千世子に激似な女は。

……待てよ？　もしかしたら、こいつが――

「どうしてはぐれたんだ。……パール」

「いやあ、それが道に迷っ………あ、しまった」

簡単にボ口を出した。

やっぱりな……あの死刑執行されそうになった時を、俺は思い出す。

……あのじいさんが、確かに言っていたのだ。

俺の事を、サファイロスと。
千世子の事を、パールと。

それが多分、この世界の俺達の……名前。

ならばこいつは、間違いなくもう一人の……千世子なわけか。

……本当に瓜二つだ。

「パール……？ お前、パールなのか？」

ヒスイさんが問う。

「久しぶりね、ヒスイ。……っと、実は仲良く昔話はしてらんないのよ」

「待て、一つ聞かせる。お前その黒髪どうした？ 瞳の色も違う。……お前、どちらも真珠色だったろう？ それに……その服」

俺はその言葉に、首を傾げる。

目の前にいる千世子もときは、性格は違えど、確かに見た目そっくりだった。

服も含め、だ。

髪型から色、靴も同じ。

……たしか、服は……ヴィカにもらったはずなのに、何故知ってる？

「だあかあらあ、話してる時間がないのよ！　ちよつとアンタ」

「……なに」

「コレ。使いなさいな。それを渡すためにここにいるの」

その、差し出された物を……俺は片手で受け取った。

ズッシリと重たいが、手になじむような……不思議な剣、だ。

不思議そうに剣を眺める俺の横で、ヒスイさんは驚愕した。

「お前コレ……！」

「そ。んで、アタシらは、それをアンタらに渡すために命懸けで盗んで、渡しに来たの。……ヴィカに頼まれてね」

だから変装したんだけど、意味なかったわねえ。

千世子もどき……ややこしいな、パールと呼ぶが、パールは——
そう呟いてから、溜め息を吐いた。

そしてそのまま、視線を俺にやる。

眉根を寄せ、「なんだよ？」と表情だけで問う。

背格好は全く一緒だな……千世子同様、はるかに小さいパールを見ながら、俺は黙って見ていた。

……パールはクスリと、妖艶に笑う。

全然ドキリとしないのは、何故だろう。

だけど、千世子がやったと頭で想像すると………おお、なかなか……。

じゃなくて。

「アンタ、本当にあいつの片割れ？ 随分と落ち着いてるねえ……
あんな奴より充分いい男だ」

「……それはどうも」

「ハハッ！ あいつもこのくらい落ちついてりゃ、モテるのに」

そう言い残して、身を翻すパール。

背を向けながら、手を振って歩き出す。

「じゃーね。確かに渡したから。しばらくはアタシも御役御免よ」

「ちょ……！ 待てパール！ ヴイカに頼まれたって……」

「ヒスイ、あんたはあんたで役割あんでしょ？ アタシらは、これ以上なにも聞いてないわ。あとは自由に生きるだけ。そーゆーことだから」

ヒラヒラと手を振って、「じゃ」と、その場からさる千世子の片割れ……パール。

……なんか、本当にカエンに似ている。

あくまで、喋り方や仕草だけなんだけれど……見た目だけは、たしかに千世子に瓜二つだ。

……うん、カエンとは気が合うのかもしれない。

ただやはり、カエンのほうと一緒にいて気が楽だ。

あの女は……なんか無理。

「役割……あいつらがヴィカの言う事を守るなんて……信じられない」

「あの……それより、この剣なんですけど」

素人でもわかる、その見事な細工。

少し細めな剣だが、だからといって軽いわけでもなく、しっかりとした重さと馴染むような手触りをしていた。

柄の方で六つに光る、様々な石……不思議な輝きを放つそれを見つめて、俺は眉間に皺を寄せるしかない。

……こんな明らかに高そうな物、怖すぎて使えない……。

一体全体、なんなのだろうか？ この不思議な剣は。

俺は少し戸惑いながらも、その剣をヒスイさんに差し出して、聞いた。

「これ、なんなんですか？ …… かなり高そうですけど」

「…… 貴方方が、捕まるはめになった原因…… ですかね」

俺は、「はあん」と呟きを零し、納得した。

捕まる原因といえば、たしか国宝を盗んだとかで……。

……ん？

国……宝？

「え……… 国宝、なんですか。 …… コレ」

「はい。初代魔術師…… ええと、貴方様にはまだご説明してませんでしたっけ……」

「あ、ヴィカに聞いてます。裏と表の繋がりを断ち切った人……ですよね」

「そうです。その方が自ら作り上げ、使っていたという剣です。二代目魔術師の姫様も、使っておりました。姫様が……少し、手を加えられておりましたが……普通の剣と変わらないと思いますよ」

……普通の剣と言われても。

誰が好き好んで、国宝なんぞを振り回す馬鹿がいる。

……。

いや、でも、カエンになら出来そうだ。

しかし、本当に使っているのか……？ 国宝、むしろ世界の宝とまで言われているらしいものを、使ってしまうなんて。

というか、バレたらどうなるのだろうか。

疑問に思い、「バレたらどうなるんですか？」と、なんとなく質

問してみる。

その問いにヒスイさんは笑顔で言った。

「死刑ものだと思いますよ、ハハハ」

……ハハハじゃ……ないだろ……。

「あ、でも、バレないと思いますよ。それは、見る人によって形や色、装飾が変わるんです。……知っている人でないと、これが国宝だなんてわかりません。青蓮寺様は、どんな風に写っておられますか？」

そう聞かれて、俺は素直にその見た目を説明した。

それを聞いたヒスイさんは、途端に笑顔になり、頷く。

「さすが。赤石様のご友人です」

「……？」

「その剣は、一本で六本の剣なのです。先ほども言いましたが、見る人によって、それぞれ形が違います。私には、竜の絵が刀身に描かれた日本刀に見えます。その場合、名は“飛竜”となります」

……ひりゅう？

ヒスイさんの説明によれば、この剣はその人の属性に合った剣に見えるらしい。

ヒスイさんの属性は風だから、“風”を司る“飛竜”。

俺の属性は、どうやら“光”……らしい。

その場合名前は“夢幻”、なんだと。

ややこしい剣だ。

一つずつ、名前が違うのにも洒落を感じる。

存在する属性は、火、水、風、土、光、闇で、名前は上から順に

……

炎魔——えんま。

水魔——すいま。

飛竜——ひりゅう。

華石——かせき。

夢幻——むげん。

夢煙——むえん。

……洒落と言うか、一つ、駄洒落が入ってる気がする……いや、
気のせいだとは思いたいが。

とにかくそんな感じで、このすべての形を知らなければ、こいつ
が国宝だとは気付かれない。

ヒスイさんはそう言って、続ける。

「そして……そのすべてを知る者は、今この世界に三人しかおり
ません」

「三人？」

「はい。私と、金ぱ……ダイヤと、姫様。この三人きりです」

三人きり。

断言するヒスイさん。

というか、何故一つにする必要があるんだろうか……？ その疑問を聞くべきか悩んでいたら、いち早く気付いたヒスイさんが、なんて事なく説明する。

「昔はちゃんとそれぞれ存在しておりました。それを纏めたのが、姫様なのです」

「ルビィ・ブレード……なんとかって人か」

ヒスイさんはコクリと頷く。

「手を加えたというのが、それなのです。元々高価な品で狙われ易く、その割りには邪な心を持つ者は触れられず——むしろ形すら見る事も叶わず——扱える人も早々いなかった物です。だから……ほとんど埃に被っていたそれに、姫様は目をつけられました。そのおかげで私も過去、それに随分と助けられましたよ」

そんな……御大層なものを、あの泥棒は盗み、俺なんかに渡したのか……。

それより、よく盗めたな……触れられないんじゃないのか？
ヴィカがなにか手を回したのだろうか？ いや……むしろそれは、
姫様、とやらの方か。

二代目魔術師……ルビィ・ブレード、なんとか。

いったいそいつは、何を考えているのだろうか？ 変な事にならなければいいが。

……すでに充分なってるけれど。

「ヴィカは姫様からすべてを聞いています。それを実行している……ヴィカが言うのなら、大丈夫でしょう」

俺は再び、剣をじっくり見た。

鞘から少しだけ抜いたら、刀身が不気味なくらい光輝いており、その美しさをより際立たせていた。

ヒスイさんも、こいつに助けられたと言った。

ならば、俺も……助けてくれるのか？ いや、俺じゃなくても、せめてあの二人だけでも助けられるならば。

そんな思いを浮かべ、俺は……剣全体をマジマジと見る。

……錯覚、か？ まかせるとばかりに、光がいつそう強くなった気がした。

「夢幻、ね」

「……夢幻は、その名のとおり、夢と幻を魅せる剣です。しかし、光の属性を持つ青蓮寺様が……その夢幻さえ信じていれば、すべてを導く“光”が——絶対助けてくれるでしょう」

……光。俺が？

むしろ、俺にとっての光は……カエンだ。

よくあるたとえ。

あいつ……カエンが太陽ならば、俺達二人は……太陽に支えられて輝く、月のようなもの。

太陽無しでは、俺達は存在しない……そんな感じ。

……でも、そんな俺にも、“光”があるならば。

俺は、カエンを、千世子を、明るく照らし……導いてやりたい。

それに俺は、三人の中で……唯一の男だからな。

あいつらを守ってやらないと。

信じよう。

自分を、そして……夢幻を。

「俺に、何が出来るかわかりません」

「……」

「でも、二人を守りたい。とくに……カエンは今、なにか思い詰めてるから——支えてやらないと」

こいつがあれば、それも出来そうな気がする。

……やってやろう、俺は、二人を絶対守ってやるんだ。

ヒスイさんは、決意の固まる俺を見て、朗らかに笑った。

「その意気です。……貴方方三人に、幸福があらん事を」

俺は微笑む。

さあ、まずは二人を探さないとな……本人達がいなくちゃ、守りようがないし。

俺は、夢幻を握り締めた。

きっと、大丈夫。

支えてみせるさ…… たったの二人なんだから。

—— そんな決意に満ち溢れた俺の元に、兵士に追い掛けられた慌てた様子の千世子がやって来るのは…… すぐの事だった。

——ずべしゃっ。

「……痛い……」

ふえ、と泣きそうになって、それどころじゃないんだからと勇気を奮い立たせた。

かれこれ、何分経った……？ いや、何時間かもしれない。

あたしは痛む膝を撫でながら、再び迫り来る恐怖から逃げるようにして走り出した。

……後方には、何人もの兵士。

騎士団と呼ばれる、身なりのよい方達もそれに混じっている。

ダイヤと別れたあたしは、この連中に早々に見つかり、この有様となっていた。

たしかに、あたしはダイヤに、「見逃せ」と言った。

ダイヤだけに。

……そこが誤算だったのだ。

てつきり、もう兵士達は追い掛けてこないと思ったあたしは……
油断MAXで、大通りを小走りしていた。

その途中、こうして追い掛けられるようなハメになったわけだが。

……あーあ。

あたし馬鹿、ホント馬鹿……なじるだけじゃ足りない、誰かあたしを踏み付けて！

あ、でも、ヒール限定で。

……う、嘘だよ？

「わっ！　また増えた！」

そんな冗談を浮かべつつも走っていたあたし。

さっきから……ドンドン敵が増えていた。

……あたしはハーメルンの笛吹きか。

いや、ハーメールン？ 違う、ハーメールン？ ハンメールだったっけ？

……。

えーいつ！ どっちでもいいわっ！！

「ひえええっ！」

本当に増えていく一方なので、もう見るのが怖くなっていた。

追跡の魔法だったか？ 多分、そいつのせいなのだと思う。

撒いても撒いてもすぐに見つかっては、何故か増えているという繰り返し……地獄だ。

あたしの世界に、そんな魔法がなくて心底よかったと思う。

だってもしあつたら、あたしら三人、逃げてても逃げてても村上先生に追われる事になりそうだもん。

まじ怖いよ、村上先生。

鬼神だの閻魔だの、末恐ろしいあだ名がてんこ盛りな人だからね。

あ、ちなみにあたしが考えたあだ名は、ゴジラ。

あいつの足音ってデカくて、それであたしらはいつも事前察知していたからね。

しかも図体のわりに俊敏だから、足音半端ないんだよこれが。

って。

そんな話はどうでもよくて……。

今は、この状況をなんとかしなきゃ。

「大人しくしてください！ 赤石様っ！」

「いーやーでーすー！」

「いつまで逃げるおつもりですかっ！」

「貴方達が諦めるまでー！」

「姫様はここまで我が儘ではありませんでしたよっ！？」

「しーらなあーい！ あたしお姫様じゃないしいーっ」

「なんて我が儘な……！ これが姫様の片割れとは到底思えんっ
！」

「ケツ！」

そんなこと充分わかったっての！

すいませんね、真逆の人種が姫様の片割れなんかで！

「うう……疲れてきた……！」

もうずっと走りっ放し。

休憩のない長期マラソンは、さすがにあたしには無理だよ……短距離走なら自信あるんだけど。

でも、捕まるわけにはいかないし……ああ、まじで泣きそう。

泣いてるけど。

「イチー達はどこまで行っちゃったのかな……本当に待っててくれてるのかな……うつつ」

疲れが増してくればくるほど、ネガティブな考えがあたしを襲った。

二人はよく、あたしのことをポジティブだと言っけど……そんなことはない。

なんたって自信がないし、泣き虫で馬鹿、オマケに弱い。

どこを見てあたしをポジティブに思っただか。

一度問い詰めてやらないと。

……無事に出会えたら、だけど。

「いや、でも案外ポジティブっていうのも間違いじゃないのかな
……いつも何とかなると思ってるし……いやでも……」

「あー、もしもし？ 聞いてる？ ちょっと……」

「うーん……むしろポジティブって、チョコみたいなのを言うん
じゃないかなあ……あ、でもイチーのほうがもっと……」

「……。ちよつと！ 聞きなさいよ！」

「え……？ ——うわあああつー！」

ふと聞こえた声。

ダッシュをしていた足が止まりそうになるのを堪えて、あたしは
その人をみた。

……真珠の瞳に、真珠の髪、服は何故かあたしと同じものを着ているその少女。

間違い、ない。

「ちょ……チョコオオオオッ!? どうしたのそれっ! イメチェン!?」

「……アンタ馬鹿?」

「うわあああつ! チョコが暴言を!!」

「アタシはパールよ! そのチョコとかいう女の片割れ! ……まったく、御役御免だと思ってたのに、未だあの二人に合流してないんだもの。どんだけ馬鹿なのよ」

……パール? ああ、たしかにそれっぽい名前。

ていうかチョコの片割れ? 助けに来てくれたって事なのかな。

こんなに暴言を吐く子なんだなあ、チョコの片割れって。

でもたしかに、見た目そっくりだ。

「いい？ アタシがしばらく時間を稼ぐわ。その間に、あそこの突き当たりを右に行きなさい」

「み、右に？」

「そう。そこにサファイロス——イッチーとかいう男の片割れがいるわ。そいつについていきなさい」

「ガ、ガッテム」

なんかよくわからないが、言う事聞いておこう。

悪い人には見えないし。

……いや、泥棒だから悪い人か？ まあ助けってくれるんだから問題なし！

言うとおりにしよう。

「いいわね？ 迷わず走るの」

「アイアイサー！」

「……？ アイアイサーの意味がわからないけど、大丈夫ってことね」

チヨコ……じゃなくてパールさんは、そう言っや否や急停止した。

そして、大声であたしに叫ぶ。

「無事にオフガイアを出たら、バルバトスの里に行きなさい！
場所はヒスイに聞けばわかるわ！」

「えっ？ バル、バルバトス？」

「さあ走ってー！」

止まりかけるあたしを叱咤するように、パールさんはそう言った。
バルバトスの里……？　そこへ行って、どうしろと言っのだろう
か。

あたしは考えるのを止める。

今は、逃げる事だけを考えよう。

逃げれたあと、それは考えればいい。

あたしは言われたとおりに、突き当たりを右に行った。

そこで、あたしは見慣れた顔を見る。

「あ！　イッチー！」

「ざーんねん。俺はサファイロス。イッチーとかいう子の片割れ
さ」

あたしに合わせて走るその人——サファイロスは、笑顔で言った。

うおおお！　笑顔！　笑顔だよ！

しかも満面の笑み！

……イッチーじゃないみたいだ。

いや、実際イッチーじゃないんだけど。

やはりこの人も服装があたし達と同じだったが、髪の色や瞳の色は全然違った。

サファイロスさんの髪は薄い青色で、瞳は浅い海のような、綺麗な宝石を思わせる、サファイアだった。

でも、顔や背丈はまったく一緒。

サファイロスさんは走りながら、あたしをマジマジと観察する。

時々、道案内として「こっちだよ」とは言ってくれるが……その、
なんというか。

止めてくれませんかね、舐めるような目で見るのは。

イッチーにそっくりだから、なんかゾクゾクする。

……恐怖で。

「ふーん」

「な、なん……？」

「いや、たしかにソックリだなあと思ってね。……ルビィに」

「えっ？」

親しげに呼ばれた、その名。

夢でも、ここに来てからも、散々聞かされた名だ。

「髪の色、瞳も黒だったから、本当によく似てる。あ、でも君の方がちょっと……」

「太ってるって言いたいんでしょ、わかります」

ダイヤに言われたからね。

「ハハハ！ 性格も君のが好み。ルビィは少しお堅いところがあったからね」

「友達……なんですか？」

「友達？ うーん、どうだろう……。あつ、次はそこを左ね」

あたしは言われた通りに曲がる。

そして少し唸ったあと、サファイロスさんは先ほどの質問に答えた。

「友達……は友達なんだけど」

「？」

「なんていうのかなあ……友達にしては、あまりにも格が違いすぎてね。気安く友達なんて、恐れ多いっていうか」

「？……よく分かんない。友達なのに恐れ多いんですか？」

あたしは疑問に思いながら、自分の意見を言った。

「その人の事を大切に思うなら、その時点で友達だと思いますけど」

「……」

「きっと、姫様も友達だと思ってるんじゃないですか？……もし友達じゃないなんて思われたら、あたしは傷つくかも」

それに、あたしとイチー、そしてチョコが友達なんだもん。

あたしらの片割れが友達じゃないなんて、おかしいでしょ。

……ただの勘だけど。

そんなあたしに、サファイロスさんは苦笑した。

「そうだね」と言っ

「うん、友達。ルビイは俺達の、かけがえのないね。ありがとう」

「……？ どう致しまして……」

なんでお礼を言われたんだろう？ まあ、悪い気はしないから、いいんだけど。

「さ。……この道をまっすぐ言ったら、大きなドラム缶がある。そこを右に曲がるんだ。その辺りを走れば、遭遇するはずだよ」

「え？ あっ、ありがとう！」

お礼を言うあたしに、サファイロスさんは笑顔で言う。

「どう致しまして」

——そして、立ち止まるサファイロスさん。

でもあたしは、振り返らなかった。

だって……あたしの友達は、向こうにいるんだから。

あたしは、あたしの友達がいる場所へ。

ただ、それだけだ。

「くっ、イッチー！ チョコー！」

右へ曲がって、あたしは渾身の一撃とばかり大声で叫んだ。

この町は、一人で走るには……あまりにもデカすぎるよ。

だから。

「カエンちゃんっ！」

「カエン！！」

……あたしは、二人と走る。

「よかったですっ！ カエンちゃん！」

「二人とも無事？ あれ、ヒスイさんは？」

「今ヒスイさんは、この辺りに結界を貼ってるんだ。とりあえず追跡の魔法とやらに掛かっているらしいから、それを解こう。千世子」

「はいですっ！」

おっ？

あたしはチョコの手にするものを見つめて、目を輝かせた。

杖と本だ！　どこで手に入れたんだろう？　イチーは剣を持ってるし。

……あたしだけ、戦利品はなし、と。

「カエンちゃん、ジツとしててくださいね」

「喋るなよ」

「キヨロキヨロですよ」

「息はしていい」

「ただ静かにですよ」

「わかったっての！　あたしは三歳児か！！」

ああ、やっぱりこれだなあ。

この感じだよ、やっぱ。

「行きますよ——！」

そう合図すると同時に、チヨコは魔方陣を描き、呪文を唱える。

「汝を包みし管理の瞳よ、自由の身となり束縛を解き放て——」

カンッ——と、魔方陣を叩く音。

……地面を叩いてるはずなのに、それは、ガラスのような割れ物を叩く音だった。

そして、どこから聞こえた澄んだガラスの、しゃりん……といふような音のあと。

あたしを包んでいた何かは、煙になって消えるようにして、跡形もなく無くなった。

……成功？　　ってやつかな。

「これで大丈夫だと思います！」

「ホント？　　すっごいねえ！　　わっ、魔方陣が消えてるよっ！　　ていうか本物の魔法使いみたいー……あ、本物の魔法使いか」

「……やっぱり、これぐらい騒ぐのがないとな」

「え？　　……どゆこと？」

首を傾げた。

イチーとチヨコは、苦笑する。

な、なんですか？

「別に。気にするな」

「無事だったんですからね！」

「？ うん、そうだね」

あたしは笑った。

そして、二人も笑う。

あらためて感じる事だけれど、あたしには、やっぱりここしかないんだなあ……って感じる。

この二人がいる場所こそ、あたしの帰る場所。

それを失わないためにも、精一杯頑張らなくちゃね！

へへ、と笑いながら。

あたしはこの時やっと何かから解放されたように、意気込むのでした。

第一話 ？

——それから数分後。

結界を張り終えたというヒスイさんが、やつれきった顔で戻って来た。

……しかし、あたしを見た途端——それはそれは見事な、土下座をし始める。

ズダァン！ と頭を地面に打ち付け、尚且つスライディングをしながら土下座をするので……こちらとしては目が点だ。

掛ける言葉も見つからず啞然としていると、ヒスイさんは何回も頭を打ち付けて言った。

「本当につ、本当に申し訳ございませんっ！ 私という者がおりながらっ！ みすみす魔法を掛けられそれすら気付かず赤石様を……！！！」

「いや、あたしは大丈夫……じゃないヒスイさん！ 頭から夥しい血が……！」

「ええええ！？ お怪我をなされたのですか！？ 今すぐ回復魔法を……！」

「ちょちょちょ！ 違います違います！ あたしじゃなくてヒスイさんが怪我してますっば……！」

「アハハ、なんだ、私ですか。安心ください、何のこれしきです……！」

「血だらけの笑みで言われても！」

とりあえず血を拭いて！ 怖いから！

あたしは先ほどまで顔に巻いていたあの布を、ヒスイさんに手渡した。

な、なんて豪快な人だろう……。

しかも土下座の仕方が、恐ろしく綺麗だった。

やり慣れた感があったのは……気のせいだと思いたいが。

とりあえず、ヒスイさんに血を拭いてもらってから、私達はさっきまであった事を話し合った。

まず、私が別れた後の事、何があったか——そして、どうしてここまで来れたのか。

あたしが説明しおえたあと、ヒスイさんは慎重な面持ちで、呟いた。

「電気……ですか？ おかしいですね……あの金髪野郎は、魔法を使った事はありませんよ」

「ダイヤ本人も言っていました。……ただ、私の手は怪我をしてなかったんですが、ダイヤの手にだけ抉られたような怪我が……」

「運がよかったですね、そんな高価な薬を頂いていたなんて」

「でも……ヒスイさんにもわからないなんて……一体なんだっただろう？ あれ」

「それに、サファイロスとパールの奴。一体なにを考えてるんだ……？」

ヒスイさんは二人を思い浮かべたのか、そう呟く。

「でもあたし、その二人がいなきゃ捕まってましたよ」

「……そうですね。にしても、バルバトスの里に行けだなんて……」

私は首を傾げた。

バルバトス——夢には出て来なかったので、私は聞かされてもなにもわからない。

私がわかるのは、夢に出て来た内容だけ。

……あ、ちなみに。

手を舐められた事なんだけど、もちろん省きました。

彼の人権のためもあるし、あたしの心情の保護のためですから。

……だってめっちゃ恥ずかしいもん！

言えないでしょ、そんなこと！

私は赤くならないように気をつけて、脳内で悶々とするアレを追い払った。

そして、一番気になっていたことを聞く。

「——で。三人は何かあったの？ どこで手に入れたのさ、それ」

私の質問に、今度は三人があつた事を話した。

その話に、私は仰天する。

「え……パールさんとサファイロスさんがそれを？ すっごいねー。そんなもの盗むなんて」

私はマジマジと、その三つの品を見た。

イチーの剣は兎も角、チョコのは本気で羨ましい。

かっこいいーよなあ、魔法使い！ 面倒は嫌だったからやりたいとは思わないんだけど、それでもやっぱり憧れだよね。

「あ、そうだカエン。これ、お前はどんな風に見える？」

「え？」

イチーに差し出された剣を見て、あたしは呆然とする。

……どうって言われても。

「あ！ 私は、水の属性なそうなので、刀身が水色に見えるんですよ？ あと、とっても涼やかな冷気を放ってるんです。水魔でし
たっけ」

「たしかそんな名前だったな。カエンはどうなんだ？」

「は？」

「だから、どう見える？」

「どうって……剣でしょ」

「当たり前だろ」

「なんなんだよ！ 先に説明しろっての！」

混乱するあたしに、ヒスイさん含め二人は懇切丁寧に説明をして
くれた。

属性ごとに分かれた剣は、見る人によって形が違う……そして、
それぞれどんな形なのかを。

しかしあたしは、それを聞いて、余計に頭を悩ませる。

「カエンはどれだ？」

「どれって……だから、剣だよ。普通の剣」

「……は？」

「カエンちゃん、普通のって……どんな感じですか？」

「いやだから、普通は普通だよ。なんかそこらへんに売ってそう
な、普通の剣」

？

あたし達は三人揃って、首を傾げる。

そんなあたし達を見て、ヒスイさんは慎重にあたしを見てから……
…言った。

「あの……もしや、柄の方に……なにか文字が書いてありませんか？」

「……？ 文字……？ ああ、ホントだ」

あたしはITCHーから受け取り、その文字とやらを眺める。

……ん？ って、これ、日本語じゃん！ なんで日本語なの！？

しかしお馬鹿な私は、それがなんて読むかが分からなかった。

普通の剣によって普通にへこむ。

「うう……。なんて読むんだろ……漢字が書いてある」

「漢字……？ 漢字って、あの漢字か？ 日本語の？」

「うん。……えーっと、漢字四文字」

「それだけでわかるか。どんな言葉に使う漢字だ？」

「え、えっと。終焉……かな、多分その“焉”でしょ。二文字

目が……うつ……うつん」

「何ヘンかわかりませんか？」

「な、なにヘン？ え、あの、さ、魚……？ 左に魚で、右に京都の京……」

「……？ ああ！ “鯨”ですか？」

「クジラ？ クジラって読むの？」

「三文字目はなんだ？」

「あ！ これはわかる！ 神様の“神”！」

「それがわかんなかったら、俺はお前の学力レベルを疑う」

「ぐっ……」

「さ、最後はなんですか？ カエンちゃん」

「ううう……んつと……マジで読めない……」

「左側はなんて書いてある？」

「……んつと……か、革？ 革靴の“革”……かな」

「右側はなんですか？」

「……刀……のような、気がする」

「なんだそりゃ」

「だって！ 刀って漢字に、なんかシュツと……ああ！ 刃か！」

「……カエン。ドリルはまだ持つてるか？ 小学一年の」

「泣くよ？」

「泣いて改めるよこの馬鹿」

「わあああああん！」

「まつ、まあまあ落ち着いてください二人とも！ “革”に“刃”ですよ？ 多分、強靱の“靱”ですよっ」

ひとしきり泣いたあとで、先ほどあたしが言った漢字を頭で並べて見た。

焉、鯨、神、靱。

うん、どうせ並べられてもあたしにはわからないよ。

だから二人にパスをした。

「えん……、くじら……はそのまま読まないよな」

「げい、じゃないですか？ 捕鯨って読み方がありますし」

「ああ、なるほど……。えんげい……かみ、じゃないな。しん、か」

「えんげいしん……じん、ですかね？」

「えんげいしんじん。……これしか読み方がないよな」

だからあたしは上の空なのです。

頭の良い組はそっちでやってくれ！ ケツ！

不貞腐れているあたしの横、何故か未だに黙り込むヒスイさんを、あたしは不安そうに見つめた。

ヒスイさんも漢字が読めないんだよね、多分。

ていうか、なんで黙り込んでるの？ 見えちゃまずかったのかな
……これ。

だんだん不安になってくる中。

不意に顔をあげたヒスイさんは、必死に勉強会を開くイッチーとチヨコに向かって一言。

「焉鯨神鞆。あつてますよ」

「え……？　読めるんですか」

イッチーが問う。

「いえ。私に、漢字はわかりません。姫様に教えていただきました」

「なんでカエンには普通の剣なんですか？　もしかして……属性がない？」

「……いえ。そうではありません。しかし……これは私から説明

してはならない事かもしれませんが――教える事は出来ません」

「ただ」と。

ヒスイさんは続ける。

「焉鯨神靱。それは、その六つが一つの剣である総称です。……
姫様が、名付けました。私にはそれだけしか言えません」

……ムズムズする。

すごく知りたいのに、それをヒラリとかわされるだなんて。

なんで？ どうして？

何故あたしだけ普通の剣なわけ……？

……また、姫様の片割れだから……って？

いい加減にしてよ、もう。

あたしはあたしなのに……どいつもこいつも、あたしを姫様と重ねてっ！

物申すだけじゃ足りない、見つけたら、ぶん殴ってやる！ 自分の後始末は自分でつけろ、ってね。

「……皆様をバルバトスの里に送る事ができたら、一度私も話さねばならないようですね……」

「——だ、誰と……ですか？」

不安に問うチョコに、ヒスイさんは安心させるよう、優しくな瞳を向けた。

「ヴィカとです。……やはり、すべてを彼に聞かないと」

ヒスイさんは、「じゃないと気になって眠れません」と茶目つ気たつぷりに言った。

……いや、まあ。

気になって眠れないのは、むしろあたしの方なんだけどね。

絶対に。

「てゆうかさあ、なんでクジラって漢字が入ってんの？ 姫様はクジラが大好き、とか？」

「そもそもこの世界に鯨がいるかどうか疑問だな」

「鯨って、動物最大の生き物なんですよ。だから、そういう“最大”とか、“最終”って意味が込められているんじゃないですか？」

「あ、ゴメン話し変えるけど。あたしだけカタカナってのがとても辛い。漢字やめてください」

いや、喋ってるだけなんだから実際は知りませんが。

……あれ、どうしてだろう、いきなり涙が……。

「とにかく。最終兵器って意味が強いのかもな。……終焉の焉、これは、訓読み調の文末において、言切りの意味を強める語だから」

「鯨……じゃなくて、“クジラ”はさっき言った通り、動物最大の生き物です」

「神はそのまんま、神様だろうな」

「靱は、強靱ってことじゃないですか？」

「つまり、神のように強靱な、最後で最大の剣……ってところだな」

……えっ？ あ、しまった！ 途中から全然聞いてなかったよ……
……なんか授業を聞いてるみたいで、ついね。

寝なかつたんだから褒めてほしいくらいだ。

しかし、それを気付かないチョコではなく、尚且つそれを許してくれるイチーではないのである。

呆れた様子であたしを見るチョコの横で、冷気を纏いはじめたイチーが言った。

「カエン」

「はいご主人様」

「ちよつと結界から出てみる。魔法がちゃんとできてるか確かめたい」

「本気で申し訳ありませんでした!」

先ほどのヒスイさんよろしく、あたしはさらに美しい土下座をするのだった。

土下座はあたしの特技……美しさでいったら誰にも負けないよ。

その証拠に、ヒスイさんが何気に感嘆していた。

……そしてあたしは惨めになる、と。

「おっと。あまりに美しい土下座だったので、見ほれていました」

「……どう致しまして」

「それより、いつまでも結界の中にいるわけにもいきません。…
…作戦をたてましょう」

そして、あたし達は作戦を考え始める。

……作戦という凝った話ではないけれど、これからどうやって、
あたし達はこの町の結界を出すか——そんな相談にも似た話だった。

広すぎるこのオフガイアの城下町……ヒスイさんも逃げる時に言

つていたけれど、町全体に結界があるわけじゃない。

つまり、ギリギリでもいい……テラが入り込める場所さえ、なんとか行ければ。

あとは、テラと、ヒスイさんの魔法に、あたし達三人は身を任せただけ。

……だけ、なんだけど。

それがうまくいかないからこそ、あたし達は今、悩んでいるわけである。

ヒスイさんによると、どうやらすでにオフガイアの兵士は、その結界ギリギリにほとんど見張りを付けているらしい。

よくわかんないけど、気配とかでわかるんだってさ。

だからこそあたし達は、悩んだ。

馬鹿正直に、正面から行くわけにもいかない……かといって行かないわけにも……悩んでも悩んでも、不安は尽きなかった。

——必死にあぐねいた結果、やはりなにも良い案がでなかった私達。

あたしは頭を使いすぎて——言うほど使っては無いが、とにかく珍しく長時間考え続けたせいで、体力を消耗し腹が減ってしまった。

「ぐうぎゅるるう」……と、お決まりのごとく、腹の虫が鳴る。

「……今のカエンか」

「失敬しました」

「でも、卒業式終わってからもう数時間……お昼ご飯も食べてませんものね。私もお腹が減っちゃいました……」

「この世界にマックとかないかなあ。あたし、マックポーク食べたい。……安いのにあの味、神だね神！」

「俺は朝マックのマフィン。あとポテト」

「私はチョコシェイクが飲みたいです。……あ、そういえば前マックに行った時、私がトイレに行ってる間ストローにポテト突き刺したのは誰ですかっ？」

「カエン」

「ちょおっ！ やったのはITCHーじゃん！」

「カエンがそそのかすから……」

「責任逃れしようったって、そうはいかないっ！」

「んもっ！ 同罪ですっ！」

結局チヨコから、二人一緒に怒られてしまった。

「マック、とは……なんですか？」

「あ、やっぱりないんだ」

あたしの呟きにITCHーが、「そりゃないだろ」と返した。

そしてチヨコがヒスイさんに、マックの説明をする。

「えっとマックというのは、パンをお肉で挟んだ食べ物が売っているところなんです」

「……チョコ、パンと肉が逆。それはそれであたしは食べたいけど」

「逆……ということは、肉をパンで挟む……。ああ、サンドイッチみたいなものですか？」

「……あー、それも間違いじゃない……か」

……たしかに。

まあ、間違いじゃないんだし、それでいいか。

「しかし……表の世界には、複雑なものがあるんですね」

「複雑……なの、かな？　あたしは、こっちの世界の方が複雑だけど」

心境的に、と心の中で呟く。

「元々繋がっていたとはいえ、別々の世界ですからね。やはり、違いが目立ってしまうのでしょうか……複雑になって当然です」

「……違い、ってどうか」

私は、口をまごつかせる。

生き物も然り、建物や暮らし方、常識だって……たしかにあたしには理解できない事ばかりなんだろう。

けど、私が言いたいのは、そういうことじゃなくて……

「——あたしが、複雑なのは」

「？」

「姫様と——あの城の、いや、この町全体の人達のことです」

裏切り者だと、口々に言う。

逃げている途中も、事情を知らない人達から投げ掛けるように言われた……“何故裏切ったのか”、と。

そして決まって、悲しそうに言うんだ。

裏切ったと思っているならば、何故、怒りの感情を含めないのだろうか。

—— 本当は。

この町の人達……姫様が好きだった人達は、実はまだ、信じてるんじゃないかな？

本当はなにか重大な問題に立ち向かっていて、今それを解決するために……姫様は一芝居うつっているのではないかと。

きっと、みんなはそう思っているんだ。

……だから、みんな悲しそうに見るんだ。

本当は信じているのに、なんにも言ってくれない……姫様が悲しくて。

複雑だな、やっぱり。

みんながみんな、素直じゃなさすぎて。

胸の奥が、すごくムズムズする。

この町の人達は、おかしい……姫様もおかしい。

何故素直になれないのか？　きっと、怖いからかも知れないけど。

……馬鹿正直なあたしには、一生涯理解できなさそうだね。

腹探りのな事は、あたしには似合わないよ。

「……なんでもないです。ただ、みんなまだ姫様が大好きなんだなあって」

「……」

「なんだか、ひしひし伝わります」

それは、姫様が本当に良い人だったから。

良い人だったからこそ、みんなはまだ、信じている。

…… 凄いよなあ、姫様って。

顔は同じなのに中身がここまで違つと、あたしが片割れなんて信じがたくなっちゃうよ。

顔が似てるだけの別物だったりして。

あたしは苦笑を零しつつ、もっかい作戦を考えましょうかと問い掛けた。

しょうがないから、さつさと救ってやろうじゃない。

じゃないと、みんながシヨンボリしたままだし。

多分だけど……片割れとして、少しは手を貸してやるぞ。

あとで給料がっばりいただいてやる。

「じゃ、どうします？　どこか兵士が見張ってなさそうな場所とか――」

「――そうか、そうですね。みんなはまだ姫様を想い、望みを捨てきれないんです。姫様は間違ってたと思わせられれば……！」

ヒスイさんは目を輝かせながら言った。

その表情はどこか、興奮しているように。

「作戦を思い付きました！　やっぱり、これしかありませんっ！
」

「ひ……ヒスイ、さん？」

「耳を貸してください！　……これから、一芝居やらなければな

りませんよ
「

ウインクをするヒスイさんを表情を、あたし達は不安に見つめる。

頼むから、変な事でなければいい——そう思うしかないのであつた。

噴水のある大きな広場。

サンサンと降り注ぐ太陽の光を受け、眩しく輝く噴水の水しぶき……。

見てるだけなら涼やかなのに……一方あたしは泣きたい気持ちを堪え、兵士達の並ぶ目の前で——冷や汗を背筋に流していた。

……あたしは多分、脱水症状を起こして死んじゃうんじゃないかな。

一分後ぐらいに。

「——道を開ける、私は、大きな使命のため行かなければなら
ない」

——目の眩むような、美しいドレスに身を纏いながら。

あたしはITCHーの使っていた剣を、天に高々掲げ……兵士達を睨んでいた。

……性懲りもなく姫様の真似をしてるわけだが。

これはあたしでなく、ヒスイさんのアイディアだ。

本当にあたしのせいじゃないよ、ヒスイさんだからね。

「そんな……馬鹿な……ひ、姫様は……」

「死んではないない。事実、赤石力エンが顔を出したのだろう？
……それが証拠だ。彼女を巻き込んでしまった、だから私は来たのだ」

とにかく、もっともらしいことを言えいいから……と。

馬鹿なあたしには打って付けの、アバウトな説明だった。

とにかく通れるようにしろ、もしもの事があれば……その時なにとかしてくれるらしい。

アバウトすぎて……怖いだけだね。

「い……いけません。妹様……ロジーナ姫の命です」

「ならば、強制的にでも通る。……戦うか？ この私と」

「っ……！ ひ、姫様……落ち着いてください！」

お、おお……！

この反応をみるや、騙されてくれているようだ。

ダイヤには一瞬でバレたのに、こうもうまくいくなんて！ しかも、自分最強みたいなこの感覚。

……素晴らしい……。

「いいか、もう一度だけ言う。次はないと思え」

「ひ……姫、様」

「——私には、やらねばならない使命がある。だから私はなんとかしてでも道を開けてもらわねばならない。そのためには、赤石力エーンに続くあと三人にも、生きていてもらわねば。……お前達に、なにも伝えられず、申し訳なく、齒がゆくも思う。だがしかし、私は一人でこなさねばならない。そこを、退いてくれ」

そこまで言って。

あたしはひたすら兵士達をみた。

それぞれが悩み、苦しんでいるような顔。

それは、開けるべきかどうかを考えているわけではなく……どうして教えてくれないのかと、苦渋に耐えているようだった。

あたしには、そう見える。

……嘘について、ごめんなさい。

でも、満更嘘じゃないかなあ……なんて。

姫様はきつと、あたしが言ったような気持ちに、なってるんだと思っ。

言いたくてたまらないと思っし、苦しくて寂しくて切なくて……

本当は助けを求めたいんだと思ってる。

……それでも姫様は一人でいて。

どれだけ苦しくても、寂しくても、切なくても。

絶対に姫様は助けを求めないし、一人でなんとかするんじゃないかと思う。

——ただ、姫様は……あたしたちにだけ、助けを求めた。

この世界のためになんとかしてほしいと、だから唯一あたし達に SOS を出したんだ。

本当は、いやだ。

あたしだって、危険には踏み入れたくない。

でも見捨てられないのは……やっぱり、あたしが姫様の片割れだから、ってことなのかな？

——あたし達だけに助けを求めたならば、少しだけでも役に立たなくちゃ。

ガツカリさせたくないしね。

できるとこまで、やってみるしかないよね。

「頼む」

「……！」

「我が儘は承知だ。だがしかし、私とて譲るわけにはいかない……」

そう。

譲れないんだ。

こっちへ来て数時間でも、今まで助けてくれた人達に……笑顔を見せてみたい。

だって、みんな心から笑えてなさそうなんだもん。

それ以上……辛いことはないよ。

あたしは兵士に頭を下げたまま、瞼をキツく閉じた。

姫様の演技とかではなくて、これは、あたし個人の頼みでもある。

傷付けずに済むなら、それ以上に良い事はない。

だから、そのためなら、あたしは何回だって頭を下げてやる。

……数分経っただろうか。

なんの反応もないので、訝しげに思ったあたしは頭を上げた。

兵士達は、諦めたような……苦笑をしていた。
私はそれを、了承と取る。

「敵いませんね。……どうぞ、お渡りください——赤石様」

あれ、バレた。

なんでバレたのかなあ？ 喋り方が、やっぱり違うとか。

……いや、見た目かも。

あたしも苦笑を返しつつ、わきに避けてくれる兵士達に礼を言いながら。

物陰に隠れているであろう三人に、あたしはOKサインを出した。

ああ、なんとか一段落つきそうだ。

あたしはそう思った。

「やってくれるわね、兵士達まで懐柔してしまうんだなんて」

——そんな声を、聞くまでは。

「……えっ!？」

「こんにちは。そういえば、自己紹介がまだだったわね——
わたくしの名前は、ロジーナ。ロジーナ・スピア・オフガイア……
みんなが大好きな姫様の、妹よ」

——そう言って、ロジーナは。

あたしに、剣を向けて走って来た。

「っ！」

「——へえ、表の世界から来たにしては、良い反応するわね。あ、力のおかげかしら？」

「な、んっ——！」

「ああ、良いのよ喋らないで。——あの女と同じ顔で喋られると、虫酸が走るのよ……」

そう言つや否や、ロジーナは憎々しげにあたしを睥めた後、再び剣を振り上げた。

——ドレスが邪魔をして、うまく避けられない！ ヤバい……切られるー！！

……と思っただが。

それは杞憂に終わり、見えない壁に遮られたかのように、ロジーナの剣は何かに弾かれた。

あたしは間一髪……。

ロジーナから間合いを取り、剣から逃れる事が出来た。

「守りの魔法を掛けられていたのね」

「——わざわざ、そっちもドレスでご登場ですか。妹サマ」

「——ええ。兵士も騎士団も信用出来なかったから、わたくしがわざわざ出向いてあげたのよ」

バチバチ……そんな効果音が聞こえた気がした。

……ホント、嫌な感じだ。

この人を纏う空気だけが、澱んでいるように感じる。

悪意などの、負の感情が……混ざりあった嫌な空気。

——それになんだか、この人を見てると……イライラしてくる。

何故かは、わからないけど。

ただ、胸の奥……何かに対する感情が、チリチリと焼けるような
——いや、轟々も燃え盛るような。

そんな、怒り。

腹が立つ。

こいつを——ロジーナ姫を見ていると。

喋られると虫酸が走ると言われたけれど、それはこっちのセリフだ。

……ロジーナ姫に喋られると、虫酸どころか、嫌悪感走るようである。

「他のものはアテにならない。……だから、わたくしがやるわ」

「結局、殺したいだけですってこと？」

「殺したい？ いいえ。ただわたくしは、貴女を捕らえようとしているだけよ」

どうか。

最初の剣も、さっきの剣も……あたしが避けなきゃ、確実に致命傷になるだろう場所を狙っていたくせに。

よく言うよ、可愛い顔してさ。

「ただ、大人しくは出来ないようだし……少し手荒な方法を使わ

なければならぬみたいね」

「……」

「一対一で勝負よ。……どうかしら？」

ゴクリ——喉がなる。

一対一の勝負……と、言われても。

剣の技術については、あたしは皆無だ。

いくら運動神経がよかろうと、限界がある。

かたや、相手は姫様といえど、最低限の事は習ってきてるであろう人物。

……負けるに決まってるじゃん。

「せ、せめて……なにかハンデを」

「ハンデ？」

「力なんてっ、あ、あた、あたし、戦闘向けの力じゃないしっ。
なにか、ハンデをくれないと！」

「……罪人に、情けなど必要ないわ。死刑になるはずだった人間
を連れ出した拳句、秘宝を我が物顔で持つてるのだから」

ハンデなんか、必要ないでしょう？ ロジーナ姫はそう言って、
クスクス笑った。

ド鬼畜野郎め！ か弱い女の子いたぶって、何が楽しいんだ！！

「さあ——始めましょうか」

「——っ！！」

風が舞った。

あたしの背中を押すように、そして、立ち向かえと言わんばかり
に。

「覚悟しなさい——！」

あたしにやってくる、ロジーナ姫の姿。

それが何故か一瞬、スローモーションに見えて……気付いた時にはあたしの身体が勝手に動き、その剣を避けていた。

——不思議な感覚。

自分の身体が……操られているような、また、のっとられているような。

ザワザワするような気持ち悪さだけがあたしを支配し、身体だけを動かしている。

誰かが——いる。

後ろに？ 違う。

隣りに？ 違う。

身体の中……に？

……そう、“いる”んだ。

身体の中、に。

その誰かが、今、あたしを動かしている。

「ちっ——案外やるのね。羨ましい限りだわ、能力が貰えるって」

「違う……違うっ……！」

キン！と。

それぞれ手に持った刃と刃が、重なりあう。

押されないように力を込めている——あたしの身体。

誰なの？ 今あたしを動かしているのは。

何故あたしは、こんなに怖いと思っているのに……止めてくれないの？

——このままじゃ、すべてのつとられるような気がした。

あたしの、心と身体……すべてが。

のつとられたら、どうなるんだろう。

それは、今までのあたしは無くなる……て、こと？ 生きているのに、あたしはいなくなる……そういう事なのかな。

——怖い。

とてつもなく、怖い。

あたしじゃなくても、身体は生きて……あたしじゃない誰かは、
そのまま生きるわけで。

……あたしの、今までを奪われる。

イチーやチヨコに挟まれた場所は……あたしのじゃ、なくなっ
てしまうんだ。

——イヤだ、すごく。

あの場所だけは……譲りたくないか、ない。

あの場所は……この身体は……！

「あたしの物だっ！！」

「ッ！？」

風があたしを押した。

戦えと言った時同様の、あの風。

不思議な事に……その風は、あたしの中にあって、身体を突き抜けるようにして出ていく感じがした。

瞬間、身体が軽くなる。

自分で動かす事も出来た。

安堵でホッとしていたら、弾かれた事に怒りを覚えたのか……口
ジーナ姫が小さく悪態を吐いた。

そして、叫ぶ。

「まだなのダイヤッ!!」

——ダイヤ？

あたしはロジーナ姫の視線を追った。

そこには。

傷だらけになったITCHーを押さえる兵士と。

眠るようにして倒れているチョコと。

ダイヤに抱えられている……ヒスイさんがいた。

—— 怒りを…… 不意に感じる時が、時々あった。

情緒不安なのかなと思うようにしていた、それ。

怒る場面でもないのにイライラしたり、楽しく話している途中で悲しくなったりと…… ただちよこつと遅めの思春期なんだなって。

……でも今、あたしはそれとは違う、たしかに怒りを感じていた。

誰かに浸食されているわけでもなく、操られているわけでもなく、のっとられているわけでもなく。

間違いない……それは、あたしの感情。

怒り？ 生温い。

憤怒のほづが近い。

いや、これは――殺意？

……それを感じたあと、あたしはふと気付く。

イチーを押さえていた兵士が地面に倒れており、あたしは……
ダイヤと剣を交え終えていた。

勝敗は、あたしの勝ち。

ダイヤは膝をついていた。

「――あ、れ」

……思い、出そうとした。

たった今の事を。

なのに……落としてしまったかのように、抜けてしまっていて。

カタカタと身体が震え、膝から落ちそうになる。

それを、ITCHーが支えてくれた。

「い……ITCHー……？」

「……うん。俺なら、ここにいる」

「チョコ……チョコは？」

「千世子なら問題ない。本当に眠ってるだけだから」

「ヒスイ……さんは」

「気絶してるんだ。理由は知らないけど、ちゃんと生きてるから」

「……あ……たし、今……何を、してた？」

「……」

イチーは黙り込んだあと、短く言う。

「何もしてないよ」

と、それだけ。

「な……なにも？」

「……うん。何もしてないよ」

——そんなはず、ないのに。

ダイヤを剣で打ち負かした事は、覚えているのだから。

何もなかっただなんて、嘘……あたしがやったんだ。
無意識に。

兵士は……まさか、殺してしまった？

「イッチー……」

「大丈夫」

「……」

「誰も死んでないし、お前は何もしてない」

“何もしてない”。

イッチーはそれをかたくなに曲げようとせず、何回も呟いた。

何もしてないはずないけれど、あたしはその言葉のおかげで、徐々に気を取り直した。

震えも、治まり始める。

「カエン、身体は重くないか？ 寒気がするとか、頭が痛いとか」

「ない……と、思う」

「……そう。なら、いい」

ポンポン。

頭をそつと二回叩かれて、イチーは安心したように微笑む。

そしてすぐに、チョコの元へ向かった。

あたしは跪くダイヤの横にいる、気絶したヒスイさんの元へ走る。

そして、抱き上げた。

……フラフラだったが、踏ん張って背負う。

「……赤石……様」

「……」

そんな時……戸惑いがちに問い掛けて来る、ダイヤ。

……たしかにあたしを追うなどとは言ったけど、だからってこっちを狙うなんて。

なんか、普通に会話出来そうにない。

くそっ……絶対姫様にチクツてやる。

——しかし。

それが伝わってしまったのか、急にアタフタするダイヤ。

あたしはプイツと顔を背ける。

「ち、ちが——妹様に命令をされて」

「へー。ふーん。そお」

「う……」

「別にいいけど。しょせんそんなものだろうし」

フンツと鼻で笑う。

責められないのはわかってるし、仲間でもないんだからわかってるんだけど……裏切られたような気がした。

別にいいけどね！ 何度も言うけど。

「それよりイッチー、ちょ、足フラフラで……かわりにヒスイさん担いで——」

ガリツ。

地面を、金属で切るような……鈍い音が響いた。

あたし達は、そちらを伺う。

——そこには、ロジーナ姫がいて。

うつすら、笑っていた。

あの夢の時のような笑みだ。

ぞくりとする。

「ふふっ」

「……なにがおかしいんだよ」

イチーが凄みながら、問う。

「ふふふっ……いえ、ただ面白くて。だって一段落ついた、みたいな顔してるんだもの。ねえ？」

「どういう意味だ」

「そのままの意味よ、色男様。……あたしが、ここを通すとても？」

な……マジかよ！ 我々の勝利なので渡らせてもらいます、みたいな雰囲気じゃないのかコレ！！

勘弁してよ……二人も気絶してるし、あたしもフラフラ、イチーは傷だらけ……体力なんかもうないって！

「わたくしに勝てたら、通してあげるわ」

「……イッチー……」

「……面倒なことになったな」

はあ、と。

溜め息を吐いた。

「さあ、どうするの？ それとも大人しく捕まるのかしら」

「……やなこつた！」

「……同感だな」

あたしとイッチーは、顔を見合わせて頷いた。

走ろう、できるかぎり…… たった数メートルの距離なんだから。

多分、なんとかなる。

なんとかならなくても、なんとかする！ ……フラフラだけど。

「わたくしも、ナメめられたものね」

ふう、と。

溜め息を一つ。

あたし達は……予想打にしていなかった。

こんな、いくら姫だからって……ここまでするとは、思わなかったんだ。

第一話 ？

——目の前が眩んだ。

身体中を走る凄まじい痛み、あたしもイッチーも、膝をついてもがく。

外側からじゃない……中から攻撃されているような、恐ろしい痛みだ。

……心が切り刻まれて、火だるまにされて、バラバラになるような……。

そんな、ひどい感覚。

……この世界に来てから、攻撃と言われるような攻撃は、まだ食らったことがなかった。

でも、今、それを体験している。

怖い……なんてものじゃない。

人の心配なんてしてる場合じゃないのに、攻撃を食らう前にチョコとヒスイさんを離しておいて、良かったなどと思ってしまう。

……とくに、チョコにだけは、こんな痛みを味わって欲しくない。

イチーは、男なんだから我慢出来るだろう。

でも、チョコは女の子だ——耐えられるはずがない。

……まあ、一応あたしも女の子だけど。

——あたしはキツく目を閉じた。

心を破壊されないように、しっかり意識を保つ。

……大丈夫、まだ、あたしは大丈夫。

いくら怖くても、辛くても、泣きたくても——今は弱音を吐く時じゃない。

耐えろ、あたし——！

「——しづといのね、本当に」

「ろ——ロジーナ姫！ お止めください！」

「うるさいわよ、ダイヤ。黙って見てなさいな」

そんな二人の会話が、遠い意識の中、聞こえる。

「いつまでもつかしらね……その意地が」

——もう、なにもみえない。

あたしがだれで、あたしはなんなのか、わからなくなる。

おぼえているのは、ふたりのえがおと、あのひとの……なきがお。

「——終わりよ」

青い空。

これを、毎日見ていたような気がする。

どこでだっけ？ ああ、夢だったっけ。

あれ……本当に夢だったかな……、そんなことすらも思い出せない。

「キュウーッ!!」

……ああ、そうそう、「キュウッ」って言う乗り物で毎日見たんだっけ。

ん？ 毎日じゃないや、あたし一回……いや、三回見たんだっけかな。

どれも前足に捕まれてだったけど。

——って!!

「テ……ラッ……!？」

激しく続く痛みの中、あたしは視界の端に……その姿を捕らえる。
ちょうど、結界の外である……兵士達の後ろのあたり。

「!？ このドラゴン——！ まだ生きていたのね」

そんなことを呟くロジーナ。

注意を逸らしたおかげか、あたし達を苦しめる魔法が解ける。

……だけど、元々身体が限界だったのもあり、先ほどの魔法によるダメージがデカくて、指一つ動かせなかった。

唯一動かせるのは、視線と唇。

「ふん。この結界の前じゃ、たとえアンタでも無理よ」

「キューー！」

「……ふ。愚かな」

前足で、ガリガリと結界を引っ掻く、テラ。

……痛いんだろう、ドラゴンの表情がイマイチわからなくても、苦しそうなのが見て取れた。

それに、テラが結界を引っ掻くたびに、ビリッと大きな音が響く。

……電撃かな？ テラはたまに痛そうに震えては、諦めずに何回も同じことをする。

今度は、体当たりをしながら。

「テラ……それ以上やったらッ……うっ」

あたしは「それ以上やったら危険だ」と叫ぼうとして、身体の痛み
みに言葉を詰まらせる。

……見てられない。

もう、テラの身体は、全身から血が流れていた。

「本当に馬鹿ね。無理に決まってるのに」

「っ……キュウウッ!!」

「諦めが悪いわね……、あの女とそっくり」

——あの女。

姫様……ルビィ・ブレード・オフガイアのこと、だろうか。

……もし姫様だったら、こんな状況、どうしたのだろうか。

あたしも、姫様みたいに凄い力とか持っていれば良かったのにな……
……そしたらパパッと敵を一掃したりして。

持つてるといったら、ギャンブラーの能力と、凄まじい回復力だけだもん……役立たずもいいところ。

あたしは自分の不甲斐なさで、溜め息を吐いた。

首を動かして、イチチーの方を見る。

……イチチーまで気絶してしまったようだ。

さすがに、三人抱えて逃げるのは、無理。

それ以前に身体が動かないって言うてんだから、無理だけど。

あーあ。

「……………え？」

身体が動かな……………くもないような。

いや、だって、今あたし……………首動かしたよね？ ていうか腕も動く。

あれ？　なんで？　いくらなんでも、あたし——そこまで超人じ

やないのに。

回復魔法をかけてもらったわけでもないんだから、どう考えたって………ねえ？

……あ、そうか。

あたし自分で言ったじゃん、ギャンブラーの能力と、“凄まじい回復力”って！！

回復してんじゃんかあたしの馬鹿！

——あたしはロジーナをこっそり見た。

距離は二メートル……テラを嘲りながら見ているため、あたしに気付いていない。

ていうか、動けないと思ってるんだろう。

……今しかない。

ヒスイさんが作戦決行の前に言った、最終手段を取るべきだ。

確証のない、賭けとも言える……最後の手段。

「……っ」

焉鯨神韌。

それを静かに手に取り、あたしは立ち上がる。

大丈夫だ、走れる。

あとは——運に任せるだけ！

「——っ！」

あたしは走った。

境界線とも言える、結界のほうへ。

——ヒスイさんが言ったことを、思い出す。

『焉鯨神靱。これは、姫様だけが自在に操れる……“破壊”の剣です。凶悪な魔法はもちろん、バリアも、もちろん結界も壊すことが出来ます。——赤石様、貴女は、姫様以外に焉鯨神靱の真の姿を捕らえることの出来る、唯一の存在です。扱えるかどうかはわかりません。可能性に賭けましょう——』

……扱えるかどうか？ そんなのは関係なく、扱うしかないのだ。

あたしは、結界を壊さなくちゃいけない——！

「っらあああああつ——！」

「——っ！？ あなたっ……何故ッ」

ロジーナはあたしを見て驚いた。

やっぱり、動けるなんて思ってたようだ。

あたしは気にせず、目に見えない“それ”に、剣を突き刺した。

——硬いなにかに、剣が突き刺さる。

ダメだ、もっと、もっと力を入れないと………あたしは痛む手を無視して、力を込めた。

「くううだああけえろオオオオオオッ!!」

——パリンッ。

渴いた、ガラスの割れるような音。

途端、遮っていたなにかが消え失せる。

勢いあまったあたしは、剣を地面に突き刺した。

……やった。

……できた。

あたしが、やったんだっ！

「テラアッ！」

「キュウウウ！」

感動に浸っている場合じゃない。

あたしは叫ぶようにして、テラに合図を送る。

「させるものですか——！！」

鬼のような形相を浮かべる、ロジーナ。

ヒドい顔だ……この人が本当に、姫様の妹なのか？ ヒスイさん

が言っ たように、偽者^がとしか思えないよ……。

唾を飲み込んだあたしは、すぐさま剣を引き抜いた。

そして、急いで走る――

もちろん、テラの前足に向かつて。

「飛んでッ！」

「キュイツ！」

ふわり。

飛び立とうとするギリギリの瞬間に、あたしは急いで前足に飛び乗った。

イチーとチヨコは後ろ足に、ヒスイさんは右側の前足でちゃんと捕まっている。

この国とは、しばらくおさらばだ。

っていうか、二度と来たくないかも……。

——身体がまだ痛いのだろう、テラはゆっくりと上昇してゆく。

あたしはニヤリとして下を見下ろしながら、言っちゃった。

「さらば愛しきオフガイア！ 願わくば永遠の国なりて！ ——
さらばだ、姫様の憎き愚妹サマ！！」

……夢で何度も見た、あのセリフ。

まあぶっちゃけ、愛しいとは思わないんだけどね……こんな国。

う。
だけど、あのくそつたれ妹姫には……なかなか良い捨て台詞だろう。

その証拠に、ロジーナの顔は憤怒に満ちあふれていた。

ハハッ、ザマアみやがれ！

「覚えてなさい——赤石カエンツ——」

そんな言葉を聞きながら——あたしは、あたし達は、やっとオフ
ガイアを離れていった。

覚えてろ、ね……あたしは馬鹿だから、多分無理だと思うけど。

一つだけ……覚えておくとしたら。

「……」

夢ではなく、実物のダイヤと出会い、話したあの数分——あたし
はそれを忘れない。

ダイヤは、それを特別には感じていないだろうけど。

……あれ？　じゃあ、あたしは“特別”に思ってることなのだ

ろうか。

変なの、あたし。

ただ話したけなのに……。

しかし、手を舐められたあの時の映像が、フラッシュバックした。

瞬間、顔が真っ赤になる。

「わわわっ!!」

……あつぶね。

落ちるところだった。

「はあ……やめやめ、忘れよう」

そう独り言を呟いて、ブンブン頭をつった。

「……いずれ、また行かなくちゃいけないのかなあ……そんな時はテラも来てねえ」

「……キュ……、キュウ……」

「嫌そうな返事アリガト」

ハハハッと笑う。

さあて、ヒスイさんのアジトに戻ったら、たっぷり寝よう。

もちろん、ご飯を食べてからね。

——あたしは遠くなるオフガイアを見つめて、一人で苦笑いをする
のでした。

「うーっ!!」

ぐえっと呻きながら、あたしは目を覚ました。

ぼんやりとする視界で、一番最初に写るその姿。

……人型のテラだ。

仰向けに寝ていたあたしの腹の上に、にこやかな笑みを浮かべたまま、ピョンピョン跳ねている。

ハハ……それ以上は、あたし吐いちゃう、かも……。

「こうらっ!! テラッ、赤石様は怪我をしてるんだぞ!？」

「うっ、ううー!」

「我が儘言っんじゃない!」

「うーうー!」

「ちよっ、がふっ、てててっ、テラッ! 腹の上で飛び跳ねないでっ……うええええっ!」

あたし、死亡。

「あああっ! 赤石様!」

「……ぐふっ……ナイスジャンプ……テラ……。ああ、ゴメン……あたしそろそろお花畑に行かなくちゃ……」

「だ、大丈夫ですかっ!? 赤石様お気を確かにつ」

ハッと意識を取り戻した。

……あれ、あたし、どうしてベッドの上に……。

ヒスイさんのアジト。

時間を掛けやっとなってきたあたしは、人型テラに手伝ってもらいながら……イッチーとチョコ、ヒスイさんをベッドの上に運んだ。

そして、とうのあたしは気を失うようにして、そのまま床で眠ってしまった。

しかし、今。

気付いたらあたしはベッドの上で、しかも丁寧に掛け布団まで掛けられており、目の前には元気なテラ……そしてヒスイさんがいる。

あれから何時間経ったんだろう？

太陽が全然傾いてないし、一時間も経ってない気がする。

起きてて大丈夫なのかな、ヒスイさん。

「お身体は大丈夫ですか？ 赤石様」

「あ、はい。あたしは全然……ヒスイさんこそ寝てなくちゃ」

「大丈夫です。一週間も経ってますから、ピンピンですよ」

「……」

……え？

「いつ……一週間んんッ!？」

あたしは、それはもう目ン玉が飛び出そうなくらいに、驚く。

……え、ということはあたし、一週間も気を失っていたってこと？

気を失っていたって言うか、寝ていたんだけど。

いやでも、一週間って……いくらなんでも寝過ぎだよ、あたし！！

——未だに信じられないあたしは、驚愕したまま固まった。

それを見たヒスイさんは、苦笑いしながら「無理もないです」と
呟く。

「相当、負担があつたのでしょ……精神的にも肉体的にも。い
くら回復が良いとはいえ、疲れた状態で私達をベットに運んでは
……力にも限度はあるものです」

「はは……。あ、ITCHーとチヨコは？」

「大丈夫です。三日後には目を覚まされて、今は森で修行をつん
でいますよ」

ヒスイさんはクスリと笑って、「赤石様を守るために、必死にな
っている様子です」……と言った。

……そっか。

ITCHーとチョコには、かなり心配と迷惑を掛けてしまったみたいだな。

もちろん、ヒスイさんやテラにも。

あたしはテラを退かしてから、重たい上半身を起き上がらせる。

ヒスイさんに手伝ってもらいながら、なんとか立ち上がることも出来た。

……身体がナマリみたい……。

一週間ってデカいんだなあ。

身体中バキボキ言うし、運動不足のおっさんみたい、あたし。

歩くのが慣れて来たら、一度柔軟体操くらいしとかなくちゃ。

「お腹空いているでしょう？　ちょうどお昼時ですので、ご用意してありますよ」

「わっ、そう言われたら急にお腹が減ってきた」

「あはは。お二人ももうすぐ戻って来られますから、先に召し上がりながら待ちましよう」

ヒスイさんの促しにより、あたしはゆっくりながらも、キッチンへと向かう。

イスを引いてくれたテラにお礼を言いながら、あたしは腰を降ろした。

隣に、テラが笑顔で座る。

「テラ、怪我治った？」

「うー！」

「ごめんね、テラもクタクタだったでしょ？　いきなり倒れて驚

「いただろーね」

そういえば、倒れこんで意識を失う瞬間……テラの驚愕する表情を一瞬だけ見た気がするのだ。

あたしを見たまま、固まっていた。

本当に申し訳ないことをした……心細かったろうに。

「テラなら大丈夫ですよ。幸い、その数分後に私が目覚めたみたいですから」

「あ、じゃあ、ベットにあげてくれたのは……」

「はい、私です」

「すみません、ヒスイさん足を痛めましたよね……」

「はは、大丈夫です。少し捻っただけですから。……はい、どうぞお召し上がりください」

お口に合うかわかりませんが、と苦笑するヒスイさん。

並べられた料理を見るや否や、あたしはいただきますも言わずにかぶりついた。

味わう余裕もなく、あたしはほぼ嚙まずにがつがつ食べる。

でも、美味しい。

チヨコにも負けないうまさだと言うことは、なんとなくわかった。

「まだまだありますから、急がなくて大丈夫ですよ」

「ふいまへん……もお、ペコペコで……死んじゃいほっなんでふ」

かき込むようにして食べている途中、外から誰かがやってくる気配を感じた。

そして間もなくして、扉が開かれる。

「すいません、遅くなっちゃいました……。ただいまで……」

「……？　おい、千世子、どうした？　早く中に入っ……」

あ。

アツアツのチーズが乗ったパンを頬張ったまま、あたしは目を見開いた。

イチー！　チョコ！

「カエンちゃんっ！」

「カエン！！」

同時に叫ぶ二人。

あたしは食べる口を手を止めないまま、ニッと笑った。

なんだ、二人ともチョコー元気そう……。良かったよマジで。

「よかった……！ よかったですっ……本当！」

「……っーか食べ過ぎ」

「おふぁえり。ふぎょーのへいかふぁ？」

「……しかも何言ってるかわかんない」

イッチーは呆れたように溜め息を吐いた。

「カエンちゃん、ゆっくり食べないと身体に悪いですよ？ はい、お水を飲んでください」

「ありふぁほ——っ、ぷはあっ！ いやぁ、お帰りお帰りい、修行の成果はどうお？」

あっけらかんとして言うあたしに、何故か二人は脱力していた。

二人の分の料理を運んでいたヒスイさんが、クスクスと笑う。

……？ 修行で、だいぶ疲れてんのかなあ。

「……ま、いい。元気なら」

「？」

「カエンちゃん。気分、悪くないですか？」

「うん。だいじょーぶ」

あたしはVサインを二人に向けながら、横に振った。

「さあ、お二人も食べて下さい」

「あつ、はい。ありがとうございますヒスイさん」

「いただきます」

二人はあたしの前に座り、お行儀良く手を合わせてから一緒に食べ始めた。

あたしもまだまだお腹が空いていたので、同じく食べ続ける。

あたしは食べながら気付いた。

イチチーは所々傷や痣などが出来ていて、チョコも同じく、小さな火傷やかすり傷を負っていた。

どんな修行をしているんだろう？ 一週間も経っているんだから、あの時の傷は治っているにしろ……またこんだけ傷だらけになるんじゃないよ。

気になったあたしは、再び注意されないよう水を飲んでから、二人に問い掛けた。

「ねえ、どんな修行なの？ 傷だらけじゃんか。プチプチッとモ

ンスター倒して、レベル上げ？」

「俺はね」

「私は、魔法使いですから……使いたい時にすぐ魔法を使えるように、何回も練習しています。魔方陣を間違つて書いたまま発動すると、自分に向かって来ちゃったりするんですよ。だから正確に、尚且つ迅速に、間違わないように練習してるんです」

「ひえ〜、凄いなえ！」

チヨコ曰く、慣れて来ると魔導書は開かなくても、持っているだけで効果があるらしい。

ただ、使いたい魔方陣を、頭の中に入れておかなくちゃならないみたいけど。

魔法は一つずつ魔方陣が違うつぱいからね。

本当に大変そうだ。

あたしもたらふく料理を食したら、運動だけでもしておかないと。

「あつ、カエンちゃん、今運動だけでもしておかないって思ったでしょう!」

「ダメだぞ、カエン。まだ運動するな。食べ終わったら、もう一回寝るんだ」

「あ。歯磨きを忘れちゃいけませんよ」

「風呂になら入ってもいいが、それは起きたあとでだ」

「私達はまた修行しに行きますけど、絶対起き上がったちゃダメですからね」

「もし寝れなかったら、寝なくてもいい。ただしベットの上にいること」

「気分が悪くなったら、ヒスイさんがテラくんに言って下さいね」

「水が飲みたくなったら動いてもいいけど、なるべく持って来てもらえ」

「トイレに行く時は、気をつけて下さいね」

「……………アンタらはあたしの父ちゃんと母ちゃんか! 過保護すぎるわ!」

ただけあたしを幼児化する気なんだ、この二人！

「ふふつ、あはははっ！ お二人は心配なんですよ。なんせ一週間も、静かに寝ていたのですから」

「ヒスイさん。カエンのこと、よろしくお願いします」

「動こうとしたら、縛り付けてもいいです。止めてあげて下さいね」

「……心配っていうか珍獣扱い……」

だんだん切なくなってくる。

「ごちそう様でした」

「ごちそう様です」

「いえいえ。……修行頑張ってください、くれぐれも無理はなさらないように」

そう言つて、ヒスイさんが食器を片付け始めると同時に、二人は本当にあたしを置いて修行とやらに行つてしまった。

あたしは未だにモグモグと料理をかき込みながら、それを見送る。

……つまんないの。

寝たくないしなあ、でも動くなつて言われたしなあ。

ふわっふわの卵焼きを二、三個一気に摘み頬張つたところで……
つまらなそうにするあたしを見たヒスイさんが笑つた。

あたしは頬袋をパンパンにしながら、首を傾げてワケを問う。

「いえ………すみません、あからさまに残念な顔をしていましたの
で」

「うー！」

「はいはい、卵焼きならまだあるから。ほら」

「ううっ！」

せつせと料理を次々に出してくれるヒスイさん。

申し訳ない限りだ。

あたしはやつと膨れてきた腹を撫でつつ、お水をコップ一杯、一気に飲み干した。

……あたしのためと、ヒスイさんは言っていたっけ……あの二人が修行しているのは。

なんで、そこまで頑張ってくれるんだろう？ 嬉しい反面、なんだか不安だ。

あたしのせいかな、なんて思ってしまうから。

修行だってまず安全とは限らないのだし。

不安になりつつも、あたしは二人が行ってしまった方向へ、視線をやる。

丘を下った先にある、森——イッチーはモンスターを倒してレベル上げをしてるっぽいから……その、もし、無駄に強いモンスターが現れちゃったりしたら……。

…… あああ、心配だ！

チヨコだつてあんなちっちゃいのに！

「大丈夫ですよ」

「えっ！」

「顔に書いてありますよ、“不安だ”と」

わかりやすいですね、と呟かれる。

あたしって……そんなにわかりやすいのかなあ？

「……お二人に、話したんです」

「え……何をですか？」

「赤石様が、姫様の片割れ……ということを」

あたしは目を見開いた。

そっか……そうなんだ。

……そりゃ、過保護になるわけだよ。

「お強いお方ですね。あの国で恐怖を感じたでしょう……なのに、話を聞いて恐れをなすどころか、『上等』と言ってすぐさま修行をし始めましたよ」

「……………」

「……赤石様のことが、本当に大切なんでしょうね。並大抵の友情では、こんな危険犯せませんよ」

……照れ臭いな、なんか。

でも、すっごい嬉しい。

「あゝ！ あたしも修行したいっ！ 運動したいっ！」

「ふふ。運動は明日にしましょう、今日はやっと目覚めたばかりですから、念の為に」

「あーあつ、暇だなあ……」

でも、今日だけは大人しくしてやるか。

「こんだけじゃ、全然お返しにならないけど……かなり心配させてるし、少しくらい言うこと聞いてやらなきゃね。」

「ごちそうさまでした！ あ——」

「？ どうかしましたか？」

「いや……その……」

先ほどから心の隅に広がっていた、小さな気掛かり。

……言つべき？ どうして気になるのかわからないので、何とも
言えないんだけど。

501

あたしは、決意したように頷く。

ヒスイさんになら、いつか。

「あの」

「はい？」

「……いや、ただ……ダイヤは大丈夫なのかなー……なんて」

そう、それが……先ほどからあった、小さな気掛かりだ。

何故気になってしまつかわからない、心の謎。

ヒスイさんになら、わかるんだろうか。

「……ダイヤ、ですか？」

「はい。なんか、さっきから気になっちゃって。敵とは言え、一度あたしを見逃してくれたりもしたし……ほらっ、それがバレたら、ダイヤも危ないんじゃないかなって」

「……」

ヒスイさんは、何故か沈黙した。

まさか……さ、最悪の結果になって……しまったとか。

……どうしよう、不安だ……大丈夫かな、ダイヤ。

「……気になりますか」

「……は、はい」

「……その、“気になる”とは……どんな風にですか？」

「えっ？」

どんな風に？

あたしは首を傾げたのち、感じたことを正直に述べる。

「えーっと……なんか、ふと思い出しちゃうっていつか……」

「……」

「ほら、ダイヤって責任感ありそうじゃないですか。だから不安で」

「……」

「落ち込んでなきゃいいなあ……。なんだか心配でしよすがなくなっちゃ——ん？ あ、ヒスイさん？」

ヒスイさんは、たつぷり沈黙を続けたあと。

唐突に扉横の壁に向かい、なんと……頭を打ち付け始めた。

「——くそっ！ くそっ！ あのウルトラ犬畜生め……っ！ 次絶対会ったらボコボコにしてやる——顔だけのクソ金髪正義馬鹿野郎……！！」

そう罵ったあとも、ヒスイさんはピー、ガガー、ザー、と雑音で消さなければならぬような暴言を吐き続け……。

気付いた時には、扉横の壁は、ヒスイさんの頭型にへこんでしまっていた。

ドン引きしながら——テラまで固まっている——あたしは、ヒスイさんが喋り出すのを、懸命に待った。

余計なことを言ったら、殺されてしまうような気がしたから。

……しないとは思っけど、それくらいの雰囲気はある。

「……」

「……？」

「赤石様」

「ひっ！ は——はい！」

顔を上げるヒスイさん。

気持ち悪いくらい、満面の笑みだった。

震え上がるテラが、すぐさまあたしの腕に抱き付く。

「お忘れ下さい」

「……えっ？」

「ダイヤのことは、お忘れください」

「え……いや、でも——」

「お忘れください」

………
「恐エ——！！」

「………。はい………」

有無を言わせないヒスイさんの圧力により、あたしは顔面蒼白になってブンブン頷いた。

テラも何故か、あたしに合わせて頷いている。

……もちろん、顔面蒼白で。

「さて、私は洗濯をしまいります。テラ、手伝ってくれるかな？」

「ううっ！？ あーっ、ううっ、あー！」

懇願するような目付きで、テラがあたしを見た。

すまん、テラ。

行け。

「テーラあ」

「……っー」

テラは、絶望を絵に描いたような表情で、トボトボとヒスイさんのもとへ向かって行った。

さらば、小さき友よ。

「まあでも……ヒスイさんの様子なら……死んではなさそうだな」

死んでいたら、「私が殺したかった……！」とでも言いそうな感じだったしね。

よかったよかった。

「さーてー。イチーとチョコの言う通り、もう一度寝とくかあ」

ふあ、と欠伸が漏れる。

あれだけ寝たくせに、結局あたしはまだ眠たいみたい。

よく眠たくなるもんだと苦笑してしまう。

あたしは寢室に向かい、すぐさまベットへ潜り込む。

数分としない内に眠気に襲われる——どうやら、自分で気付かなかっただけで、まだまだ疲れが残っていたのかな？

今日一日は、やっぱり大人しくしといたほうがいいみたいだ……。

暖かい日差しを受けながら、あたしは柔らかなベットの上。

夢見心地で幸せそうに眠りについたのであった。

——夢だ。

ハッキリした意識で、あたしはすぐさまそれを理解した。

……夢をみながら、『これは夢なんだ』と理解することって、たまにあるよね。

難しいことはわからないけれど、レム睡眠とかノンレム睡眠？
とやらの関係するのだろうか。

……夢の中で、そんなことをあたしは考えた。

目の前に広がるのは、薄暗い路地裏。

城下町……かな？ 遠くに、城が見える。

あたしは、どうやら四、五歳に戻っているようだ。

窓に写る自分をみると、あたしは何故かドレスを着ていて、赤毛だった。

おかしいな……あたし、小さい頃はまだ——ああ、そうか。

あたしは気付く。

城下町、お城、幼い赤毛のあたし……ここはオフガイアで、今のあたしは姫様——ルビィ・ブレード・オフガイアなのだ。

じゃあ、もしかしたら……今見ている夢は、姫様の過去？

「お前、名はなんと言うつ？」

歳に似合わず、少し堅い、威厳を放つような喋り方。

目の前にいる、フードを被った長い灰色の髪の子は、俯きがちに言った。

「……ない……」

か細い、今にも死んでしまうような、弱々しい声。

……どこかで、聞いたことあるような……？ はて、どこで聞いたことあったんだっただか。

「ないのか。なら、私がつけよう」

「……え？」

顔を上げる、か弱い少女。

綺麗な、翡翠色の瞳だった。

「綺麗な瞳だな。よし——お前は、今日からヒスイだ。ヒスイ、歳はいくつだ？」

「えっ……えっ？ あ、えつと……た、多分……は、八歳……です」

「私の三つ上か。よし、行くぞヒスイ」

「ええっ？ あ、あの——」

戸惑いの溢れる表情で、あたし——姫様をみる少女。

——間違いない。

この子は、幼い頃のヒスイさんだ。

「私の名は、ルビィ・ブレード・オフガイアだ」

「ひっ——姫様、ですかっ？」

「そうだ。だから私は一番偉い。だからお前を城へ連れて帰る。
……私の従者になれ、ヒスイ——命令だぞ」

優しく微笑む、姫様。

「で、でも……私は……さ、災厄なんです。今は灰色ですけど……
髪なんか、真っ白で……あ、あと……獣人なんです……」

「……」

姫様は、問答無用とばかりにヒスイさんのフードを取る。

現れた、可愛い獣耳。

そしてすぐさま……手のひらを、幼きヒスイさんの真上へ掲げた。

「あ、あの——？ きゃあっ！」

いきなり、どこからか流れ落ちて来た水。

ヒスイさんの頭から直撃したそれは、灰色だった髪を……美しい白銀へと変貌させていた。

キョトンとするヒスイさん。

「濡れてしまったな。城へ行くか」

「あなたが——じゃなくて、姫様がやったんでしょう！ それに

あたしっ……こんな髪じゃ——」

「どこが悪いんだ？」

ヒスイさんの言葉を遮るようにして、姫様は力強く言い放つ。

「なにが悪い。それにお前は白ではなく、白銀じゃないか」

「……白に……近いです……」

「そのどこが悪い？」

「……。気持ち悪い、でしょう？」

「いいや、綺麗だ。私は羨ましいな」

「……嘘を言わないで下さい……」

うなだれるヒスイさんを、姫様は無表情で見つめた。

そして。

「いいや、綺麗だ」

「……」

「私はこの国で一番偉い。王族で、姫で、魔術師だから。その私が綺麗と言ったら、すべて綺麗なんだ」

……すごい自信。

みんなが、これはミカンですと言っても、姫様がスイカだと言うならスイカになる……みたいな感じがする。

でも、なぜだろう。

明らかに偉そうな発言なのに、そんな雰囲気漂わせない。

……むしろ、あたたかい、気がする。

「行くぞ、ヒスイ。一緒に風呂に入ろう」

「え……ええ！？」

「早く立て。また水を浴びたいのか？」

「！！ た、立ちますっ」

立ち上がるヒスイさん……姫様より三歳上ということもあってか、身長が少し高い。

姫様はヒスイさんを見上げて、ほほ笑みながら手を差し出した。

「ふふ。姉上が出来たみたいだ」

「！」

「私には、幼い妹しかいないからな。……さて、行くぞヒスイ」

ぎゅっと、ヒスイさんの手のひらを、握る。

控え目に握り返してくれたヒスイさんの手を見つめて、姫様は再び微笑む。

「あたたかいな。姉上がいたら、こんな感じなのだろうか」

「……妹がいたら、こんな感じなんでしょうか」

「くくつ、こんな偉そうな妹はおるまいて。……でも、これからそんな付き合いになる。わかったな、ヒスイ」

——そして。

二人は、城へ向かって歩き出した。

太陽の光で、キラキラと反射して輝く、ヒスイさんの髪。

……手は、離さないとばかりに、互いに強く握り合っていた。

——場面が変わる。

今度は、森の中。

あたし——姫様は、馬車に揺られながら、ゆっくり流れる景色を見つめ、偉そうな身なりの男の人に問い掛けるように言った。

「何故、ヒスイを連れて行つてはダメなんですか……父上」

父上——姫様のお父さん、王様？ 偉そうなでなく、めっちゃめ
ちゃ偉いじゃないか。

「トウルナ国の姫君は、毛嫌いするほど白がお嫌いらしいからな」

「——ふざけた姫君だ。たしかトウルナ国は、男でなく女が王権
を持つのでしたね」

「ああ。姫君は……たしかお前と同じ、六つのはずだ」

「……………トウルナ国は次代で終わりだな」

これこれ、と。

王様は否定をせず、苦笑して注意を促した。

「あまり刺激はしないように。……少々性格に難癖があるようだ

が、あまり相手にするなよ、ルビィ」

「……………父上も、ヒスイがお嫌いですか……………？」

一辺変わって、姫様は、子供らしい不安な表情を浮かべ……………父親である王様を上目づかいで見つめた。

そんな我が娘に、王様は柔らかくほほ笑み、頭を撫でながら呟く。

「私はむしろ、安心しているよ」

「……………？」

「ヒスイをいきなり従者に言った時は、さすがに驚いたが……………お前は姉のように頼れる存在を見つけることが出来たと、喜んでいる。母もな」

「母上も——？」

「ああ。従者でなく、私達の養子にしてしまおうかと話したりもした。……………さすがに大臣に怒られてダメだったが」

くくつ、と笑う王様。

「……そうですか」

そんな王様を見てか、ホッと息を吐く姫様。

相当安心したのだろう……警戒心のない、素直なほほ笑みを広げていた。

……なんて、優しい父親だろう。

王様の、すべてを包み込むような……あたたかい雰囲気は、間違いないく姫様に受け継がれている。

「そうだ父上、聞いてください。この間ヒスイに、姉上と呼んでいいか聞いたんです」

「即答で断られたか」

「はい。ムカついたので、耳をかじってやりました」

ハハハ、と響く王様の笑い声。

……言葉は堅いにしろ、和みのある会話だ。

ああ、たしかに親子なんだなあ、なんて。

そう思える風景だった。

——再び、場面が変わる。

「父上」

「ん、どうしたルビィ」

「この前、トウルナ国の帰りで出会った賊の件です。幼い子供をさらい、身売りを商売にしていたのですよね」

姫様は王様を見上げ、確認を取るように言った。

王様は……次に娘が何を言うか予想しているのだろう、包み込むような暖かさでほほ笑む。

「保護した子供の中に……一人、身寄りがないと聞きました」

「ああ。白に近い金髪の、銀色をした瞳を持つ……綺麗な少年だ。お前の一つ上——七歳らしいな」

「……父上」

「私は止めないし、嫌だとも思わない。まずは実際会って、どんな子が見ておいで」

姫様は照れたように笑う。

そして、コクリと頷いては、すぐさま向かった。

「——おい」

「……」

「おい、聞いているのか」

「……」

兵士達が使っような、部屋の二つ。

さっそくやってきた姫様は、ベットで蹲る少年を見下ろして、返事すら返さない少年へとひたすら言葉を投げ掛けていた。

——誰だか、わかる気がする……かも。

白に近い金髪——プラチナブロンドの髪に、銀色に輝く美しい瞳。

あたしの知る中では、一人しかいない。

「おい、いつまで狸寝入りをしている」

「……なんだよ」

「やっと口を聞いたか。次は顔を出せ、いつまでも毛布にくるまるな」

「……うるさい。寄るな、どっかに行け」

……いや、間違いだっただかも。

あたしが思い付く人は、姫様に対してこんな言葉は吐けないような奴だし。

「うるさいのは認める。だが、私はお前に付き纏うし、どこにも行かない」

「……しつこい」

「よく言われる」

「……」

「なあ、お前銀色の瞳をしているんだってな。死神一族の者か？」

「……デリケートな質問を、さも普通の質問みたいに言うな」

「オブラートに包んでやっただろう」

「今のは直球って言うんだよ」

コントを見ているようだった。

……しかし、死神一族……？ 随分と物騒な名前の一族だな、まったく聞いたことがないぞ。

「お前、名は」

「……あるわけないだろ」

「捨てられたのか」

「……だからデリケートな質問をするな……」

「ポイされたのか？」

「……。オブラートどころか、今は逆に、傷口を抉るって言うんだよ……」

はあ、と。

溜め息とともに、くるまっていた少年が……姿をあらわした。

姫様は目を見開いたが、途端に笑顔になる。

「ほお。本当に銀色だ。綺麗な色だな」

「……！」

——間違いなかった。

サラサラとした美しいプラチナブロンド——ダイヤモンドのように光るキラキラとした瞳——透き通るような白い肌——間違える方が、逆におかしい。

この子は——幼い頃の、ダイヤだ。

ダイヤは姫様を見た途端、目を見開いたまま、固まってしまった。しかし、真っ白な頬が……徐々に紅く染まる。

固まるダイヤに、首を傾げる姫様。

ハッとしたダイヤは、顔をそらし、誤魔化すように言った。

「が……餓鬼かよ……」

「お前も餓鬼だろう」

「……喋り方が年寄りくさい」

今のダイヤとは思えないくらい、ハッキリとした物言いだった。

姫様はムツとしながらも、言葉を返す。

「失礼な。それより、お前名前がないんだっとな」

「……それが？」

「そうだな……よし、お前は今日からダイヤだ。よしダイヤ、風呂に入ろう。一緒に」

「……、一緒に！？ まっ、待て……ちよっ」

「私はお前の一つ下だ。兄上と呼んでいいか？」

「絶対嫌だ」

「……」

「つてエー！　なんで噛むんだよ！？」

「即答したからだ」

ヒスイさんの時同様、手を繋いで歩いていく姫様。

……多分ダイヤは、この頃から姫様が好きだったんだね。

胃がギュツとなる。

夢なんだから、そんなはずないんだけど。

そしてまた、場面が変わる――

「この金髪ッ!!」

「やんのかこの白髪オンナッ!」

「また喧嘩してるのか、お前ら。今度はいったいなんなんだ?」

豪華な部屋の中。

戻って来るなり聞こえるその言い合いに、姫様は慣れた感じで間へ乱入していく。

「だって姫様っ! このクソ金髪、姫様のこと『信用出来ない』なんて言っんですよっ!?!」

「それはお前に——い、いやっ……そうだよ! 信用出来ないね! 俺は王族が大嫌いなんだ!」

「姫様に謝れこのくそチビ!」

「うるさい! この犬っころ!!」

「私は狼だ!!」

だんだんヒートアップしていく二人。

姫様は一瞬呆然として、か細く……呟くように言った。

「……そうか……」

「……!」

「信用……してないか……そう、だな。たしかに王族は……信用できないな……悪かったな……」

「っ……あ」

くるり。

二人に背を向けて、歩き出す姫様の瞳には……うつすらと涙が浮かんでいた。

……悔しいのだろうか、それとも、悲しいのだろうか。

あたしには、わからなかった。

——ただ。

「ルビィ！」

部屋を出て、長い廊下を歩く姫様を呼び止める、ダイヤの声。

「あ——あの……さっ、さっきのは……違う」

「——私、頑張るぞ。お前が信じることの出来るような、立派で偉い王族になってみせる。もうちょっとだけ、待っていてくれないだろうか」

堅い決意。

姫様はダイヤでなく、自分が写る窓を見て、そう言った。

それは誰のためなのか、それは責任からそう思うのか……まったくわからない。

「——うん。なってくれ、信用出来るような……王族に」

ただ、そう呟いたダイヤの言葉に……姫様は明るく頷いていた。

おでこに、ヒンヤリとした……冷たい感覚。

夢から覚めた、あたしは瞬時に理解する。

おでこに置かれていたのは、ヒスイさんの手のひらだった。

あたしはゆっくりと瞬きを繰り返してから、笑う。

「……おはようございます……あたし、熱なんかありませんよ……」

「ハハッ。つい、姫様と同じことをしてしまいました」

「……姫様と？」

姫様は、よく風邪を引く人だったのだろうか。

あたしはもそつと起き上がりながら、そんなことを思う。

「ええ。姫様は、よく寝起きにそうされるのが、好きだったんです」

「……？」

「安心……するんでしょうね。責任感が並外れて強い上、重圧ばかりのお方でしたから。風邪を召された時なんか、ヒドいものでした」

その時のことを、思い出したかのように言うヒスイさん。

サラリと流れる前髪を耳に掛けて、その翡翠の瞳で、あたしを見つめる。

「“姉上”。姫様は、必ず風邪の時……私をそう呼んでおりました」

「！」

「頼りがあって、神々しくて、カッコいいのに……時々可愛くて、

甘えん坊で、手のつけられないお方です」

ヒスイさんはクスクス笑う。

……そうか、姫様は、本当は寂しかったんだな。

そりゃそうだよな、弱音が吐けない立場にいるんだから……だから、ヒスイさんやダイヤを、招き入れたんだろうか。

心の許せる、誰かが欲しくて。

……それとも、捨てられて寂しそうな瞳が見ていらなくて、招き入れたのかな。

こればかりは、聞いてみないとわからないや。

「姫様はですね、絶対に、“頼む”とは言わないんです」

「えっ」

「なにかを任せる時は、命令なんですよ」

だから、頼むなんて言ったらバレちゃうんです。

ヒスイさんはそう言って、美しくほほ笑んだ。

——ああ、そういうことだったのか。

ダイヤにバレたのも、兵士にバレたのも、“頼む”って言ったから。

言わなくても、頼むような仕草をした時点で、ダメなんだなきっと。

あたしは苦笑する。

なんだかなあ。

「さ、お二人も帰って来てますよ。夕食の準備も整ってますから、行きましょう」

「へへ……はい」

あたしは頭を掻いた。

なんだか、さらに遠い人だと認識してしまったみたい。

カッコいいなあ、マジで……あんな風になりたいよ。

密かに劣等感を抱きながら、あたしはヒスイさんとともに、リビングへ向かう。

ちつくしょー、どうやったら姫様みたいに強くなれるんだろ。

本当、悔しい限りだよ……。

第一話 ？

「さて、バルバトスの里についてですが」

夕食を終えた、あたし達。

先ほどまで談笑していた空気から一辺、あたりが真剣な空気に変わる……。

ヒスイさんの変わりように、あたし達三人は生唾を飲んで固まった——なんてこともなく。

逆に、キョートンとしていた。

……ていうか、話をぶったぎられたよ。

あたしはちょうど今、“もしもチョコが手のつけられないほどブリッ子だったら”、という仮定の真似っ子をしていたところで……。

よく漫画とかでも見掛ける、『きゃるんっ』なんて効果音が付きそうな、悩ましいポーズをしていた。

そんな、薄ら寒いポーズで固まったまま、あたしはヒスイさんを見る。

……そりゃないよ、ヒスイさん……。

せめて、台詞を言うところまで待っていて欲しかったな。

「カエン、そろそろ戻れ。頬が引きつって来た」

「我慢するくらいなら笑ってよ」

「うくっ……！ んんっ、え……えーっと。バルバトスの里って、どんな所なんですか？」

「今笑ってくれた？　ありがとうチョコ、愛してる」

自動保護システムが搭載されているのか。

横にいたITCHーに、加減なく抓られた。

……いいじゃないかよ、女の子同士なんだから。

「バルバトスの里。先に、行き方について説明をします。……バルバトスの里は、まず、大陸が違います」

「えっ、じゃあ、ものすごい遠いんじゃない……」

「確かに、歩いたらかなりの距離です。しかしこの大陸の外側までは、テラに乗ってひとつとびですから」

ヒスイさんは、古ぼけた世界地図らしきものを見してくれた。

しかもなんと大陸の名称が、日本語で書かれているじゃありませんか。

「以前、表から来られた方が残っていた物です」と、ヒスイさんは説明してくれる。

その地図には、右側に横にも縦にもデカイ——地図半分埋まっているのではないかと思われる、大陸があった。

大陸の名称はカタカナで、シンルウ。

よく見れば、そのシンルウとか言う大陸の半分……オフガイアと書いてあるではないか。

あまりにもデカすぎて、目が飛び出しそうになった。

「こちら左側の、上にあるほぼ丸い大陸を見てください。ランメイ大陸——ここどこかに、バルバトスの里があります」

「……え？ どこかに？」

「はい……実はこの大陸、国という区切りがないんです。様々な里の集まりで、新しい里が出来たり消えたり——場所が変わったり

する、特殊な大陸なんですよ」

そ、そんな場所で……どうやってバルバトスの里を見つけると。

オフガイアの半分はありそうなランメイ大陸——どう考えても、
見つけるのは無理って言いたくなる。

大体、まずその大陸に行くには、どうしたらいいんだ？ テラに
乗って行くには、少し遠すぎる気がする。

その疑問に気付いたのか、「まずこの大陸に行くには」と、ヒス
イさんがオフガイアのある端っ子のほうを指差した。

「ここに、今はほぼ使われていない道……遺跡があります」

「道……歩くんですか？」

ITCHーが問う。

「ええ。シンルウからランメイへと続く、地下空洞が遺跡にあるのです」

「……とりあえず遺跡まではテラに乗って、そこから歩くと……何日も掛かりそうだ」

「地下だから、食べ物も採取出来ませんね……持って行くだけじゃ足りなさそうです」

「っていうか、水も絶対足りないよ」

「ご心配いりません。歩くと言いましたが、それは数メートルだけです。あとは——途中までトロツコで行きます」

ヒスイさんは、とある一枚の紙を地図の横に置いた。

……何かの、モンスターの絵？

「ドングリ。身体がデカくお酒好き、足がとてつもなく早い——別物運び屋とも呼ばれる、気のいいモンスターです。彼が、トロツ

「コを押して走ります」

「こ……怖そう。あたし目え見れない気がする……」

「彼にお酒をプレゼントすれば、必ず運んでくれますよ。温厚なので、滞りなく渡れば…… たったの三日でつきます」

「わ、早いですね！」

「なるほどな……」

ふむふむと納得する二人。

「ちょ、怖くないの？ この顔だよ？ デカいんだよ？ 足早いんだよ？ しかも地下だから暗いし、三日も掛かるんだよ？ え、あたしだけ怖いのかな。」

「ランメイ大陸にいたら、あとは根気よく探すだけです。様々な里へ赴き、人に聞いてみてください。バルバトスの里は昔からある有名な里ですから、そんなに難しくないはずです」

「——えっ？ ヒスイさん、行かないの!？」

嘘でしょっ！　あたしは途端に、不安そうな表情を広げる。

そんなあたしに、ヒスイさんは嬉しそうな表情を浮かべつつも……
残念そうに呟いた。

「行きたいのは山々なんですけど……私も、色々探らねばならない
ことがあります。しかしかわりに、テラを預けます」

「……え、テラを？」

「はい。彼はこう見えても、かなり貴重なブラックドラゴン……
力は、私が保証します」

いつの間にかあたしの真横に座っていたテラは、あたしを見つめ
て「うーっ！」と自信満々に笑った。

でも、確かにテラがいてくれると助かるかも。

飛行手段はもちろん、あの破壊光線……それだけあれば充分すぎる。

「それに、テラさえいれば、言葉の持たないモンスターとの意思疎通が進みやすいですし」

「……？ いや、でも、テラとモンスターだけが会話出来ても……あだし達とテラが会話出来ないっていうか」

うん、問題はそこなんだよね。

「あははっ、そうでしたね。ご安心ください、若干聞きづらいですが……テラも言葉を話せますから。普段は面倒で使っていないだけで」

そう言って、ヒスイさんはテラに目配せをした。

あだし達はいつぺんに、テラへ注目する。

……少し緊張しているのだろうか、表情が堅くなったが、テラはヒスイさんを指差して——口を開いた。

「し……すい」

「おおっ！ テラが喋った！」

「わ〜！ 感動です！」

「……なかなか可愛いな」

テラが言葉を発したという感動に、あたし達は盛り上がる。

「惜しいぞテラ。ヒ、だ」

「し、し、し……ひ？ すい」

「そうそう。じゃあ黄泉様の——千世子」

「ちょ……じっ。」

「あ！ あたしと同じ呼び方！」

「じゃあ青蓮寺様の、櫓」

「い……いち？」

「テラ、イッチーって呼んでみ？」

「い、い……いっちい」

「上出来っ！ あたしとおそろいだあ！」

わー！ と喜びながら、あたしはテラに抱き付く。

テラは嬉しそうに、キャツキャツと喜んだ。

そして次に、「赤石様のカエンは？」とヒスイさんが言った。

テラは満面の笑みで、それはもう元気よく、ハキハキと叫ぶ。

「ルビィー！！」

「
……」
「
……」
「
……」
「
……」

一同沈黙した。

テラは未だにニコニコ笑っている。

え、えーっと。

発音もよく、たしかに今までのどの名前よりも、なんていうか……
…上出来だったんだけど。

根本的に……違うと言うか。

「あー……違うぞ、テラ。赤石様はルビィでなく、カエン、だ。」

ほら」

「ルビィ！」

「カ、エ、ン」

「？ うーう！ ルビィ！」

「違うじゃないだろ！ テラ、この方の名前は……」

「ルビィ！」

「だーっ！」

あのヒスイさんが、お手上げサインを出した。

……ちよ、なんであたしだけ片割れの名前なんですか。

いや、同じ顔だからこそか？ そんなアホな。

テラはあたし達の気持ちなどつゆ知らず……無邪気に喜びながら、

あたしに抱き付いて「ルビィ！」と何回も叫んだ。

……ま、いつか。

「あんなテラ」

「——あー、いいですよ、あたしは。ほら、なんかテラも喜んでるし……どうせ同じ顔ですから」

「し、しかし」

「うーっ！ ルビィ！」

「……はああ……」

どうやらヒスイさんも諦めたようだ。

「……とにかく、最低限の言葉は喋れます。な、テラ」

「しゃべる、できる」

「と、この様に片言にはなりますが……旅をしながら、時々テラに言葉を教えてやってください」

「しゃべる、にがい、できる、むり」

「？ ヒスイさん、今のは？」

「あー、難しい言葉は出来ない、です。喋る……つまり言葉で、苦いは嫌いかわからないとか、そういう意味だと思います。あとは、出来ると無理を合わせて、出来ない。ですかね」

「はあん」

なかなか面白い。

なぞなぞみたいだ。

「まあ、こんな感じですが……テラを使えば、なんとなくわかると思います」

「わかりました！ テラ、頑張ろうね」

「むり」

「早いよ」

まあ、テラの言葉レッスンはおいおいやっていくとしよう……。

チョコは教えるのが得意だし、基本は任せてしまおうかな。

あたし達はそんな感じで、旅の注意点やなんやらをヒスイさんに伝授してもらった。

人は簡単に信用するとか、火はなるべく昼間に焚かないようにとか、そんなことを色々。

まあ……大抵はイチチーやチョコが気付いてくれそうな範囲だったので、あたしは二人に任せる事に。

任せてばっかだな、ハハハ。

でも頼りになる二人さえいれば、あたしはなんとかなりそうな気がした。

過保護なお父さんとお母さんですから。

「さ。ひとまず明日は、近くにある安全な町に出かけましょう。
旅の道具を揃えなくては」

「どのくらい安全ですか？ あたし、怖いのも無理ですけど」

「少なくとも、オフガイアよりは安全です」

ハハッと冗談めかして、笑うヒスイさん。

…… オフガイアよりは、ね。

オフガイアよりも安全な所はない、って言われていた町だったの
に…… 今はオフガイア以外はほぼ安全、なんだな。

姫様が聞いたら、悲しみそうだな。

「あ、そうだ。赤石様」

「？ はい」

ヒスイさんは思い出したように、あたしへなにかを渡した。

あたしは手渡されたそれを、マジマジと見つめる。

……トランプ？ だね、どこからどうみても。

今から遊ぶつもりなのだろうか。

疑問符を浮かべたまま、あたしはヒスイさんとトランプを交互に見やる。

ヒスイさんは、ニッと笑って……。

「資金稼ぎは、赤石様に掛かっていますよ」

……と。

ヒスイさんはそれだけを呟き——ウインクを返して、自室へ戻って行ったのだった。

——そして翌日。

「異国の少女、これで五十連勝だあーっ！ 次なる挑戦者はあー！」

？……うおーっ！　なんとなんと、世界に名を轟かせるあの盗賊の一味、“ゴンザレス”幹部がやってきたあ！！　次こそ敗北かー！？」

広場の真中。

小さなテーブルを挟み、真っ昼間っからトランプで賭け事をして
いる……十八歳の少女——そう、あたしだ。

ここに来て約一時間、あたしは未だにお金を稼いでいた。

充分すぎるほどお金は稼いだのに、終わらないこのギャンブル。

なぜ止めないのかって？　続々と挑戦者が現れるからね！　止め
たくても止めさせてくれないんだよ！！

あまりに長いこと稼いでいるので、これでは買い物に行けないと
結論に至ったあたし達四人と一匹。

しかたないか……、なんて呟くヒスイさん。

チョコとテラを連れて、あたしがギャンブルをしている間……買い出しに行ってもらうことにした。

一応一人じゃあたしも危険なので、ヒスイさんの提案で側にイッチーがいる。

——完全無敗の若きギャンブラー！

この一時間で、あたしはかなり名が売れてしまっただろう。

赤い帽子を深くまで被っているの、あたしだとは多分バレていない。

同じ赤なら、万が一髪が覗いても分かりにくいから、安心だしね。

「さあ、ゴンザレス一味幹部バーサス、突如現れた巨星の星——完全無敵の紅きカエン放射！！」

エエエエエエエ！？

変なあだ名が出来上がった——っ！！

イチーも笑うなッてばコノヤロォ!!

……グスン。

広まったらどうしよう。

いや、名前と火炎放射を掛けてもらって、非常にありがたいんだけどね。

どうせ通り名が出来てしまうなら、頼むからもっとクールなやつがいいよ。

まあ、名前の時点でクールどころか、ヒートアップな感じがしますけどね。

……心境的にはかなりクールダウンしてきてますけど。

「頑張れよ。……紅きカエン放射」

「ありがとうイチー。ちなみに無表情が不自然になってるよ」

皮肉を込めて言った。

「よお、嬢ちゃん。途中からずっと見てたけど、やるな」

「……それはドーモ」

「俺は……さっきも言った通り、盗賊の一味の幹部だ。主に情報収集がメイン」

「へーえ」

「くくつ、いい性格してやがる。名前はホッパー……どうだい嬢ちゃん、少し飽きてきたろ？ 金じゃなくて、情報交換ってのはいかがかな」

最後の方は、耳を澄まさなければ聞こえないくらいだった。

「情報交換……?」

あたしも同じく、小さな声で呟き返す。

話にのってきたと勘違いしたのか、ホッパーは目を光らせる。

「そ。俺が知りたいのは、あんたの正体」

「……正体?」

「ああ。なあ嬢ちゃん、あんたどうやらとある有名人の片割らしいじゃねえか。だが、ただの偽りじゃねえかって話もある。それは、嘘か真か……真実を」

「……!」

こ、こいつ……!

あたしは慌ててイチーを見る。

一部始終をしつかり聞いていたイチーは、あたしのかわりに男と商談をし始めた。

「じゃあ、アンタ……バルバトスの里が今、どこの辺にあるか知ってる？」

「バルバトス？ ああ……俺は、その村長と仲がいい。だから大体の行動パターンは把握してる。ただし、確実じゃないな。もちろん他の奴等より当てる自信はあるが」

くいつと眉をひそめ、どうする？ とでも言いたげにするホッパ
！。

……探すアテは最初からないんだし、嘘でもいいから、参考にはほしい所だ。

あたしはイチーと頷きあい、ホッパーに言った。

「交渉成立。嘔吐いたら、地の果てまで探して首絞めてやるから」
「くつくつく、恐エ嬢ちゃんだ」

よし、と頷いて、ディーラー役の人にカードを配ってもらった。

このカードゲームの種目は……皆さんご存じの通り——あの有名な、ポーカード。

役を作るだけの、単純だけど、奥の深いゲーム……ハマればハマるほど、一番恐ろしいカードゲームである。

「嬢ちゃん、一発勝負……いくかい？」

「——いいよ、やってやろうじゃない」

あたしはニッと笑う。

余裕そうに見えて、そうじゃない。

勝敗なんてまったくわからないよ——イカサマでもないかぎり

はね。

……でも、あたしはまだイカサマを一回もしていない。

すべて運と、ちよこつとの観察力。

……負けるわけにはいかないよ、あたし。

三大トランプゲーム、心理戦のポーカー。

それを運でここまで上り詰めたんだから、いける、大丈夫だ。

「それじゃあお二方、手札を手にとってください」

——あたし達は、睨み合いながら……手札を手取る。

そして、同時に視線を逸らし、手札を眺めた。

「……………」

10、J、Q、Kのハートと……ダイヤのA！

ばっかやろー！！　ダイヤ、お前オフガイアでもここでもなかなか邪魔してくれるな！

しかし、このまま出しても、ストレートでそれなりの役……だが一発勝負なのだから、自信のある役を出したい所だ。

——ストレート。

これは、連続で数字が五枚並んでる時の役だ。

スート——つまり、模様のことだが、これはバラバラでもぶつちやけかまわない。

かまわない、のだけど。

……問題は、この数。

あたしの今一番の、悩みの種。

一般的ポーカー最強の役——ロイヤルストレートフラッシュ。

これは、10、J、Q、K、Aという数字が絶対条件で……尚且つ同じスート——模様でないといけない。

あたしが出したのは、Aだけダイヤの非常に惜しい模様なわけ。

これがダイヤでなく、ハートだったなら——！

だから、ダイヤのバカヤローと思ったのである。

——どうしたものか。

変えるべき？ 当たれば大勝利、当たらなければ……うつ。

でもこのままいっても、勝つかどうかはわからない——！

「……っ」

「一枚変える」

「！」

「変えたのは、とある模様のエース」

ニツと笑いながら、そう呟くホッパー。

……とある模様の、エース……あたしが今一番ほしいカードかもしれない。

迷いすぎて、どんな役かを見破られてしまった。

嘘か、真か。

信じるか、否か。

どうする……どうする、あたし。

「——あたしも一枚変える」

……ダイヤのエースを、あたしは手放した。

手札に敵は混ぜたくない、という勘——運に任せて。

「さあさあ皆様これは見物！ どちらが勝つかあ！？」

あたし達は、それぞれ変えたカードを手に取る。

「——そうだ、今持つてる四枚の手札を見せあおうか」

「！」

「俺は、クローバーの10、J、Q、K。クローバーのAが
出れば、ロイヤルストレートフラッシュだ」

なんてこつたい——！

ならば、もし、さっき言っていたどれかの模様のエースは……ハ
ートかクラブ！

向こうもあたしも、半々の掛け。

「嬢ちゃんは？」

「ハートの、同じ数字。捨てたのは……どれかのエース」

「ふうーう」

つまり、ホッパーから見たら……あたしはダイヤかクローバーのどちらかを捨てた、という風に見えるわけで。

ああっ！　まだるっこしい！！

「俺が捨てたカードは」

「っ！」

「……クラブ」

——クラブ。

それが本当なら、山の中——もしくは手中にあるこの一枚に、ハートある！

「あたしは」

「……」

「ダイヤのエース」

苦しそうな笑みを浮かべる。

ドキドキしたんだろう、冷や汗が滲んでいた。

「俺はクローバーのエースを求めて」

「……あたしはハートのエースを求めて」

緊張が高まる中。

あたし達は——同時に手札を裏返した。

結果は——

「んんーっ！　ざあーんねえええんっ！！」

司会役の叫び声……あたしは苦笑で、溜め息を零す。

「——まあまた少女の大勝利く！！ いやあ本当に残念だ！
あのゴンザレス幹部も負けてしまったアー！」

……そう、あたしの勝ちだ。

出たのはハートのエース……あたしの完全勝利。

「あーあつ！ くそつ！ 負けたあーっ！！」

目に見えて悔しそうにしているホッパーを見やってから、イッチ
ーと笑顔でハイタッチした。

いやあマジでドキドキした！ 今日一番のドッキリだったよ。

あたしは区切りがついたつばいこの瞬間を狙って、イッチーとホ
ッパーの腕を取り、その場を走り去る。

あたしの勝ちなんだから、ちゃあんといただかなくちゃね！
情
報を！！

「よし……この辺でいつか」

「あーっ、くそお。悔しいー！」

「ま、あたしの運が人一倍よかったってことかな」

「ちえーっ！！……ま、勝負は勝負だ。くれてやるよ」

いまだ悔しそうにしながらも、ホッパーは「約束だ」と呟いた。

「バルバトスの里。あいつらは、中の方に里を置かない。絶対外側だ」

「外側？」

「そう。そして季節により反時計回りにずれるから……今は、地図で見ると一番左らへんにいるはずだな」

「それはたしかか？」

イチーが用心深く問う。

「最初に言った通り、確信はねえ。だが、里が消え失せてないかぎり、間違いなくその辺にいるはずだぜ」

それと。

ホッパーはそう言葉を続ける。

「あいつらはそれなりに有名な里だ。ここはバルバトスの里ですか？　なんて絶対に聞くなよ。NOって答えるのが関の山だ」

「じゃあなんて聞けばいいのさ？」

「あいつらが反時計回りに——逆に渡り続けるんだから、つまり？」

「ストバルバの里。逆に読めってことか」

「ごっつ名答」

パチパチパチ。

渴いた拍手をあたし達に浴びせ、ホッパーはくると背を向けて
……歩きだした。

「いつかまた会えたら、もっかい勝負しような」

「——もちろん！」

ヒラヒラ手を振るホッパー。

「俺の仲間伝えるわー！ 紅き力エン放射ー！」

「やかましいわーっ!」

最後の最後で、爆弾を落としていくホッパー。

……アンタこそ、いい性格してるよ、ホント。

しかし、なにはともあれ。

なかなか期待以上の情報を入手したあたし達。

これで旅も順調に進みそうだ……金も溜まったし——って。

「お金エ!」

も、持ってくるの……忘れてた。

トホホ。

しかし。

がつくりするあたしの横――

含み笑いをしながら、イチチーがお金をちゃっかり持ってきていたことは……後から知るのでした。

——その頃、私とヒスイさん、テラくんは。

「えっ、召喚獣を身体にとり憑かせる!？」

カエンちゃんの稼いだ資金で、旅に必要な持ち物を買っていました。

荷物はテラくんや私が持ち、ヒスイさんが見定め、買うという役割分担で。

その途中、私は魔導書に記されていた“身体に召喚獣を入れ、とつもない力を手に入れる”という項目について、ヒスイさんからアドバイスを伺えないかと考え、質問していました。

……予想通り、といえますか……やはりよろしくない項目らしいです。

魔導書にも、魔方陣と呪文だけが記されているだけで、詳しい内容や説明は書いてありませんでした。

ただ、命が惜しくなく周りに敵しかいない時に使え、と。

それだけしか。

「……何故？」

「もちろん、いざとなったら使えるようにです」

私は迷いなく、ヒスイさんの目を見ました。

「……黄泉様も、青蓮寺様もですが……」

「？」

「何故……そこまで、危険を犯せるのですか？ 命に関わるんですよ」

言い聞かせるように、また、思い直せと言わんばかりに。

まっすぐに美しい翡翠の瞳を、私に向けたまま……ヒスイさんは眉を下げて言いました。

でも、この答えは、ヒスイさんのほうが……一番よく理解しているはず。

昨日の夜、カエンちゃんに聞いたんですから。

「ヒスイさんは」

「……」

「お姫様が、今でも大切なんですね？ カエンちゃんから聞きました……あれは並大抵の信頼じゃない、と。まるで神様のような扱いだと」

たとえお姫様が世界征服を謀ろうとも、私はついて行くのです。

そう言っていたと、カエンちゃんが教えてくれました。

私や櫛くんは……それとはまた違い、むしろ行いを正させようとするでしょう。

ただ側にいて、何度も言い聞かせるんだと思います。

……またそれも、大切だからこそ。

そしてヒスイさんも、同じ気持ちから来てるんだと思います。

……考え方は違うのは、人それぞれだから。

どちらが正しいとかではなく、どちらも正しい……私はそう考えます。

私の強い意志が伝わったのか……。

ヒスイさんは、手に持っていた松明を一旦商品棚に戻し、私の目を言いました。

「たしかに、お気持ちは痛いほどわかります。自分と同じだから何も言えませんが、逆に、同じだからこそ言えるのです」

「同じだからこそ、ですか？」

「そうです」

ヒスイさんは頷き、溜め息混じりに話始めます。

「姫様が、八歳の頃です。ええと……お二人には話しましたっけ」

「あ、はい。悪者を退治されたんですね」

「はい。……その時のことですが、私……致命傷を負ってしまいました」

「えっ！」

ヒスイさんは、その怪我が今でも残っているのだと教えてくれました。

普通……怪我だったら魔法で治すので、アトは残らないはずなんですが……。

しかし私は、魔導書に書かれていたことを思い出します。

——もし、魔法で傷付けられた、しかも強い呪いの掛かった魔法で負ってしまった場合。

普通の魔法では、傷が治らないことが多く、治ったとしても……傷アトが残る。

そう記されてありました。

しかし……私実は、ヒスイさんの傷を治すために、一度背中を見
てるのです。

しかし。

あるはずの傷アトはそこにはなく、かわりにあつたのは――目を
見張るような、美しい三本の花が描かれた刺青でした。

真ん中の花を包むようにして、立派にそびえ立つ一番背の高い真
っ白な花と、寄り添うようにして花びらを開く黄色の花。

そしてその真ん中の花は……一番小さいながらも、どっしり構え
立派に咲き誇る、美しく輝く真っ赤な薔薇。

ヒスイさんは、この意味をあの時教えてくれました。

私は思い出すようにして、それを口にします。

「白い花はヒスイさんで、黄色の花があの時戦ったダイヤさん。
……真ん中が、お姫様……ですよね」

「……そうです」

あの時言った、ヒスイさんの言葉。

『たしかにダイヤとはしょっちゅう喧嘩をし、仲は悪かったです。それでも、一緒に姫様を側で守り続けた……大切な弟のような存在です。私がない時、姫様を任せられるのはダイヤだけでしたし、逆も然りでした。……私はそれを、ダイヤに言うことは一生ありませんが……私は形として、それを残しているのです』

深い信頼、聞いた時そう思いました。

ヒスイちゃんがお姫様の妹さんと戦っている時も、ダイヤさんに邪魔をされて戦っていましたが、暴言を吐きつつ手抜き感を感じました。

もちろん、ダイヤさんも。

二人とも、仲はよくないけれど……共通する大切な人のために。言葉にはしない信頼を、感じているのだと思いました。

しかし……それはいいのですが、傷アト……では、ありませんよね？

首を傾げて不思議がる私に、ヒスイさんは笑いながら言いました。

「その、戦いで負った傷は……それはそれは強烈な呪いで。治せتانですが、アトは残ったままだったんです」

「でも……」

「姫様に、アトを隠していただいたんです。姫様は……最強の魔術師ですからね、わけないです」

ハハッと笑うヒスイさん。

続けて言いました。

「……傷のかわりに、私の要望でこの絵をいれてもらったんですが……」

「……？」

「傷アトを見た途端、なんと姫様が……泣いてしまわれたんです」

一切涙を見せない、あの姫様が。

そう呟くヒスイさんは、今この瞬間もお姫様を目の前にしているかのように……困った笑みをしていました。

「心臓が止まるかと思いましたよ。初めてでしたからね、涙を見るのは……」

「……」

「あんなに頼りになって誇らしい、強いお方が……私の傷アトを見て、涙を流した時——私わかったんです。私のことを、大切に思ってくれて……そんな私を失うかもしれない恐怖」

翡翠の瞳を揺らめかせ——ヒスイさんは、心臓のあたりを、手で押さえました。

「この傷は、姫様を庇う時に負った傷アトです。私にとっては誇るべき、勲章ですが……相手は、姫様にとっては違います」

「責任を……感じてしまうから、ですか？」

「そうです。……それは、絶対に治りのしない、傷になってしまふ。もし私が死んでいたら、私は姫様に一生治らない——心の傷を負わせるところだったのです」

誰かが死ぬということは、誰かが傷つく。

それが自分のせいだったと思えば、その傷は……決られるような痛みとして残り続ける。

私は想像しました。

もし、カエンちゃんや櫟くんが……私を庇って、命を落としてしまったら、と。

——恐ろしい、としか言えません。

自分が自分でなくなってしまう、そんな感じがしました。

でも、私は。

「私は……身勝手なんです」

ヒスイさんの綺麗な瞳……私は、何故か罪悪感を覚えてしまって、
まっすぐ見られませんでした。

だから、下を見ながらいます。

「もし、私が、二人を庇って死んでしまったとしても。死んだ私
には……そんなことわかりません。私はただ、二人を守ることがで
きればいいんです」

「黄泉様……」

「ごめんなさい、勝手すぎますよね。でも、私は……生きているだけでもうけもの、って思っんです」

だから。

「私は命を掛けて、二人を……カエンちゃんを守ります。二人の意見は聞いてあげませんっ」

私はそう、言い切りました。

ヒスイさんはポカンとしたのち、口元を押さえて笑います。

お店の散策が終わり戻ってきたテラくんも、笑うヒスイさんに合わせて嬉しそうに笑いました。

「……そう、そうですね。いや、ごめんなさい。黄泉様は案外強情な方なんだな、と思ひまして」

「えへ……えへへ」

「……わかりました。お教えします」

ヒスイさんはテラくんの頭を撫でながら。

“召喚獣を身体にいれる”ということについてを、説明しはじめました。

「——まず、注意点です。これができるのは……二種類の人しかいません」

「……二種類」

「はい。まず一つが、魔術師であること。……歴代二人のみ、です
ね」

「あと一つは……？」

「——、これは、説明が難しいです。召喚獣との相性も必要ですし、心も強くないといけません。あと……体質、いえ、潜在能力も関係します」

……潜在能力。

それは、いったいどういうことなのでしょう？

「その、潜在能力が一番難しいのですが……□で説明できるものではありませんので」

「？」

「ううん、そうですね……黄泉様は、靈魂を信じますか？」

「えっ？ 靈魂？ ……幽霊、ってことですか？」

ヒスイさんは頷いて、言葉を続けます。

「つまり、簡単に言いますと……憑きやすい方、ですね」

「！」

「見た目じゃわからないことです……やるまでは」

もし、それで……合わないのにやってしまったら。

心はバラバラになり、召喚獣その人も、“消滅”してしまう――
ヒスイさんはそう呟きました。

消滅……それは、身体のことではなく、“魂”……心のこと。

生きる屍同然になってしまう、そういうことでしょうか。

「黄泉様。もし、これを使わねばならない時がやってきたとしたら……守ってほしいことがございます」

「……はい」

「一つ——死んでも構わないと思った時。二つ——まわりに敵しかいない時。以上のことを、守ってください」

私は、ヒスイさんの瞳をまっすぐ捉え……頷きました。

「……そんな時がないことを、祈っております」

苦笑しながらもちゃんと教えてくれたヒスイさんに、私はお礼を言います。

もし私がこれを使ってしまったら、ヒスイさんにも傷を負わせてしまっただろう。

やっぱり教えるべきではなかった、と。

……本当にごめんなさい、ヒスイさん。

「あ！ いたいたあ！ チョコテラヒスイさあ〜ん！」

その声に気付き、私は勢いよく振り返ります。

そして、笑顔で言いました。

「カエンちゃん！」

ねえ、カエンちゃん。

私はカエンちゃんが、とっても大好きです。

そして、とっても大切。

櫛くんも知らないことですけど、実はカエンちゃん……私を二度助けてくれたんですよ？

小学生の頃、女子トイレで気味が悪いと苛められていた時……ヒーローのように現れたカエンちゃん。

『ヒーロー参戦っ！！』

って叫びながら……ポーズまで決めて。

多分、『参上』って言いたかったんですよね……カエンちゃんはもう、覚えていないと思いますけど。

でも、あたしにとっては、大切な思い出。

「聞いてよー！　いい情報があるんだあ！」

「え、なんですか？」

「それがなんと！」

「紅きカエン放射、っていうあだ名ができましたー」

「ぎゃあああー！ イッチーてめコラッ！！」

クスクス笑う私と櫛くん、そしてカエンちゃん。

私、頑張ります。

優しい笑顔で私を見て、ためらいもせずに触れてくれる……その手を守るために。

『えー霊体質？ 身体の中に入っちゃうってこと？ じゃあチヨコちゃん幽霊見えんの？ かあつちよいいい！！ それ頭いい幽霊隣にいれば、勉強いらなくない！？ あつ、でもあたし幽霊無理だわ！ 怖いもん。あはははは！』

いつか、使う時が……絶対来ると思います。
でもそれまでは、ずっと隣で守りますから。
安心して、笑っていてくださいね。

「んもーっ！ イッチーのおたんこナスー！！」

「ナスに失礼だろ」

「ナスは幽霊を運ぶっていいですよ、悪口に使ったらダメですよ」

「……カエン、夜、後ろには気を付けろよ」

「トイレの時はさらにお気を付けて」

「……。うわああああん！！」

絶対、守ってあげますからね。

第一話？（後書き）

小ネタ。

ホッパーの名前なんですけど、私は今、チョッパーの手帳使ってるんですよ。

CHOPPER、のCを除外したら……ホッパー？ みたいな。

ついでに一味の名前のゴンザレス、あれはゲーム『クロノ・トリガー』をやってる方ならわかるんじゃないかなーなんて。

クロノ・トリガーは最高ですよ、知る人ぞ知る名作です。

あれはラスボスを倒すタイミングによって、エンディングが全部違うんですよ。

個人的には、エンドロールが五秒で終わるやつとか、恐竜人エント、三人の反省会が大好きです。

というわけで、今回はちゃんとカエン視点に戻ります。

コロコロ変わって申し訳ありません（笑）

一応主人公はカエンですが、三人の物語なので……まあ、気にしないようにしてあげてください。

一
色
彩

第一話？

——そして。

あっという間に、買い物からすでに数日……あたし達にととうとう、冒険の日がやって来た。

「青蓮寺様の剣技も、だいぶ様になりました。黄泉様の発動速度も、申し分ありません。赤石様も元の運動神経の良さのおかげか……目立った心配はありません、テラの力も私が保証します——ですが」

「……やっぱり心配？ ヒスイさん」

前日に、何回も何回もチェックをしたあたし達。

持ち物や、敵に遭遇した場合のこと、大陸にいったらまずすることすべて……念には念をいれて。

そしてやって来た、今日この日。

迷いもなくなるくらいの快晴——申し分ないほどの旅立ち日より、幾分か心も晴れやかだ。

けれどもやっぱり、ヒスイさんは心配なのだろう——ついて行けないことを、ヒドく気にしている様子。

本音は、あたし達も経験豊富なヒスイさんについて来てほしい……でも、そういうわけにもいかない。

あたし達だけで、行くしかない。

……そう思った、だから言わずに黙っている。

だからあたし達にできるのは、ヒスイさんに心配かけないように……それだけだ。

あたしはヒスイさんの瞳を見て、ニコリと微笑む。

——そして。

「姉上」

「！」

「……心配しないで？　あたし達は大丈夫」

姫様が——ヒスイさんを、姉上と呼ぶならば。

あたしにとっても姉上で、大切な存在。

あたしは、遠回しに伝えているのだ。

姫様とは違う、それはわかってるけど……それでもあの姫様の片割れなんだから、と。

誰もが信頼する姫様の、唯一の片割れなんだ……そのあたしが簡単にやられるもんですか。

——だから。

あたしは笑う。

ふてぶてしく、笑う。

「あたしは天下の魔術師の、片割れだから！——命令する、心配するな」

「……！」

ヒスイさんは数秒、固まったかと思うと……お腹を抱えて笑い出した。

そんな豪快な笑みに、今度はあたし達がポカンとする。

ていうか、ヒスイさん。

こんな笑い方もするんだなあ……ビツクリだ。

ヒスイさんの笑いが治まるまで待つあたし。

そんな感じでしょうか、笑いも引いて来たのか、ヒスイさんはヒイヒイ言いながら、深呼吸を始めた。

あたしはそれを、未だ呆然として見つめる。

ヒスイさんが言った。

「——カエン」

「え！」

……カエン。

ヒスイさんはたしかに、そう言った。

あたしの名前を初めて、呼び捨てで呼んでくれた——聞きまちがいじゃ、ない。

「無理だけは、しないように」

「……！」

「……私は信じる……無事でいてくれることを」

そう言い切ったヒスイさん。

うん、まあ、信じてくれるなら……絶対期待を裏切らないように
しなくちゃね！

あたしは今日一番の笑みを浮かべて、ヒスイさんにグッと親指を
突き出した。

「まっかせて！ 強運だけは誰にも負けないから！！」

あたしは頷いて、テラに合図を送る。

即座にテラは反応し、あたし達から少し離れた所で、元のドラゴンの姿へと様変わりした。

先に、イッチーとチョコが乗り込む。

あたしも乗ろうとして——ふと止まり、今一度ヒスイさんのほうへ振り返った。

「行ってきます！」

「！……行ってらっしゃい」

名残惜しさが心を占める——でも、立ち止まるわけにはいかない。

これからあたしは——あたし達は、ドキドキワクワクの大冒険を始め、姫様の助けになってあげないといけないんだから。

ここで立ち止まるわけには、いかないもんね。

そりゃ本音は、ぐーたら寝続けたい……とは思っけれど。

身体がフワリとする感覚を覚えつつ、あたしは瞳を閉じる。

そして……、「ん？」と疑問に思ってから、それはそれは元気よく叫んだ。

「またかいテラアアアアア！」

……結局、背中に乗る事は叶わず。

あたしは再びテラの前足に掴まれたまま、その地を優雅に飛び立った。

ガツクリとうなだれる。

「本当にお気を付けて！ 拾い食いだけはしてはいけませんよ！」

「それヴィカにも言われたんですけどあたしそういうイメージなんですかあああああ！？」

求めた答えは返らぬまま。

大空へ飛び立ったあたしと、イチチーとチョコ、そして新たな仲間
間のテラ。

あー、冷静に考えると、これってなんだかRPGみたいかも。

魔法使いと剣士、ドラゴン……まあギャンブラーは、なんか違う
ような気がするけど。

きつとこれが物語ならば、あたし達はこれからスリル満点な旅を

することになるんだろう。

そして、多分、もしかしたらだけど、ちょこつとずつ仲間が増えたりするのかな？ ……うん、そうだといいな。

出来れば、面白いスキルを持った人や、チートみたいな能力を持った人に出会いたい。

きつと、旅も段々楽しくなる筈。

だってせつかくの旅だもん！ 楽しまなくっちゃ。

あたしは風を受けながら、これからの事を想像した。

想像すればするほど、ドキドキワクワクが止まらなくて、高揚する気持ちが止められない。

高鳴り、騒ぎ出す。

不安もちょこつと混じってるけど……それよりも強いワクワクが、それを薙払ってしまう。

——ああ、これから行く所には、どんなものがあるだろう？　どんな人がいるだろう？　楽しみでしょうがない。

「わっ、太陽眩しー」

すでに見えなくなってしまった、ヒスイさんのアジト。

今度はいつ会えるのかな。

次会う時は、成長したあたし達を見せてあげたい。

そのためには、あたしが一番修行を積まなくちゃね……ギャンプラーとしても修行を積むけど、なるべく足手纏いにならないよう、戦いの前線に出られるような。

とすると、やっぱり剣士？　……イチチーに手解きを受けようかな。

「カエン！ ちょうどいいから、敵が来ないかそこで見張ってる！」

「私は後ろを見張ってますね！」

そんなイツチーの指示により、あたしは注意深くあたりを見張る事にした。

……イツチーの弟子になったら、一週間後には疲れて廃人になっちゃうかも。

人使い荒いし、鬼だし、怖いし。

剣士は止めて他のものにしようと。

——カラッとした太陽の光を浴びながら、あたしはこの雄大な景色を眺める。

シナルウ大陸っていったっけ、ここ。

ぶっちゃけ、このシナルウ大陸……まだオフガイアの国しか立ち寄ってないんだよねあ。

それなのに、もう大陸を越えちゃうなんて。

残念極まりないけど……しょうがないのかな？ あたしだけじゃなく、イツチーもチヨコも顔が有名っぽいし。

……有名な片割れを持つと、大変だね。

「——あ。見てください、あれ」

不意にチヨコの呼ぶ声が聞こえる。

あたしは引き寄せられるようにして——その視線を、自然と傾けた。

——オフガイアだ。

「……結界が、新しく張り替えられているみたいですよ」

「わかるの？ チョコ」

「はい。魔力の塊、でしょうか……またドーム状に包んでいるみたいですよ」

ふうん。

ま、粉々に粉碎しちゃいましたしね……そりゃ直すか。

あたしには朝靄が掛かっているようにしか見えないが、魔法使いのチョコが言うなら間違いないだろう。

ご苦労様だ、まったく。

「あの、ただの疑問なんですけれど……姫様はなんで、そうまでして国を守るんでしょうね……」

——チョコの疑問に、あたしは答えられなかった。

わかってる。

姫様が何故そうまでして守るのか、理由はわかっている……けれど。

口に出すと、悲しかったから。

もちろん姫様自信、あの国が好きだからそうしているのだろう。

でも……その気持ちの多くは、使命感。

自己犠牲から来る、悲しい理由。

姫様って、今まで自分のために行動したこと、あるのかな？
…

…純粹に、自分のためだけを思った行動。

うつん、ないだろうな……あの姫様だもん。

疲れないのかな、そんなに働いちゃって。

労働基準法とかこの世界にあったら、絶対引っ掛かってるよ。

——あたしはオフガイアの、森に包まれた大きな城を見つめる。

あそこには過去、たしかに姫様がいて……ヒスイさんもいて。

笑顔があつたんだろう。

……今は、妹姫とダイヤ達だけがいて……悲しみや苦しみで、悲壮感漂わす表情を浮かべてるんだろうな。

そう思うと。

なんだか、悲しかった。

「——カエン」

「？ んー？」

テラの背中から、イチーがあたしに呼び掛ける。

どうせ上を向いても見えないので、あたしはそのままの状態で。

「あの魔術師の妹とか——まあ、もろもろだけど」

「？」

「もしかして、お前が毎晩見てた夢って……あいつらか？」

……そっか、あたし、まだそれを教えてなかったっけ。

あたしは短く、「うん」とだけ返事した。

「やっぱりな……」

「さすがイチー、目の付け所が姑並み」

「やかましい」

「実は怖いっしょー。……二人とも」

いつもの声色を崩さないまま、あたしは問う。

でも……表情は、声色に似合わず、引きつりながら強張っていた。

そんなことはないと思っていても、時々不安になるんだ。

いつか、二人があたしを……戸惑いながら見つめるんじゃないかって。

そして……いつ爆発するかわからない爆弾を扱うかのように、よそよそしくなるんじゃないかって。

怖い。

とっても、怖い。

二人を信じ切れない自分が憎いし、罵りたくもなる。

でも、その不安は簡単に消えてくれない。

ドクンドクンと、心臓が早鐘を打つ。

嘘でもいい——怖くなんかないと、言ってくれれば。

そしたらあたしは、普通に笑えるから。

だから——

「怖いね、かなり」

「はい。私もとっても怖いです」

「——っ」

ズグリ、なにかがあたしを貫いた。

「かなり怖い——お前が死ぬかもしれないと思ったら、ものすごく」

「……え？」

「私もです。私も、カインちゃんが死んでしまうかと思ったら、すごく怖くなりました」

ハハハ、と。

ただの雑談でもしているような、二人の笑い声。

……いや、そうじゃなくて。

あたしが言ったのは、あたしが危険な人の片割れだっていう事で
あり……。

ん？　なんか意味がわからなくなってきた。

「おいカエン」

「え。あ、はい」

「お前中学生の頃の通信簿、なんて書いてあったか当ててやろうか」

「え！？」

「根は明るいがかなりの激情方、しかし疑心暗鬼に陥りやすい……ちなみに成績は言わずともわかっているだろうけど、最下位に近い」

「……っ」

「“ついでに泣き虫”」

「うわあああああん！」

あたしを元気づかせようとしてるのかそうじゃないのか、どっちだ馬鹿ヤロー！！

あたしはメソメソしながら、ブスツと膨れる。

……膨れたって見えないから効果ないんだけど。

「カエンちゃん。私達、信用ないですか？」

「！」

「あたしは自信ありますよ、カエンちゃんの側にずっといる自信が」

……いや、わかってますよ、本当はね。

照れくさいから言えないまま黙り込むしかないんだけど、勘のいい二人だ……あたしの気持ち、ちゃんと伝わっているだろう。

敵わないね、ほんと。

——あたしは笑みを浮かべる。

よかった、二人があたしの友達で。

「さて、そろそろ遺跡とやらが見えるんじゃないか？ テラのこのスピードだから、もう見えてもいい頃だろ」

「あつ——もしかして、アレじゃないですか？」

その言葉に、あたしは今進んでいる前方の方角を見た。

うつすらだけど……たしかに、遺跡のようなものが見える気がする。

遺跡っていうか、古代宮殿？　みたいな感じ。

「ヒスイさんの話によると、玉座のある部屋——つまり王様の謁見室だけど、その椅子の後ろに抜け道があるらしい」

「へー！　でも、なんで玉座にあんの？」

「多分、逃げ道じゃないでしょうか……。敵に襲われた時、王様だけでも逃げられるように」

「王様さえ生きてれば、そう簡単に国まで滅ばないからな。そのためだろ」

「つかー！ 悪知恵が働くねえ」

ただ単に、「俺ら王族だし？ 死ぬとか勘弁だわあ。あとは兵に任せりゃモーマンタイ！」なんて理由なんじゃなかるうか。

「あつ、ねえ！ お酒持って来た？」

「はい！ 私が持ってますよ。ドングリでしたっけ、“クヘージ” っていうお酒が一番好きらしいですよ」

「それを渡して、あとはドングリに任せる。俺らはトロッコで待つだけ」

……ふう。

何度も繰り返しているとは言え、緊張しちゃうな。

でも……頼れるヒスイさんはこの場にいないのだし、しっかしないとダメだ。

あたしは深呼吸をして、気持ちを落ち着かせた。

よし……よし、大丈夫。

怖くない、怖くない。

いくら身体が大きくて顔が真っ赤で足が早くても、いい人なんだから。

……あ、いや、モンスターか。

「近付いて来たな」

「いよいよですね！ トロッコで大陸を越えるって、どんな感じなんでしょうか」

「つかさ、足が早いってどれくらい早いんだろ？ ドングリが走って、三日で違う大陸に着いちゃうんでしょ？ 新幹線並じゃないのソレ」

「生身で新幹線並！ 凄いです！」

「……トロツコで新幹線並の速度か……ジェットコースターより酷いな。おいカエン、お前そういえばジェットコースター駄目じゃなかったか？」

「……………今のタイミングで言うなようわあああああん！」

イチーのおかげで思いだしてしまった、あたしの事情。

そう、駄目なんだよねー、ジェットコースター。

だからぶっちゃけ、今この飛行遊覧もちよこつと危険だったり。

だって怖いんだもん。

「……ま、どうせ一本道なんだ。ジェットコースターみたいな迫力はないと思うぞ」

「うう……胃がキリキリしてきた……」

「大丈夫ですよ、カエンちゃん！ ジェットコースター楽しいですから！」

「苦しいフォローありがとうチョコ……」

ホロリ。

涙を流すあたしだった。

「中は広いらしいけど、玉座のある部屋は入口を入ってまっすぐだ。迷うような場所じゃないらしいけど——……？　おい、テラ。どうしたんだ」

喋っている途中だった。

テラの異変にいち早く気付いたイチチーが、怪訝にしながら問う。

これは……？　もしかして、降下しているのか。

遺跡まで、まだまだ道程はあるというのに……テラはいつたい、

どうしたというのだろう。

結界が張ってあるのかと思ったが、チョコによると「とくに遺跡に異変はありません」、とのこと。

じゃあ、なぜ？

——三人で首を傾げながらも、テラにどうしたのかと聞く。

しかしそれを一切聞き入れずに、徐々に降下をするテラ……とうとう、地面に降り立ってしまった。

前足から逃れたあたしは、不思議顔をする二人が降りるのを待つ。

……なにかを感じたのだろうか、テラの表情に不安が見えた。

「テラ、ねえ、どうしたの？」

数秒間を置いて、人型に戻るテラ。

あたしは訝しげに見つめる。

言葉を話そうとしているのだろうか……どう言葉を使えばよいか、迷っている様子。

あたし達はそれを、辛抱強く待つ。

そして。

「……ひ、ひと……？ うじゃうじゃ」

「人がうじゃうじゃ……？ 遺跡にか？」

やっとつむぎ出された言葉に、イッチーがさらに問う。

テラはコクンコクンと頷いた。

「遺跡だし……見物に来てるんじゃないの？」

そう思ったあたしだが、テラはその言葉に、首を横に振る。

見物人じゃない、ってこと？　じゃあ……なんだろう。

「がいあ！　ひと」

「ガイア……の、人？　……まさか、オフガイアか！」

ITCHーのその言葉に、またもやテラは激しく頷いた。

……オフガイアの人、つまり、兵士……ってことじゃなかるうか。

オフガイアの一般人なんて、いくらテラでもわからないだろうし……。

わかつたとしたら、それは見た目がオフガイアの城にいるような格好をしている、ということ。

……バレている。

「どうする？ オフガイアの兵士でしょ、絶対いるよ……その……
…ダイヤとか」

頭を過ぎる——その姿。

太陽に照らされて輝くプラチナブロンドの髪に、月明りのように
煌めくダイヤモンドの瞳。

黙り込むあたし。

なんか……会いたくないような、そうでもないような。

なんだろう？ この微妙な気持ちは。

しかし予想に反して、テラはあたしの言葉に否定を返した。

「いない、におい、ない」

「……匂いでわかるの？」

「うー！」

そうなんだ。

……あれ？　なんでガツカリしてるんだろ。

あんな強いやつ、いなくてラッキーなはずなのに。

「それよりも、どうする？　いくらあの女顔兵士がいらないとは言え、城に使えてる兵士はいるんだろ？」

「うーん……あ、ねえテラ。兵士って何人いるの？」

「ううっ？　うー……なん、な……？　なんにん？　うー……」

……もしや、テラはまだ数字がわからないのだろうか。

キヨロキヨロしながら、テラはあたふたした。

しかしなにか閃いたかのように、地に落ちていた小枝を拾うと、地面に絵を描き始める。

少々歪ではあるが、それはあたし達が今向かっている……遺跡に見えなくもない。

テラはその遺跡のようなものの回りに、その辺に落ちている小石を拾い、一つずつ丁寧に置いていった。

——遺跡の入口に十個の小石を、遺跡周りには二個ずつ……一定の距離に。

さらにはその遺跡の周辺には、チラホラと。

……どうひねくれて考えても、人、だよな？ この小石が。

しばらく小石をジッと見つめるあたし達——不意にイッチーが口を開いた。

「テラ、この位置は正確なのか？」

その質問に、テラは元気よく返事を返す。

……嘘だと言ってくれえ。

「どうしますか？ この人数ですから、バレずに潜り抜けるのは……」

「不可能、だな。千世子が魔法使いなのもバレてるはずだから、この中の数名……やり手の魔法使いがいると考えるもいい」

「……さっそくピンチだね、あたしら」

同時に溜め息を吐いた。

「なるべく、争いは避けたいなあ……あたし」

「それはもちろんだけど、簡単にはいかないだろうな」

あたしはグルリと瞳を回し、肩を竦めた。

なんでこうなるのかな、あたし達って。

出発くらい見逃してよね！

そしてしばらく、あたし達は作戦を練った。

どう切り抜けるかを、あーでもないこーでもない、ただひたすらに。

テラの追加情報によると、どうやら遺跡の中にも兵士の匂いがするとのこと。

しかも、かなりの人数らしい。

両手いっぱい小石を抱えて並べようとするテラを見ては、あたしは気絶しそうになる。

—— たった三人の少年少女を捕まえるために、普通、ここまでやる？

かくなる上は…… テラに破壊光線を吐いてもらうしかないのだろうか。

あ、でもそれで通路まで破壊されたら、シャレにならないな。

「正面突破…… にしては数が多過ぎるし、監視の目をかいくぐるにしても、難しすぎるな……」

「…… 八方塞がり？ ってやつかな」

「八方塞がりどころか、これではすべてが塞がれてますよね……」

「…… はああ」

…… ああ。

やっぱり、無理してヒスイさんに来てもらえばよかった！

「うー！」

その時。

なにかを見つけたのか、テラは急に走って叫びながら、木の下でしゃがみ込んだ。

イッチーとチョコは作戦会議に夢中で気付いておらず、かわりにあたしがテラの元を追い掛けることに。

「テラ？ どうしたの」

テラは、その木の下に落ちていた不思議な葉っぱを指差して、ニコニコ笑っている。

多分、この木の葉っぱだろう——緑と言うより、ライムグリーンに近い。

……どこが面白いんだろう？ この葉っぱの。

残念ながら、あたしにはよく伝わらないけどなあ……その面白さが。

しかしテラは、とにかくその“なにか”を伝えようと、必死に「うー！」とか「あー！」とか唸っている。

「……？ そんなに面白いの？ それ、実はヤバいキノコならぬ、ヤバい葉っぱとか？」

「うー！ うー！ これ、ぐっすり！」

「？」

「これ、はっぱ、ぐっすり！」

……ぐっすり？ って、眠くなるってこと……かな。

あたしはその葉っぱを手にとって、匂いを嗅いで見た。

「ううっ！？ ルビィ、だめ！！」

「わっ——な、なに？」

匂いを嗅ごうとしたあたしに抱き付き、テラは手からその葉っぱをもぎ取った。

そしてテラは、数秒考えたのち……木の横をまさぐり始める。

「て……テラ……？」

ちょうど地面に埋まっていたのだろう……手のひらサイズのカブみたいなモンスターをそこから引っこ抜き、テラはあたしからぶん取ったその葉っぱを、モンスターに擦りつけた。

あれ、あたしにはやらなかったのにソレにはやっちゃったの？
ていうかそのモンスター可愛い。

——しかし、あたしはそのあと啞然とすることになる。

「う！」

ハムスターサイズのカブを差し出し、見てごらんとばかりにニコ
リと笑う。

ミニモンスターに触れる……という喜びに、あたしは快く受け取
った。

そしてすぐさまポカン。

……引っこ抜かれて、不機嫌そうに暴れていたはずのモンスター
が……。

たった数秒のうちに、それはもぐぐつすり眠ってしまったのだ。

うん、間違いない……この葉っぱには睡眠効果があるのだろう。

匂いを嗅いでしまっただけで、この熟睡度……パネエ。

あたしは心底、匂いを嗅ぐうとして妨害してくれたテラに感謝をした。

「うー！ これ、おきない！ おきるの、まっくらから！」

真っ暗から……ってことは、夜に起きるってことかな。

凄い……まだ朝方なのに、起きるのはそんなあとだなんて。

本当に起きないのかな……？ 気になったあたしは、手乗りカブモンスターをつついたり、抓ったり、ブンブン振り回したりした。

……うん、全然起きない。

うんともすんとも言いやがらねえよ、コイツ。

「テラ、この木の葉っぱだよね?」

「うー!」

「……よし」

あたしはニヤリとほくそ笑む。

これですよ、これ。

これさえあれば……兵士を切り抜けられる!!

「イッチー! チョコ!」

あたしは二人を呼んで、事情を説明した。

これを粉末状にして、兵士達に撒き散らす……ひねりのない簡単な作戦だが、それ以外にはないでしょ！

二人もそう思ったのか、頷くとすぐさま落ちている葉っぱを拾い始めた。

「千世子、お前はこれを粉末状にしてくれ。出来るか？」

「はい！ 石で粉々にして、水分を火の魔法で乾かせば………なんとか出来ます！」

「よし。……テラ、これって匂いさえ嗅がなきゃいいんだよね？ 鼻と口を布か何かで押さえれば問題ないのか？」

「う！ ない！」

「なら……カエン、テラ、お前らは地面に落ちてるやつを拾え。俺は木に登って葉っぱを落とす。大量に作るぞ」

おー！ と、あたしとテラは声を揃えて言った。

そしてすぐさま、荷物の中にあつた手頃な布を取り出して、それを口と鼻を覆うように巻き付ける。

……こんなもんかな？　なんか見た目盗賊みたい。

イッチーなんか目が鋭いから、まさにそれだ。

言ったら殴られるから言わないけど。

「さ、やるぞ」

「イエッサー！　ボス！」

「？　いえさ！　ぼす！」

そしてあたし達は、それぞれの作業に取り掛かった。

第一話 ？

身軽に木をよじ登るイッチー。

わさわさと木の枝を揺らして、葉っぱを落としていく。

あたしとテラは、それをちまちま拾いあげていた。

そしてそれを渡して、チョコが粉末にする……完ぺきな流れ作業が成立するわけだ。

時折テラとふざけ合いながら葉っぱを拾い、キャッキャッと遊ぶ。それをイッチーに怒られて普通に拾い始めて、また再びふざけだす……その繰り返し。

——多分、そんな感じで小一時間は経っただろう。

「これくらいでいいだろう」というイッチーの言葉で、あたしと

テラは拾う手を止めた。

……うーん、こんなにあると、かなりあまるんじゃないかなあ。

そうITCHーに言ったところ、「旅に役立ちそうだったから」と返され、あたしは啞然。

さすがITCHー……だてに成績優秀じゃないんだね。

「……よし、俺たちも手伝うぞ」

そしてその言葉により、あたし達は葉っぱ拾いから、チョコのやつていたすりつぶし作業に昇格をした。

適当な石を見つけて、大きめな岩に葉っぱを乗せ、粉々にする。

「あ、そうだ。思ったんだけどさあ、これどうやって兵士に嗅がせるの？ 撒き散らせばいいのはわかってるんだけど……一氣にみんなにやらないと、駄目じゃない？」

「あ、ご心配いりません。私が風の魔法を操りますので、滞りなく渡ると思いますよ」

「さっすがチヨコ！」

だてに魔法使いを名乗ってないね！ さすが、あたしの親友だ。

しばらくそうして、石でゴリゴリと葉っぱを粉々にするあたし達三人と一匹。

すべてを粉々にし終わったところで、チヨコが火の魔法とやらを使っ
て乾かしていた。

間違っ
て燃やさないようにと小さな火でやっている
ので、乾く
まで少々時間が掛かる模様……
それまで暇なので、あたしは無造作にポ
ケットに突っ込んでいたカブモンスターを徐に
取り出していた。

つい入れちゃったんだよね、放置するの
も心が痛かったし。

……しかし、見れば見るほど可愛いな。

ていうか本当に凄い熟睡度。

小さくけど、いびきも聞こえるよ。

「うー！ それ、とりがー！」

「トリガー？ それがこのカブモンスターの名前なの？」

テラは頷いて、カブモンスター……改め、トリガーを撫で撫でした。

「ひと、ペット、なる！」

「えっ、コイツこんな可愛い顔してそんな凄い事すんの！？ ……人をペットにしちゃうなんて、恐ろしい」

「うーう！ ちがう！ ひと……ひと……の？ ひとの、ペット
」！

ああ、なるほど。

人をペットにしてしまうわけではなく、人がペットにするという意味だったのか。

へえ、でも、ペットかあ……たしかにペットにしたくなる愛嬌はあるな。

見た目カブだけど。

土にいたし。

「……」

あたしはしばらく沈黙したのち……そつとトリガーとやらを、再びポケットに忍ばせた。

よし、飼おう、イチチーやチヨコには内緒で。

「イチーとチョコには内緒だからね？ あのパパとママ、厳しいから」

「うー！」

「えへへ、名前なににしようかあ」

トコトンお気楽なあたしである。

「——乾きました！」

その時、チョコの明るい声が響く。

どうやらすりつぶした葉っぱが渴いたらしい。

見ると、そこには粉末化された……それはそれは綺麗な綺麗なラ
イムグリーンが、あった。

どっかの怪しい妙薬っぽい。

むしろ、ほら、風呂に入れるあの粉のようだ……なんて言うんだっかな、ええと。

ほら、語尾にマロンだかメロンだかつくやつ！

あたしは眉間に皺を寄せて考え込む。

それに気付いたイチーが、呆れ顔を浮かべた。

さすがイチー、多分あたしの考えている意を汲みとっているのだろう。

そして、サラリとその答えを言葉にする。

「……バスロマン？」

「そーそー！ バスロマン！ さっすがあ、イチー」

いやはや、イチーの洞察力には敵いませんな。

まあ、あたしが分かりやすいだけなのかもしれないけど。

「とにかく。まずは限界ギリギリまで兵士に近付いて、これをまき散らそう」

「あとはチヨコの腕に掛かってるね！」

「任せてください！」

意気込むチヨコを見て、あたしも俄然やる気が出て来た……なんにもすることはないけれどね。

チヨコがしっかりやってくれるだろうから、心配はない。

しかし万が一のためにと、撒き散らすものとは別に、一人一握り分ずつ眠り薬を持ち歩くことに。

いつか必要になるかもしれない予備の分は、チヨコの荷物の中だ。
これで完璧。

「いいか、繰り返すぞ。俺が、このちり紙に包んだ眠り薬を投げたら、千世子が魔法で撒き散らす」

「そしたら、しばらく待ちます。四、五分…… ほどですか？」

「そう。兵士が眠り薬だと気付いて、息を止められたら困るからな。四、五分待てば苦しくなって吸うだろう」

「それにあたし達も吸っちゃったら、意味ないもんね！」

「ああ、いくら鼻と口元を布で隠していても、粉末状態にしているんだ…… 隙間から吸ってしまう可能性はあるからな」

「しばらく木陰でひっそりとしなくては……」

「たしかに。あと森にもチラホラ兵士がいるから、なるべく全体に届くように。兵士の位置はテラが描いてくれた通りだ」

「うー！」

「近くに行つて、まき散らして、ダッシュで離れて…… 四、五分待つ。いいな？」

イッチーの最終確認に、あたし達はしっかり頷いた。

「なにがあるかわからない。もし失敗したら、正面突破を余儀なくされる。……そうならない事を祈るぞ」

あたし達は立ち上がった。

向かうは、遺跡……いざ出陣だ!!

——そしてその意気込みが、早々に砕けるだなんて……この時のあたし達は知らなかっただろう。

あたしはチョコと走り回りながら、そんな事後的な事を考えていた。

「そっちに行ったぞー！」

「捕まえろっ!!」

「わあーん!」

「カエンちゃん泣かないでっ! 涙で前が見えなくなっちゃいますから!!」

——遺跡の中。

見事失敗したあたし達は、数分を掛けて追い掛け回されるというハメになった。

イッチーとその背に背負われた居眠り王子のテラは、多分まだ…この遺跡のどこかで今も逃げ回っているのだろう。

そう願っている。

何故失敗したのか。

それは、イッチーに背負われた居眠り王子——テラに原因がある。イッチーがさっそくとばかりに、ちり紙に包まれた眠り薬を投げようとした時……まあ運の悪い事に、テラが盛大にくしゃみをしたわけである。

そしてテラは、予備に持っていた眠り薬を落とし、すぐ魔法が使えるようにと準備していたチョコが驚きに発動してしまい……この先は詳しい説明など不要だろう。

あたし達の真下に落とされた眠り薬は、チョコの魔法によって広がり、咄嗟に布を強く押さえたがテラは吸ってしまい……イッチーが最初言っていた通り正面突破を余儀なくされた。

その時巻き上がった眠り薬は、数人の兵士にも掛かったようだったが……なんとまあ残り数名はいらんとところで頭が働き、即座に息を止めた様子。

結果、騒ぎになりました……と。

ハハハハハ。

「——くらえ眠り薬！」

埒があかないと、あたしは追い掛けて来る兵士に向かって、大声で別の物を投げつける。

騙された兵士は口元を押さえたが、残念無念……あたしの投げたビービー玉に引っかかり、見事にすっころんでいった。

どうだ！ カエン様の特製ビービー玉は！！

「しょぼいですが恐ろしい技ですね……」

「うひゃひゃひゃひゃ！ 兵士のくせにこけてやんのー！ だっさあー！！」

ちなみにコレ、イッチー考案です。

だいぶ前……イッチーが部活の勧誘で追い掛け回されている時に、使っていたのを見たのだ。

イッチーの時は「天井に裸の女のポスターが！」とか言っていたけど……あたしの場合、眠り薬が効果的かなあって。

騙された上、派手に転ばされ、拳句の果てには笑われる。

小さな尻の痛みと笑われる恥で心を砕く、地味でしょぼいけど、未恐ろしい技なのだ。

イッチーってば、ほんとやる事エゲツない……ほぼ精神的にくるんだよね。

……とくに転ばされたあとのイッチーの笑いなんか、無表情のまま見下したように「ハッ、その程度で俺を勧誘しようとか」、だからね。

語尾に、カッコ笑い、がつく勢いだ。

殺傷能力高過ぎでそこまで再現できないよ、あたし。

「——くうっ！ 追い掛けるんだ！ 早くっ！」

……しかし。

なんとまあオフガイアの兵士達、あれで心を砕かれず勇敢にも再び追い掛けはじめてきたではないか。

なかなかやるな……！ あのイッチー考案の作戦なのに、こうも早く立ち直るとは。

侮れん、オフガイア。

「どうしましょうカエンちゃん……！」

「むむう……これが効かないなんて思わなかった」

「生易しい仕掛けじゃダメです！ なにかありませんか？」

あたしは頭を抱えながら、とにかく走る。

なにか……なにかないだろうか、さらに心を砕くようななにかが！

……って、精神に攻撃する仕掛けじゃなくてもいいんだよあたし
！！

「でもっ……あたしが知ってる仕掛けどれも精神攻撃だーッ！」

そしてすべてがITCHーの受け売りです。

あのサド公爵め！ 余計な知識をあたしに植え付けやがって！！

……なにか、ないだろうか。

なんでもいい！ 兵士の足を止める事が出来れば……。

「——そうだ。チョコ、時間を止める魔法とかないの！？」

「じ、時間を止める魔法——ありますけど、魔法は走りながらじゃ使えません！ 止まって描いても、時間系の魔方陣は最低でも……五分掛かります！！」

そんなに難しいのか！ くそうっ……五分も突っ立っていたら、すぐ押さえられてしまう。

いや、でも、五分間足を止められればそれは可能なわけで……。

「たった五分間……！ なんとかして止められればいいんだけど……」

「たった五分間ですが、インスタントのうどんが作れますよ!!」

「なんて長い時間だ!!」

あれを待つ時間というのは、拷問に等しい！ 腹が減ってる時は尚更だ!!

「ああっ、兵士が増えてます！ 囲まれたら終わりですっ」

「……うっ！」

テラのようになっちゃった。

ってそんなことより、さっさと打開策を練らなくては……！

ああ、チョコもヒスイさんみたいに、魔方陣無しで魔法が使えたらしいのに！

そしたら走りながらも……。

……あれ？

「チヨコ！」

「は、はいつ？」

「ヒスイさんって、なんで魔方陣無しで魔法使ってるか、知ってる！？」

「あ——それはたしか、手のひらに魔方陣が描いてあるからだそうです！」

チヨコ曰く。

それぞれ属性にあった魔法であれば、手やら腕やらに描いて、発動することが出来るらしい……杖と魔方陣は必要なくなる。

魔導書だけは必要だが、熟練者ならば持っているだけでOK。

ただし、以後その魔方陣を消さない限り、他の魔法は扱えないんだそうな。

「チヨコはたしか——」

「……風、です。時間は使えません……。それに時間は基本属性に含まれてないので最初から不可能なんです！ それにあれができるのは、獣人のような人間からかけ離れた体力の持ち主だけ……！」

「くっっ！」

これもダメなのか……なす術がないじゃないか。

いや、まだ諦めるな。

まだなにかあるはず……そう、考えなくちゃ。

——そんな時。

あたしの頭に髪が……じゃなくて、神がご光臨された。

その閃いた内容は、成功するか不確定で確信は全くないけれど……でも、ここに来てからあたしが閃いて実行した事で、ほぼ間違いはなかった！ ……ほぼだけど。

でも、可能性に賭けるべきだ……不安だけれどしょうがない。

「チョコ！ ペン持つてる！？」

「ペ……ペン？ あ、はい……一応……」

「よし！ あたしが閃いた作戦やるよ、耳かして！」

あたしは、走ながらチョコに耳打ちした。

——あたしの作戦。

それは、大変確率が低く危なっかしいものだ。

まず、先ほどチョコに聞いた人体に描く魔方陣……時間を止めるものを、あたしの手に描く。

属性については、まさに賭けだ……。

あたしには属性がないみたいだから——そう、もしかしたら……

もしかする。

運がよければ発動するし、悪ければ……捕まるしかない。

耳打ちが終わった所で、あたしはチョココの鞆をまさぐって、ペンを取り出して渡そうとする。

しかし、チョココがおおきく拒否をした。

「わ——忘れたんですか？　これは、人間には不可能です！　体力のある獣人しか——！」

あたしは、「でも」と……チョココの言葉を遮った。

「あたしは、回復力が早い——でしょ？」

「……！」

「体力はたしかになくなるだろうけど……あたしならすぐ回復できる。今はこれしか、方法がない」

あたしはチョコをしっかりと見つめて、ペンを再び差し出した。

そのペンを見つめながら……チョコは数秒考えて、それを受け取る。

「絶対——絶対回復しますか？ 気絶をしませんか？ もしかしたら一生目覚めずに……」

「大丈夫」

あたしは手を伸ばして、チョコの頭をわしゃわしゃ撫でた。

チョコはクシャクシャになった頭を直すため、撫で付けながらも……不安そうな表情を未だに浮かべる。

……心配性だなあ。

ま、そこが可愛いんだけどね。

——あたしは、まるでヒーローが参上した時のように、腕を斜めに掲げる。

大丈夫、あたしの、「これは絶対イケる!」と思った時の勘ほど……うまくいくんだから!!

「主人公は——絶対死なない! 物語の掟だよ!」

「……」

「まっかせなさい! このあたしが、そんな早くくたばると思うの? むしろ早くくたばりそうなのはイチチ……あ、いや、あれはすぐ生き返るな」

クスリと笑う、チヨコ。

「んもう! そんな事言ったのバレたら、櫟くんに睨まれちゃい

ますよ？」

「……え、言わないよね？」

「……」

「ええええええええ！？ 言わないでよおおおおお！！」

半泣き——もとい普通に泣いて懇願するあたしに、チョコは苦笑しながら呟く。

「——もし起きなかったら」

「！」

「櫛くんに、チクっちゃいますからね！」

……ハハッ、そりゃ参った。

意地でも起きてなきゃね。

——あたしとチヨコは、視線を交わして、同時に頷いた。

「成功するかはわかりませんが——成功した場合、遺跡全体の時間が止まるのは、三十分弱になると思います。その間に櫟くん達を見つけられれば、王座の間にいる兵士さん達も……止まったままになるはずです」

「イチチー達も止まったまま？」

「私達が探して、二人に触れない限りは。だから……」

「触っちゃダメなの？ 兵士に」

「はい——これをやる場合、発動者は二人になってしまうので……。私達は絶対、兵士さんに触れてはなりません。少しも」

……できる、よね？ 気をつければ、なんとかかなりそうだけでも。

まあ、成功した場合、と考えて置こうか。

「カエンちゃん、時計はありますか？」

「あ……うん。ヒスイさんにもらったやつなら」

「では……。発動したら、敵は止まるはずです。三十分弱……二十分と考えましょう、確認をお願いします」

「……オッケー」

ドキドキする。

失敗が怖くて、少しじゃなくかなり不安だ。

……でも、これしかない。

「——いたぞー！ 囲め！！」

ちょうどよく、少し離れた前方から……兵士が現れた。

あたしは叫ぶ。

「チョコ！」

「は、はい！」

差し出した手のひら。

少し震えながら、チョコはあたしの手に魔方陣を描き始めた。

手のひらサイズの魔方陣なので、五分もいらな……走りながらスラスラ描くチョコを見つめながら、あたしの心臓は早鐘を打つ。

「捕まえる……！」

もう、目前に迫る兵士達。

走るのを止めた。

あと少し——ちよつとだ!!

「——範囲、ここを中心とした半径三百メートル！ 自然に流れし永久の時間を塞き止めよ！」

じわり、と。

あたしの身体でなにかが這った。

間違いない……成功している、のだけど。

——ヒドい、感覚だ。

「カ……カエンちゃん！」

「……っ……だ……い丈、夫……！」

ガクンと落ちる膝。

チヨコに肩を借りながらも、あたしは懸命に意識を保つ。

気絶するわけには——いかない！ 何故なら……——

イッチーにばらされたらあたしは終わるからっ！

「——と」

「……はあ……っ、はあ………チヨコ……？」

あたしは顔を上げた。

そして、たしかに見る。

「止まり……ました」

——硬直するかのようになり、身動きをしなくなった……兵士達。

息が上がったまま腕につけている時計を見て、あたしはすぐさま記憶した。

今から、二十分。

……ヨロヨロしてる場合じゃないな。

「っ……く」

「！だ、だめですカエンちゃん！二、三分だけでも……」

「そう……は……、言ってるんじゃない、でしょ……」

数回深呼吸を繰り返す——いける、大丈夫だ。

徐々に回復していくのが、わかる。

動けるなら、今動いておかねばならない。

「二人を探そう……あたしならもう大丈夫」

「……本当、ですか？」

「もちろん！ 心配し過ぎだって」

……身体にまだダルさは残るものの、身体が動かないわけではないようだし、ね。

ちゃっちゃんと二人を探さなくっちゃ。

あたしは、少し震える膝を押さえながら、ゆっくりと立ち上がった。

どっちに向かおう……完全にはぐれてしまったし、皆目検討もつかない。

「あ、そうだ」

と、ここで。

あたしはふと気になったことを、チヨコに問う。

「触れたら動くって事は、その人が持つてる物とかも触れちゃいけないの？」

「え？ 物ですか？ ……えーっと」

取り出しやすいところから現れた魔導書。

チヨコは急いで魔導書をめくり、見つけたらすぐに答えた。

「衣類越しに人を触ったら動いちゃいます。体温が伝わるような事をしたら、アウトということですね。でも……体温が伝わらないのであれば、大丈夫だそうです」

なるほど。

それを聞いたあたしは、慎重に近付き、他より身なりのいい兵士の腰にある、剣を抜き取った。

鞘は……どうしよう、動いたら困るしなあ。

大丈夫かな？

「あ、剣が欲しかったですか？」

納得したようにチヨコが呟く。

「うん。……取れるかなあ、鞘も欲しいんだけど」

ITCHーの持つてる剣——焉鯨神劔だっけ？ ITCHーは鞘なしの裸で持ち歩いてるけど、あたしは鞘があつたほうが何となく安心する。

危なくないしね。

「あ、それでしたら……その剣で、鞘と繋がっているそのベルトを、千切ってみては？ 剣でやれば、体温は伝わらないのですし」

「ほほう、なるほどね。……よし」

あたしは慎重に、剣を持った腕を伸ばした。

鞘に繋がっているベルトを千切るため、ゆっくりと。

「……あつ、あとちょっと……」

なかなか切れ味のいい剣だったのか、順調に進んでいく。

「ほんのちょこつと……あと——よし来たッ！」

カランと音を立て、目当ての物は床に落ちる。

我が物顔で、あたしはそれを拾った。

……が、しかし。

「——きゃあああッ！」

チヨコが、両手で真つ赤になった顔を隠す。

……ベルトを千切ってしまったせいで、落ちなくてもいいズボンまで落ちてしまったようだ。

あたしは力なく笑う。

「ハハッ……遅しくも見事な水玉パンツ」

「説明しないでいいです！」

チヨコが叫ぶ。

まったく、本当にうぶなんだから……ああでも、イチチーの風呂上がりの時も、こんな感じだった気がする。

あたしはイチチーで慣れたのもあるし、元々気にしないタイプだったので……普通だけれど。

このままでは純情姫チヨコが可哀相だったので、この場を離れるため、服を引っ張った。

チヨコは顔を隠してるから、前が見えないしね。

「さーて……三分経ってる。案外休憩出来たね」

「急ぎましょう!」

「うん。戦利品もいただいたし! ここにもう用はない!」

あたし達は、走った。

どこにいるかわからないイッチーと、テラを探して。

……ていうか、ここに来てから追い掛けられてばっかだなあ。

といつても、まだ二回なんだけど。

あーでも、元の世界で先生に追い掛けられた回数を合わせるなら、そりゃもうすごいと思う。

自慢にならないけど。

「どこにいるかなあ？」

「……櫟くんのことです。逃げまわりながらも、王座の間に近付いてそうじゃないですか？」

「たしかに！ あのちゃっかり王子ならやりかねないね！ ……王座の間、わかる？ だいぶゴチャゴチャ歩き回ったし」

「多分……わかんと思います。こっちに行きましょう」

そして、チヨコの案内のもと、あたしは王座の間へ行くことに。

本当にいるだろうか？ ……無事だといいいんだけど。

そんな感じで、五分少々。

あたし達は走り続けて……やっと王座の間へ来た。

息が上がっていたので、扉の前二人で肩を上下させる。

走りっ放しだったからね……あたしはいつもなら、これくらいへっちらなんだけど。

あ、いや、たしかに長距離走は苦手なんだけど、体力がないわけではないんだ。

まあ、しかし、今のあたしはその自慢の体力が、目一杯奪われちゃったから……回復するにせよ、ヒスイさんの言った限界値というものもある。

一度寝たら最後、一週間も寝てたら、洒落にならない……気を付けないと。

だがしかし、今は辛そうな素振りを出来ない。

チヨコが心配するのが……目に見えてるから。

だからあたしは女優さんよろしく、気丈に振る舞いつつも……その重々しい両開き扉を全体中掛けて、押した。

ちゃんと、固まったままの兵士達……よっかたと安堵する。

しかし、ホツとするのも束の間——目の前に広がる光景に、あたしとチヨコは愕然とした。

「いつ、イツチー!？」

「櫟くん!!」

ちょうど、このでかい部屋の真ん中あたり。

そこには、テラを背にして戦う……イツチーの姿があった。

よく見ればあたりに数名、倒れこんでいる兵士もいる。

……すごい。

たった一人で、こんな数を相手にしてるなんて。

度肝を抜かされる光景に、もう啞然とするしかない。

しかし、のんびりしている場合ではないのだ。

あたしは時計を見る。

——すでに十五分経ったから、あと五分で二十分経ってしまう。
急ぐ。

「チョコー！」

「は……はいっ！」

合図を促したあたしは、先にツチーの高々と掲げている剣をひったくった。

勢いあまって振り下ろされたら、シャレどころか、明日の朝日を拝めなくなるからね。

あたしが数歩離れたところで、まずチョコはテラに触れた。

——まるで、息を吹き返したかのように。

ゆっくりとしたテンポで、テラは寝息をたて始める。

あ、そっか、寝てたんだっけ。

そして次に、チョコは慎重にイチーへ触れる。

次の瞬間。

「この桃色兵士がッ!!」

……と、言いながら。

イチーは兵士に向かって、架空の剣を振り下ろした。
振り下ろしたあとで、イチーはハッとして振り返る。

沈黙があたり達を包んだ。

「……」

「あ、あの……櫟……くん？」

「……」

「お、おい……イッチー？」

「……」

勘のいいイッチーだから、色々考えつつ、今は無言で己の恥と戦っているのだろう。

静寂に包まれた部屋で意味のわからない暴言を吐き、盛大な素振りをかましてしまったのだから。

「……」

「……あ、櫟くん。ええと、時間を止める魔法を使いました。余裕をもって、効果はあと三分くらいと考えています」

「……そう」

「あ、あと……危ないと思ったので、カエンちゃんが剣を抜き取っておいてくれました」

「……うん」

「イッチー、穴掘るの手伝おうか？」

「……頼む」

相当恥ずかしかったようだ。

ボケにボケを返されてしまったよ……イッチーにしては珍しい反応である。

穴があつたら入りたい、まさに今なんだね。

「さ、さあ！ 今のうちに地下通路へ行きましょう！」

「ほらほらイッチー！ 剣持って！ 意識も拾って！」

「……ああ」

「チヨコ！ 扉を開けて！」

「はいっ！」

ITCHーが落した意識を拾う間、チヨコはヒスイさんに言われた通り、地下通路に渡るための特別な魔方陣を壁に描き始めた。

王座の後ろにある壁だ。

杖でそれを滑らかに描いていく様は、物語に出て来る本物の魔法使いのようだった。

……この世界じゃ、当たり前事で、チヨコは本物の魔法使いになるんだけど。

この先に、どんな物語が広がっているんだろう……そしてこれは、書物にあるようなドキドキワクワクの物語じゃない。

あたしが、あたし達が体験している……危険極まりない物語だ。

……ドキドキワクワクになるかは、あたし達次第。

「そうだ、カエン」

やっと拾って来た……ついでにテラも拾いなおしたのか、意識を完全に取り戻したITCHーが、あたしになにかを差し出しながら言った。

その差し出されたものを見て、あたしは首を傾げる。

「なに？ その……どこの映画に出て来るような、ちっこい杖は」

差し出されたのは、あのヒット映画に出て来るような、丈が手のひら二個分の細い杖。

古臭い杖だ……でも、アンティークって感じがしないでもない。

訝しげにそれを見るあたし。

「イチーもイマイチ状況を掴んでいないのか、不思議そうな視線をそれに向けながら、言った。」

「渡されたんだ。あの……変な人、に？」

「あたしに聞かないでよ！」

長々とした呪文を唱えているチヨコを伺いながらも、一応それを受け取る。

「誰に渡されたの？」

「……」

「？ イッチー？」

「……いや、それが……」

イッチーにしては、歯切れが悪い。

こんな状態になってしまふほど、先ほどの羞恥心はデカかったのだろうか。

「違う」

「バレてるし」

「……とにかく、お前にやれって渡されたんだよ。まずは千世子が通路を開くのを待とう。それから、詳しく言う」

……疑問は残るものの、どうやら今すぐは答えてくれそうにない。

多分、頭の中で整理しているのだろう。

いつたい……はぐれてから何があったんだろう？

「——光からの封印、古より伝わる通路を開きたまえ」

チヨコの澄んだ声、そしてその杖で、カンツと魔方陣をつつく。

ガラスを叩くような音のあと、描かれた魔方陣は粉々になった。

チヨコが耳を塞ぎながら、振り向く。

「耳を塞いでください！」

あたし達は、すぐさま耳を塞ぐ。

その時イチチーがテラを落としてしまった事については、ご愛嬌である。

——耳を塞いだと同時に、多分魔方陣があつた辺り……そこから物凄い騒音が轟いた。

壁が動く音……と、最初は思ったが、違う。

そんな鈍い音ではなく、これは皆が鳥肌を浮かべ嫌な顔をする……あの音だ！

「んにゃあああああー!」

「うぐっ……!？」

「あうっ!」

……そう、今では懐かしき、あの音。

授業中、眠りこける生徒があまりにも多かった場合……あの鬼の村上が、毎回やっていた。

——キイイイイン! と、いうような。

あの音……そう、黒板を爪で引っ掻いたような、アレだ。

あたしは涙を浮かべて叫ぶ。

「ごめんなさい村上センセエエエエエ! 許してーッ!」

「気をたしかにカエンちゃん……! あうっ!」

「意識を落とすな！」

そりゃお前だろ！

とは言えない。

にしても、本当にヒドい音だ。

まるで拷問……あの村上も顔が真っ青だろう。

つつか、黒板一個のレベルじゃない。五個？ いや、十個だ。

頭が割れそう——！

「最後の最後、もっと酷くなります！ 踏ん張ってください——！」

「つぎい……も、もう——」

ダメ、そう言おうとして。

とてつもない爆音に、声は完全にかき消された。

「——よく、耳を塞ぐんだよ。じゃないと鼓膜が破けてしまう」

「……えっ？」

突如聞こえた誰かの声。

一瞬イッチーだと思ったので、咄嗟にそちらを振り向くが……違う、イッチーじゃない。

だ、誰、今の。

男の人……だったよね？

ま、まさか——！

最後の、シャンデリアが落ちたような凄まじい音のあと。

途端静寂に包まれた中……あたしは恐怖に表情を染め、間髪を入れずに叫んだ。

「うおおおおおおおオバケええええええっ!!」

「ぐあっ……!!」

「ひうつっ!」

一気に気を抜いていた二人の耳に、加減なく突き刺さるあたしの砲声。

イチーの拳骨が頭にクリーンヒットした。

「痛いだろうが馬鹿野郎！ 叫ぶないきなり！」

「ぶわああああん！ 頭痛いイイイ！」

「ぼ、暴力はいけません櫟くんっ！」

急いで止めに入るチョコ。

しかしITCHーのお叱りは止まらない。

「この野郎、なにがオバケだ！ 今のほうがさっきのより食らったぞ！！ 気絶させる気か！」

「うわああああん！ パパが怖いよおお！」

「あわわわ！ よしよしカエンちゃん」

「いきなりなんなんだ！」

「だ、だって！ お、おばおばおば」

「ぶくくっ……、ん、ん んっ。オバケがいたんですか？」

「え、今笑った？」

とにかく、イッチーの「お前絞める」みたいな眼力が超怖かった
ので、あたしはおとなしく先ほどの事情を説明した。

一番うるさかったはずの騒音の最中、声が聞こえるはずもなかったのに聞こえた、その言っていた内容等々を。

——それを聞いたイッチーとチヨコは、不気味そうにして押し黙った。

そりやそうだよね、声が聞こえるはずなかったんだもん。

黒板拷問の時なら、なんとか聞き取れたけど……最後のはどう考えたって不可能である。

でもあたしは、たしかに聞いたのだ。

男の人の、声を。

不安そうに、あたしはイッチーとチヨコを交互に見た。

とくに、イッチーを集中的に眺める。

幽霊といったら彼しかないでしょう。

しかしイッチーは、まわりを見ようとせず………なにか確信めいたように、小さく頷く。

そして言った。

「歩きながら説明する。今ので何分経った？」

「あ、もう六分経ってる！ 急ごう！！」

あたし達は、颯爽と走るようにして、地下に続く通路へ向かった。
最後だけチラリと、王座の間を見てから。

……… いったい、なんだったんだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5677x/>

裏 VS 表

2011年11月10日16時01分発行